
東方泉遊録 ~ autumn hot spring ! ~

夜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方泉遊録 〈 autumn hot spring 〉

【Nコード】

N1252X

【作者名】

夜斗

【あらすじ】

ひよんなことから幻想郷へと誘われた温泉旅館の少年、草津水織。紆余曲折を経て、何故か彼は秋を司る姉妹の神様と共に銭湯を経営することになってしまった！？

戸惑う少年と、憂い嘆く秋の姉妹。

そんな三人の出会いを果たしてどんな物語を紡ぐのか。

始まりは、とある少女の小さな戯言だった……

オリジナルキャラ+東方キャラのお話。

苦手な人はご遠慮ください。

序章 それは小さな戯言から（前書き）

このお話は「東方project」を題材とした二次創作です。
作者による独自設定や偏見、解釈等が多々含まれております。
それらが苦手な方はすぐに「戻る」をクリックしてください。

序章 それは小さな戯言から

「幻想郷に銭湯とかあれば便利よね」

それは秋も深まり、北に望む妖怪の山全体が朱色に染まり始めた頃。

博麗神社の縁側に腰掛けながら八雲紫^{やくもむかり}は何となしにそう呟いた。

「……はあ？ いきなり何を言ってるの」

今まさに湯のみに口をつけようとしていた博麗神社の巫女、博麗^{はくれ}霊夢^{いれいむ}は紫の言葉にあからさまな嫌悪の表情を浮かべながら半眼で彼女を睨んだ。

紫はほら、と指を立てながら続ける。

「温泉探すのって大変でしょう？ 地面を調査して、それから掘って汲み上げなきゃいけないもの」

「いや、ずいぶん前に地霊と一緒に間欠泉が湧いたじゃないの。温泉に入りたければあその温泉でいいでしょ」

「あれ一個じゃつまらないじゃない。知らないの？ 外の世界にはいろんな種類の温泉を集めた、スーパー銭湯だなんてモノもあるのよ」

「温泉……ねえ。別に嫌いじゃないけど、自分で掘ろうとは思わないわね」

湯のみの茶をすすって霊夢が一息つく。……とは言ったものの、決して悪い話ではないと思った。

度々起こる異変や宴会の準備、そして博麗神社の巫女としての辛く厳しい活動の日々（自称）で疲れ切った体や心を癒すに、銭湯や

温泉はちょうどいいかもしれない。

前回は結局地霊のせいで賽銭獲得には繋がらなかったが、人為的に作られた銭湯となれば危険もないし、案外容易いのではないだろうか。

神社のすぐ近くに作って『博麗の湯』だなんてちよつと気取った名前にして、ついでお饅頭とかお煎餅とか作って売ればかなりの利益になるのでは？ いやいや、むしろ神社の賽銭よりも断然収入が上に決まっている。いつそ巫女を辞めて銭湯を切り盛りするのも悪くは――

と、あれこれと考えを巡らせていると紫のジト目にギロリと睨まれた。

「……今、何か不純な意思を感じたわ」

「失礼な。自分の将来を本気で真剣に悩んだだけよ」

「とどのつまり、貴女は銭湯の案については賛成ね？」

紫の突然の案に霊夢は少々引つ掛かりを感じたが、首を傾げ思考した後渋々とうなずいた。

すると紫は立ち上がり、そのままスツと右手を水平に薙いで“スキ間”を開いた。

「ふふふ。なら、さっそく専門の人を探しに行かないとね」

「なら妖怪の山の河童でいいんじゃないかしら？ アイツなら機械に強いみたいだし、そういうコトに精通してそうじゃない」

「何言ってるのよ霊夢。ここの住人じゃ銭湯なんて文化を知ってる人間や妖怪だなんていないわ」

「はあ？ 文化も何も、そんなの紫が直接説明すればいいじゃないの」

「それじゃつまらないでしょ」

今度は霊夢がジト目で紫を睨む。

何がつまらないんだかさっぱりわからない。ついでに紫の言いたいこともイマイチわからない。

その見かけどりの胡散臭い言葉に霊夢が怪訝そうに顔をしかめていると、対照的に紫は悪戯っぽく口をつり上げ軽く笑みを浮かべた。

それは、何か善からぬ事を企むような顔だった。

「いつそ、外の世界から誰か落ちてくれればいいのにねえ……」
「……ちよつとまさかアンタ……あッ！」

紫の言葉の真意に気づいた霊夢が手を伸ばしたとき、既に紫の姿は“すき間”と共に忽然と消えていた。

序章 それは小さな戯言から（後書き）

お待たせしました。

東方二次創作シリーズ新作『東方泉遊録』 autumn hot
spring ！』がスタートです。

相変わらずあやふやな知識ですけど、その時はご指摘よろしくです；
早速怪しいけど……

序章の間はとりあえず1日1話でいきます。

それと、今作では1話1話のクオリティ向上のため少しだけ更新速度をゆつくりにします。

だいたい、3日に1話ぐらいを目標に頑張っていくつもりですが、調子が良ければ1日1話に戻ったりするかもですw
つまりは気分次第；

そして今回の主人公は男の子、ヒロインは秋姉妹です。

え？ どっちがメインかって？

それはまあ……お楽しみに。

では、新作をこれからまたよろしくお願いします。

今日は短くてすみません……；

静「私たち」

穰「まだ出てないよ!？」

夜「悪いが、しばらく出番はないと思え」

第一話 旅館『暁の湯』

「こらあ！ 水織、待ちなさいッ！」

「はッ！ 姉貴に捕まるわけねーだろが！」

草津水織は背後より迫りくる姉の脅威から逃れるため、磨き立ての長い廊下を全力疾走していた。

勢いをそのまま角を曲がり、階段を二段飛ばしで駆け降りロビーを目指し突き進み、突き当たった角を右に曲がろうとした瞬間、突然目の前に人影が現れた。

「きゃッ！」

「うおわッ！？」

顔面に何か柔らかいものと正面衝突し情けなく後ろに倒れてお尻を打ちつけてしまった。

痛みに顔をしかめながら水織はぶつかった何かの方へと視線を向ける。

「あつたた……だ、誰だよこんなトコでボケッとしてるのは……って！？」

水織が顔を上げると、目の前には黒のカーディガンに身を包んだ女性が同じように尻もちをついていた。

その女性の姿を視認した途端、水織の胸の鼓動が急激に早鐘を打つ。

女性はゆつくりと立ち上がると呆然とする水織に優しく手を差し伸べてくれた。

「ごめんね。怪我してない？」

「は、はい！　だ、ただ大丈夫です！」

大袈裟に声を張り上げ立ち上がると、女性はクスリと微笑を漏らした。

漆のように艶やかで長い黒髪、雑誌のモデルに負けないスラリとしたプロポーションに清楚で穏やかな容姿。

この温泉旅館『暁の湯』の客の一人であり、水織が今最も憧れる女性。

「は、葉月さんッ！？　ってことは今の感触……じゃなくてッ！

あの、怪我とかしてないですか！？」

時雨葉月（しぐはづき）は一瞬キョトンとした顔になって、それからもう一度微笑みかけ狼狽（うろた）える水織の頭にポンと手を置いた。

「うん。私は大丈夫。でも、旅館の中で走ったら危ないんじゃない？」

「す、すみません。凶悪な姉から逃げてる真っ最中で」

「焰佳さん？　だったらほら、早く逃げないと」

「え？」

葉月が水織の後ろをちょんちょんと指差すと、鬼の形相に引けを取らない和服姿の姉が立っていた。

両手を組んで獣のように瞳をぎらつかす、それはまさに水織を喰らおうと立ちはだかる凶暴な鬼そのものだった。

「水織……覚悟はいいかい」

「ば、バカ！？　この旅館の若女将がお客様の前でそんな態度を取る気かよ！？」

咄嗟に後ろの葉月を指差し水織が叫ぶ。

姉はこの旅館の若女将、接客が命である旅館の女将がお客の前でそんな不作法な真似はしないはず。

そう高を括った水織に反し、姉はニツコリと営業スマイルなんぞ作って、

「葉月さん、ちょっとだけいいかな？」

「ふふ、どうぞ？」

「たった今そのお客様から許可が下りたわ」

その間約二秒弱。

バキバキと満面の笑顔で指を鳴らす姉の姿に水織は戦慄した。

「ぐッ……！ 女つ気が無い上に汚い、そしておまけに胸は断崖絶壁ときた。そんなんじゃ一生嫁の貰い手がないっての！」

「んな……ッ！ だ、誰が断崖絶壁だ！？ てか関係ないだろ！ あ、何処行く！？」

「姉貴もちったあ葉月さんを見習えっての！ じゃあな！」

姉の一瞬の隙をついて水織が飛び出し、しっかりと捨て台詞を吐いてからロビーを出ていく。

後ろ姿を追いかけようと手を伸ばそうとして止め、草津^{くさつえんか}焰佳は大きくため息をついた。

「ああもう！ また逃げられたよ……ったく」

「あつはは。相変わらず元気な弟さんだ。焰佳さんがちょっと羨ましいよ」

そんな葉月の言葉に焰佳は半眼で答えた。

「……あんなスケベでどうしようもない弟が？」
「そうなの？ その割にはずいぶんと楽しそうだったけど？」

葉月の言葉に焰佳の顔がわかりやすく、しかし一瞬だけ赤くなる。

「そ、そんなコトないさ。口の減らない弟に毎日手を焼かされても
ううんざり」

「ふふ。どうせなら写真撮っちゃえばよかったかな」

そう言つと、葉月はウエストポーチから小さなデジタルカメラを
取り出した。

葉月のカメラの中にはこの旅館の裏手にある赤月山で撮影した自
然風景が収められている。

カメラを手にした葉月を見て、思い出したように焰佳は言った。

「そういえば葉月さん写真家目指してるって言ってたね。調子はど
うなのさ」

「うん、いい感じだよ。流石おじいちゃんが惚れこんだ場所って感
じ」

「天高さん……か。どんな人だったんだろうな。うちの爺ちゃんと
友達だったってのは聞いたけどさ」

焰佳と水織の祖父にあたる草津委泉^{いせん}は、葉月の祖父である時雨天^{しぐれあま}
高^{たか}と友人だったらしい。

この温泉旅館『暁の湯』は、標高約三千メートルの赤月山の麓に
位置している小さいながらも古風で立派な旅館。

委泉は生前、この赤月山の景観に心底惚れこみ全財産をつぎ込ん
でこの旅館を作り上げたそうだ。

そして旅館を経営している最中、赤月山の風景を撮影に来ていた

天高と出会い親睦を深めていたらしい。

「本当に綺麗な山だよ。四季をハッキリと感じさせてくれるし、何より紅葉もみじがとっても美しいの」

「……紅葉こうようは秋の神様の贈り物プレゼント」

「え？」

焰佳は窓から見える、燃え盛る焰のように真っ赤な山の斜面を眺めながら言った。

「枯れ木の山を見たって味気ないだろ？ 人に恋する秋の神様は、想い焦がれた人間のために何か出来ないかって考えて山を紅く染めたのさ。それこそ、恋する自分の頼みたいに真っ赤にね」

「へえ……素敵なお話だね」

うんうんと真摯に感心するように頷く葉月を見て、焰佳は少しだけ意外そうな顔になった。

「……おや、そんな簡単に信じるのかい？ 葉月さんはもったとう、現実的な人間なのかと思ってたよ」

「ロマンチックで素敵じゃない。私はそういうの、好きだよ」

「ふうん……」

それが女っ気ってヤツかね。

ぼそりと呟く焰佳の表情は真剣そのものだったが、それを葉月が見たかどうかはさておき。

「それで、今日は何をするんだい？ また山に行くのか？」

「そのつもりです。でも、その前にお風呂借りてもいいですか？」

「ああもちろん。今日の女風呂の朝一番は葉月さんってわけだ」

「えへへ。ちょっと得した気分です」

露店風呂はさつき掃除を終えたばかりでまだ誰も一番風呂を浴びていない。

この旅館の露店風呂は目の前に広がる紅葉が一番の名物で、焰佳はそれこそが日本一だと自負している。

……というより、今一番気になるのはそんな露店風呂の景観とかの話ではなく、焰佳の視線は無意識のうちに葉月の胸部に釘付けになっていた。

「……あ、あの、焰佳さん？」

「さ、参考までに訊きたいんだけどさ、葉月さん、その、いくつ？」
「え、えっと……………」

訊かなきゃよかったと焰佳が後悔するには少し遅かった。
がつくりと頂垂れる焰佳に、不意に葉月が訊ねた。

「そういえば、水織君は何処に行っただんですか？」

「ごほ、んツ。み、水織のヤツなら多分、あの名も亡き神社に行ってるんじゃないかな」

「名も亡き神社…………？」

焰佳はロビーの壁に掛けてあった地図を示し、現在地である旅館を指で指すとそのままグイッと東に動かす。

指が止まった場所には神社を示す小さなマークが森の中にポツンとあった。

「寂れ過ぎて誰にも忘れられて名前が亡くなったから名も亡き神社。昔はそれこそ何か大事な神様を祀ってたらしいけど、今じゃ誰も近寄らないボロい神社さ。夏になると若い衆が肝試しによく行くみた

いだけどさ」

「き、肝試し……」

ごく、と葉月が唾を飲み込む音が聞こえたが焰佳は話を続ける。

「神社つつつても、大きくも小さくもない中途半端な鳥居の奥に小さな社がポツンとあるだけ。ご利益なんて当の昔に消えちまつてると思うんだけど水織はよく行くんだよ。アタシと喧嘩して負けた時とかにさ」

「ふうん……ちょっと、行ってみようかな」

「ふふふ。確かに何にもないってのはホントだけど、実はちょいとした噂話があってね……」

急に焰佳の声のトーンが下がって思わず葉月がビクツと体を震わす。

そんな葉月の反応を見てか、焰佳の顔がニンマリと少し意地悪そうに口の端をつり上がった。

「その神社、神隠しがあるそうだよ」

「神隠し……？ あ、突然人がいなくなっちゃうっていう、あの神隠し？」

不安げな顔の葉月、少しからかうつもりだったのだがその表情は本気で心配しているようだった。

「そうさ。ずっと前に婆ちゃんから聞いたんだけど、昔神社に行ったらお客さんが消えたって大騒ぎしたんだってさ」

「その人、どうなったの？」

「ううん……どうだったかね。アタシは覚えてないや。小さい時、それこそ十にも満たない時に聞いた話だからね」

「そうですか……」

焰佳は軽く肩をすくめた。

「ま、そういう噂があっただけさ。この現代であのバカが神隠しに遭うことなんかないよ」

「……でも、ますます行ってみたくなっただかも」

「はぁ？」

今しがた怖がってなかったかい？　と言おうとしたが、葉月の横顔を見て口を噤んだ。

怖い話をして脅かしたはずなのに、今の葉月はどこか遠くを懐かしむような、それでいて少し寂しそうな顔をしていたからだ。

「……まさか、神隠しに遭いたいのかい？」

「え……？　あ、いや、その」

「ずいぶん変わった人だね。神隠しってのは、この世の何処でもない場所に連れて行かれてしまっただけだよ？　現実逃避でもしたいのかい？」

「そ、そうじゃないんだけど……」

「……？」

イマイチ歯切れの悪い葉月を見て焰佳は少し眉をピクつかせる。

確かに葉月は真面目で大人しく良い子なのだが、少し遠慮がちで、おどおどし過ぎる気もする。

強気な自分の性格のせいか、焰佳はそんな葉月の態度がほんの少しだけ苦手だった。

「どっか行きたい場所でもあるのかい？　それこそ、神様の力でもないといけない場所か」

「そう……だね。神様なら、私の行きたい場所に連れて行ってくれるかも」

「何処さ？」

「それは……」

葉月の顔が、懐かしさと寂しさが入り混じったような複雑な表情になった。

「……幻想郷、かな」

「幻想郷……？」

それは、冗談か何かのつもりだったのだろうか。
でも冗談なら何故、葉月はそんなに寂しそうな顔をするのだろうか。

焰佳はその表情の真意が少しだけ気になったが、結局それ以上何も言わなかった。

第一話 旅館『暁の湯』（後書き）

主人公は少年、しかもちよいスケべらしい……？

そして何故かオレの脳内では水織君の声が朴？美さんボイス。

前作キャラの正体は紅葉記の主人公『時雨葉月』ちゃんでしたッ。

紅葉記から成長して今やばんきゅっぱんの大学生となっています。

え？ 紅葉記で死んだって？

そ、そうだったっかなあ……？w

第二話は明日公開です。

第二話 名も亡き神社

水織の手には『魔法の手』が備わっている。

そんな突拍子もない話を祖父から聞いたのは今から十年ほど前、水織がまだ小学生にも満たないころだった。

「『魔法の手』……って何？」

幼い水織が小さな手の平を開いたり閉じたりしていると、祖父の委泉はカッカッカッと老人にしては妙に甲高く元気の良い声で笑った。

「魔法の手？ちゅうもんはな、儂と同じ手ってことじゃよ」

「じーちゃんの手……？」

委泉の手の平に、自分の手を重ねる。

当然だが水織の手の平よりも委泉の手は何倍も大きい、しかし大きいだけでそれ以外の差異はない。

強いて言うなら少し皺があるとかそんな程度。

水織が不思議そうに首を傾げていると、委泉は再び大きな声で笑った。

「水織、お前さんもお風呂に入るじゃろ」

「うん、入るよ」

「儂はな、お風呂の温度や性質を触れただけでわかるんじゃよ」

「おんどや、せいしつ……？」

温度はともかく、流石に小学生にも満たない頭で温泉の泉質など理解できるわけもなく、水織の頭の上では疑問符が踊り出す。

委泉は再び大口を開けて高笑い。

「カッカッカ！ まあ、まだわからんかもな。でもそのうちわかるさ。儂の血を引く男衆はみんな『魔法の手』が備わるからの」

委泉の大きな手の平が、水織の小さな頭をわしづかみにしてくしやくしやと乱暴に撫でる。

「そのうち、水織の魔法の手が必要になる時が来るかもしれんおう。そうしたら手伝っておくれ」

「うん。わかった」

微笑む水織に、委泉は穏やかな表情で言葉を続けた。

「いつか、その手で誰かを幸せにするんじやよ。それが『魔法の手』を持つ人間の唯一の使命じゃからの」

「……？」

そう言って、委泉は少し儂げな笑みを浮かべて……

・
・
・

「——ッ」

気がつくと、ボロボロに朽ち果てた屋根の一部が視界の正面に飛び込んできた。

「そっか、俺昼寝してたんだっけ。ふわ……あ」

よ、と小さな掛け声と同時に勢いをつけて跳ね起きる。

いつも見慣れた光景をぐるりと眺めると、大きく腕を伸ばしてもう一度だらしなく欠伸をした。

今水織がいるのは、旅館からまっすぐ東に行ったところにある小さな神社、通称『名も亡き神社』。

ほとんど機能していないような道を抜けた森の中に、こじんまりと開けた空間にこれまたこじんまりとした社がぼつんと建っている。社正面へと続く道には塗料の剥がれかかった鳥居がいくつも連なっていて並んでいて、見様によっては少し不気味だ。

子供がくぐるには少し大きくて、大人が通るには少し屈まなければならぬ何とも中途半端な鳥居の道を歩き、水織は少し体を動かしながら神社の正面を振り返る。

「……」

かつては何か偉大な神様を祀っていただろう社にそんな面影など微塵もなく、ただ力無く朽ち果てた哀れな廃墟と化していた。

昔の人は何を思い、ここで祈りや供物を捧げていたのだろうか。

「ま、いいや」

取水場まで行って水を一口飲むと、先刻の出来事でカッとなっていた体を少し冷やす。

……それは言うまでも無く葉月のことが原因だった。

「しかしまさか、葉月さんとぶつかるとは思わなかったなあ。あんな時顔に当たったのって、やっぱり、紛れもなく……ッ」

顔面に伝わった柔らかい感触が再び脳内で忠実に再現され、否が

応でも顔が真っ赤に染まる。

少なくともD、いやもしかしたらそれ以上……ゴクリ。

頭の中で妙な妄想が膨らんで、今自分は恐らくろくでもない顔をしているはずだろう。

首をブンブン振って雑念を払うと水織はしばしぼんやりと空を見上げた。

「いいよなあ葉月さん。美人で、優しくてスタイル良いしさあ……」

短気で乱暴な自分の姉とは大違い。

何かとあればちよっかい出してくるし小さなことでも口うるさく叱ってくる。

顔立ちはともかくとして、しかしそのスタイルはまな板なんて言葉じゃ温い、もはや絶壁だ。

絶壁は絶壁でも捕まる部分など全く存在しない断崖絶壁。

どうせなら葉月が姉になってくれればよかったのに。

そうすれば毎晩のお風呂が楽しみで仕方ないのだが……

と、ひとしきり思春期にありがちな妄想を浮かべて呆けて、それから水織は神社の端の方へと歩いていく。

そこはちよっど見晴らしの良い崖となっていてこの町のほとんどを一望することが出来た。

実家であり、この辺りで（姉曰く）一番立派な旅館。

そこから南に伸びる道を往けば麓の温泉街で、そこから町の中心部に続いて一日に数回しか電車が来ない小さな駅が見える。

今ちよっど電車が走り出しているようだ。

水織の記憶が正しければ、あの電車が出発するのは午前十一時十六分のはずだから、恐らく今はそんな時刻なのだろう。

「でも、これからどうしようか。何にも持ってきてないし、特にすることもないし」

面倒な仕事を押し付けられそうになってそのまま逃げてきたせいで暇潰しになるような物は一切持っていなかった。

試しにジャンパーのポケットに手をつ込むが……案の定何も入っていない。

旅館に戻れば買ったばかりのゲームや漫画などがあるのだが、姉から逃げているというのに戻る理由も無く、仕方なく社の縁側に腰をかけてボーっとすることに決めた。

今日は学校は休みだし、宿題も無い。

ちなみに水織は中学三年生。

本来なら進路やら何やらで悩むのが常なのだが、水織は実家の旅館を継ぐという話になっているので進路の話はとりあえず考えなくていいことになっている。

……あくまで、とりあえず、だが。

「オレに旅館継がせるとか、爺ちゃんは何を考えてたんだろな………ん？」

取水所を出てもう一度縁側に戻ろうとして、不意に何者かの気配を感じ足を止める。

周囲に意識を向け全身を使って探る。

ガサ、と左の方から落ち葉を踏みしめるような音がした。

物音はちょうど水織が昼寝していた縁側の反対方向からだ。

「……ここにはオレしかいないはずなのに、誰だ？」

寂れ過ぎて、年寄りですら滅多にこないこの場所にいったい誰が来るというのだろうか。

観光客が道を間違えてここに来たのか、それとも昼間っから酔っぱらったアホでも来たのか。

……それとも、噂に聞く神隠しの犯人だろうか？

「……………」

息を潜め、なるべく音を立てないよう足を忍ばせ反対側へと向かう。

近づくにつれガサガサと落ち葉を踏む音と、それから何か呟き声のようなものが聞こえてきた。

「ないわぁ。何処にいつちゃったのかしら……………」

「…………女の人の、声？」

甘ったるく妖艶な呟き、しかしそれは水織が全く聞いたことのない声だった。

この町はそう大きな町ではない、むしろどちらかと言えば寂れた田舎町で数少ない町人のほとんどの顔や声なんかはだいたい記憶している。

しかし、その声は水織の記憶には無い声だった。

恐る恐る首だけ覗かせ、目の前の光景に水織は思わず息を呑んだ。

「…………ッ!？」

美人、それも今まで見たことも無いようなとんでもない美人が、その綺麗な顔を悔しそうに歪めながら落ち葉を両手でかき分け、何かを探しているかのように乱雑に払いのけていた。

着物とローブを足して二で割ったようゆったりとした出で立ちに、腰の辺りまで伸びる艶やかな金の髪。

一心不乱に何かを探すその瞳は紫紺に染まっていて、全身から妖しげな魅力が漂っている。

今まで見たことも無い人でしかもとびきりの美人、いや美少女……

…か？

妖艶なその横顔からはハッキリと年齢をうかがい知ることが出来なかった。

そんな美人を目の前にして、水織の手が微かに汗ばんで変な緊張感が全身を包む。

いったい何処の誰なのだろうか。

旅館の客？ いや、ここ最近のお客さんにあんな美人は来ていない。というか、葉月さんより美人なんじゃ……いやいや、それはない。だけど負けず劣らずな美人であることは間違いなく……

「……何方？^{どなた}」

「うう、わ！？」

そんな水織の熱い視線に気づかない訳も無く、紫紺の瞳をした美人にあっさり見つかってしまった。

途端に全身に電撃が走り自然体を強ばらせてしまう。

「あら、ビックリさせちゃったかしら？」

「い、いえ！ 何でも、ない、です！」

緊張のせいか上ずった片言の言葉で、しかも機械的な返事しか出来なかったが、慌てふためく水織を見て美人はクスリと笑ってくれた。

水織の体がますます硬直する。

「ごめんなさいね。落し物を探してる最中で……」

「お、落し物？」

「ハンカチなの。すごく気に入ってるものなんだけど見つからなくて……」

たかがハンカチを落としただけだというのに、彼女の表情は心底困った様子だった。

美人がそんな困った表情をして困っている。
ならばここで水織が取るべき行動はただ一つ。

「ど、どんなハンカチなんですか？」

水織の言葉に、彼女は一瞬驚いたような表情を浮かべ、それから薄っすらと小さな笑みを見せた。

刹那見せたその表情は、まさにしたり顔とでも言うべきか。

「手伝ってくれるの？　ありがとう。優しいのね」

「い、いえ！　これぐらいは、別に……！」

火照る顔を見せまいとくりと回れ右して落ち葉を漁る。

一心不乱にハンカチを探す水織の背中を、彼女は品定めでもするかのようにじっと見つめていた。

「レースのハンカチなの。ポケットから出したら、風に舞って何処かへ消えてしまっ」

「れ、レースのハンカチ……」

背筋がゾクリとするほどの甘い声を耳にするなど、十五年の人生で初めての体験だった。

火照って体が熱いのか、それとも声に惑わされて熱いのか、もはや区別がつかないまま落ち葉をひっきりなしにかき分ける。

とにかく体を動かしていないと、どうにかなってしまいそうだったからだ。

やがて落ち葉を漁る水織の指先に、何か滑らかな感触が伝わった。

「あつた！　ありがとうございましたよ！」

バツと手を引っこ抜いて握りしめたレースの白いハンカチを彼女に見せると、パンと軽く両手を叩き嬉しそうに微笑んだ。

「それよそれ！　ありがとう助かったわぁ」

「い、いえ！　これぐらい、お安い御用で……へへッ」

軽く手ではたいてからハンカチを差し出す。と、何故か彼女の手がハンカチではなく水織の手首をキュツと握りしめた。

予想外の出来事に思わず目が丸くなり、水織の全身が再びカツと火照り出す。

彼女の妖艶な面がグツとズームして、桜色の唇が魔法の言葉でも囁くように小さく開く。

「わ、わわわ……！？」

「ふふ。何をそんなに恐がっているのかしら？」

「こ。恐がつてるんじゃないくて、えと、これは」

「せっかくハンカチを見つけてくださっただけですもの。何かお礼をしなくちゃ」

「お、御礼！？」

ならばどうして手首を握りしめるのか。

彼女の滑らかな手は振りほどこうにも頑として動かない。

……いや、別に振りほどく気などさらさないのだが、というか御礼とはいったい何なのだろうか。

十五年で培われた脳がフル回転して彼女の言う“御礼”を全力でイメージするが……あまりにピンクな想像をしたせいか一瞬でオーバーヒートしてしまった。

「お、おおおおお御礼とか、結構です！ あ、気持ちだけで……いや、違う！ ここで断るのは男が廃る……でもなくて、やっぱり遠慮しま……んのあああああ！」

「心の中身が外に出ちゃってるわよ。ふふ、可愛いわねえ」

破壊力満点の言葉が水織に直撃。

水織の精神はあっという間にバランスを崩し、頭の中の下心と良心がミキサーに突っ込まれたかのようにごちゃ混ぜになっていく。

そんな少年の心理など露知らず（いや、そうと知りながら楽しんでいるように見えるが……）手首を掴んでいないもう片方の手でスツとその場で真一文字に切り裂くように難いだ。

突如空間が裂け、その奥に不可思議な空間が映る。

それはさながら、空間に出来た“すき間”とも言うべき存在。

水織の両目が瞬時に見開かれ、今の今まで全身を包んでいた熱気が嘘のように消え失せる。

「な……ツ！？ なんだ、これ……！？」

目の前で起こる、常軌を逸した謎の現象に水織の体が小刻みに震える。

何だこれは。

どうして目の前に裂け目が、この体を這うような視線は何だ、どうして彼女は、それを平然とやってのけるんだ。

「御礼は、貴方を素敵な世界へご招待、何てのほうかしら」

どうして彼女は、こんなにも愉しそうな表情をしているんだ。

あれこれ思案を巡らす水織の意識が、まるで真上から鉛で出来た布を被せられたかのように突然重くなる。

意識が闇の奥底に引きずり込まれるのにさほどの時間は掛からな

かった。

意識を失う刹那、水織が記憶していたのは彼女の綺麗な笑顔と、すき間の向こうで跋扈^{はくご}する無数の瞳^{まなこ}だけだった。

・
・
・

水織の姿が忽然と消えた名も亡き神社。

彼女、八雲紫はひどく愉しそうに微笑みながら、神社の壁にもたれ掛かり頭上の紅葉の葉を眺めていた。

「……少し、色付きが薄いわね」

ひらり、ひらりと紫の膝下に落ちる紅葉の葉は、紅にやや近い朱色といった色をしていた。

それはただ単に落ちた葉が紅葉を迎えていなかったただけなのか。それとも、何か別の要因があるのか。

「ま、私の仕事じゃないけど……あら」

もう一度すき間を開こうとして手を薙^はごうとした瞬間、何故か紫の表情がまたも愉しそうな笑みを浮かべた。

第二話 名も亡き神社（後書き）

序章、終了。

明日から第一章が始まります。

早速の評価ポイント、お気に入り登録ありがとうございます。
とはいえ、全然お話進んでないのに評価してもらっちゃっていいんですかね……；

第三話 少年、姉妹と邂逅す

幻想郷、北端に位置する妖怪の山。

文字通り数多の妖怪が住まうこの山の奥地で、秋静葉は一人紅葉を手にしたため息をついていた。

「ううん……やっぱり、ほんの少しだけ色が薄いかなあ」

手にしていた紅葉は確かに赤く色づいているのだが、静葉は憂鬱そうに嘆息した。

紅葉を象った髪飾りに、燃えるように赤いドレススカート。今しがた手にした紅葉の木を見上げ少女は再び嘆息する。

「私たちの信仰が薄くなっているんだよお姉ちゃん」

「……穰子」

静葉が振り返ると、果物の入ったカゴを抱えた妹の姿があった。

「私たちももつと頑張ろうよ。守矢の神社のことまではいらないけど信仰を集めなきゃ」

「だけど、私たちってそんなに大きな神様じゃないんだよ？ 頑張るって言っても難しいと思う」

「それはまあ、そうなんだけど……」

カゴを小脇に抱えたまま穰子が器用に腕を組む。

確かに静葉や穰子は守矢の神社ほどの高位な神というわけではなかった。

秋姉妹と呼び称されながら、しかし二人は秋全体を司る神というわけではない。

姉の静葉は紅葉を、穰子は豊穰をそれぞれ司っている。

他にこれといった力無しに信仰を得るといいうのは聊か厳しいものがあるかもしれない。

何か、妙案はないだろうか。

二人がうんうん唸りながら思案していると、先に静葉の方からアイディアを思いついた。

「そつだ。博麗の巫女さんに何か助言してもらったらどうかな」

静葉の妙案に何故か穰子の表情が曇り難色を示す。

やや顔を引きつらせながら首を振って、

「だ、ダメだよお姉ちゃん。あの巫女は私を食べようとした凶暴な巫女で……」

「え？ でも、幻想郷の異変を解決してるのつてあの人だよね？」

「お姉ちゃんも前に戦ったでしょ？ 覚えてないの？」

「ううん……覚えてるような、覚えていないような」

曖昧な姉の言葉に穰子がため息。

しかし、守矢の神社に相談に行くよりは博麗神社の方が数段行きやすいかとも思った。

守矢神社は二柱の強力な神がいるせいかな、少し空気が張り詰めていて行っても自分たちが萎縮してしまうような気もする。

神を祀っているのかいないのか、少なくとも博麗神社ではそんな緊張感は感じたことが無い。

どちらかといえば博麗神社の方が気軽に入って行けると思う。

巫女がだらしないという噂は……この際気にしない。

「……でも、あんまりアテにならないんじゃないかなあ」

「その時はその時でいいよ」

「もう。お姉ちゃんはマイペースだなあ。結構深刻な問題なのに」
「じゃあ早速行こうよ」

トコトコと山の斜面を降りようとする姉の後ろ姿を穰子が追いかける。

どうせ行くなら飛んで行こうよ、と言いかけた瞬間静葉の動きが穰子の目の前でピタリと止まり、思わず背中に顔面からぶつかってしまった。

「あたツ！ お、お姉ちゃん何で急に止まって」

「……あそこ、誰か倒れてる」

「え？」

静葉が指差す方向、ちょうど木々の合間にぽっかりと出来た空間に少年が一人大の字で倒れていた。

「た、大変だ！ 行こ、お姉ちゃん」

「うん！」

二人が駆け寄り、倒れていた少年の頭を静葉が膝で枕する。
意識があるのかないのか、少年は時折小さなうめき声を上げていた。

「穰子、川に行ってお水持ってきて」

「わ、わかった」

存外冷静な姉の言葉に驚きつつも穰子が駆け出す。

静葉は瞳を閉じ軽く息を吸うと少年の額にそっと手を当てた。

「……あんまし、効果があるかはわからないけど」

自分の力で簡単な応急処置を施すと少年のうめき声が僅かだが安らかな呼吸に戻る。

ホッと安堵した直後、穰子が自分の帽子を器にして水を汲んでき
てくれた。

なるべく苦にならないよう、少しずつゆっくりと水を流し込む。
少年の体が微かに震えたかと思うと、その瞼がうつすらと開いた。

「こ、こ……は」

「気がついたよ、お姉ちゃん！」

「まだ無理しないで。ほら、もう一口水を」

少年は促されるまま帽子の水を飲み干す。

それからすぐに意識が回復して、少年は自分で体を起こせるよう
にまで回復した。

「キミ、大丈夫？」

「あ、ああ何とか……よくわからないけど、助けてもらったみたい
だな。ありがとう」

「いいのよ。それより、キミ何処から来たの？」

「は……？ 何処、からって……」

穰子の質問に少年の顔が歪み、それから突然周囲に視線を向けた。
右も、左も、少年にとっては見覚えのない景色。

少年の顔は、まるで見ず知らずの土地に迷い込んだ子供のような、
好奇心と戸惑いに溢れた複雑な表情だった。

「ここ何処だ？ オレ、確か神社で美人な人を助けて、それで……」
「神社？ この辺に神社なんてないけど……キミ、もしかして外の
世界の人の？」

「外の世界……だつて？」

穰子の言葉に少年は驚き突拍子もなく叫んでしまった。
その言い方では、まるで自分が別の世界から現れたような言い方ではないか。

「こ、ここは何処だ、教えてくれないか」

「ここは妖怪の山だよ」

静葉が素直に答えるのと同時に少年の顔が曇る。

「……今、何て言った？」

「だから、妖怪の山。ここは幻想郷の北端に位置する妖怪の山だよ」
「げ、げんそうきょう？ ようかいの……やま？」

彼女たちの言っていることがチンプンカンプンで、頭の中がぐらりと揺れたような気がした。

青ざめる少年の顔を見て、静葉と穰子は顔を見合わせた。

「……私たちが事情を説明しても、わかり辛いかもしれないね」

「うん。外から来た人って、確か博麗神社に連れて行けばいいんだっけ？」

「二重の意味で行く理由が出来ちゃったってわけか。まあ放っておくわけにもいかないから仕方ないか」

乾いた帽子を目深に被ると、穰子は立ち上がり少年に手を差し伸べた。

「ほら、男の子ならさっさと立つ！ これから博麗神社って所に連れて行ってあげるから」

「はくれい、じんじゃ……?」

「詳しいことは向こうでお話するよ。ここだと色々と危ないし……
あ、そうだ。キミ、名前は?」

「草津水織……だ。君たちは? 恩人の名前ぐらい聞いておきたい
んだけど」

「私は静葉、秋静葉っていうの」

「私は妹の穰子。さ、まずは博麗神社に向かいましょうか」

そして二人は山の斜面を下りはじめ、水織もそれに続く形で後を追った。

・
・
・

二人の後を追ってたどり着いたのは、小高い崖の上にちゃんと建つ神社だった。

鳥居をくぐった正面に、ほどほどの大きさの社が建ち、横には物置と思しき小さな蔵がある。

「ここが、博麗神社ってとこか」

「まずは巫女さんを探さないか。あ、その前にえっと……」

「お姉ちゃん、何してるの?」

社正面の賽銭箱の前に立つ姉の姿に穰子が顔をしかめる。
すると静葉は心底不思議そうな顔で振り返って、

「だって、神社に来たらお賽銭を入れるんだよ」

「……お姉ちゃん、この巫女の事全然知らないのかしら」

「む……お金なんて持ってたかな……」

「え……？」

すると水織も静葉の横に立って賽銭を入れようとしていた。
外の世界の人間だから巫女の噂など微塵も知らないだろうが、穢子が驚いたのはその事ではない。

「水織、あなたお賽銭入れるの？」

「当たり前だろ。神社に来たら必ず五円玉を投げろって爺ちゃんに教わったんだ」

ズボンのポケットから奇跡的に飛び出した五円玉を握りしめるとひょいと放り投げる。

木製の賽銭箱の入り口で二度三度バウンドしてから五円玉がコトン、と寂しい音を立てて吸い込まれていった。

同じく静葉も賽銭を投げ入れ鈴を鳴らす。

「……………」

単純に驚いた。

外の世界でも、賽銭を投げるという習慣がちゃんと残っていたことに。

いつだか聞いた話では現世の人間はほとんどこういったことをしないとの話だったのだが……

「いいわねえ賽銭の響き。心が躍るってもんよ」

不意に声が響き視線を向けると、赤と白の巫女服に身を包んだ少女がのんびりとした歩調で現れた。

黒髪を大きな赤いリボンで結わえた、巫女というには少しハイカラな格好だった。

巫女服も腋全開で何とも奇妙なファッションセンスである。

「しかしま、妙な来客ねえ。その男の子はともかく、焼き芋姉妹に用は無いわよ」

「だ、誰が焼き芋姉妹だ!？」

「焼き芋……?」

そういえば、さっきから焼き芋のような甘い香りがするようないような。

巫女服の少女は水織に近づくと、訝しげな視線で水織の全身をくまなく観察してきた。

「……どう見てもアンタが外の人間よね。私は博麗^{はくれいれいむ}霊夢。見ての通りの素敵な巫女よ」

「素敵な巫女……」

何がどう素敵なのかさっぱりわからない。

パツと見清楚な容姿で可愛らしいのだが、神社で見た美人や葉月さんには圧倒的に劣る。

申し訳ないが、胸が足りない。

すると霊夢はくるりと踵を返しちよいちよいと手招き。

「立ち話つても何だしこっちへいらっしやいよ。お茶と菓子ぐらいは出すわ」

「だって。ほら、穰子も行こ」

「あの、霊夢さん。私たちも話が」

「あーはいはい。まとめて聞いてあげるからさっさと来なさい」

そして案内された神社の縁側で申し訳程度の茶菓子が用意される。湯のみの中の茶は薄い色をしていた。

一通りの説明を終えたところには、湯のみの茶はすっかり冷え切っていた。

「……つまり、ここはオレのいた世界じゃない、異世界ってことですか」

「ま、そんなところよ」

霊夢が冷めた湯のみをすする。

にわかには信じられない現象。

自分の今の状況が理解できず、呆然と言葉を失くす水織。
異世界。

そんな言葉はゲームや漫画の話だけかと思っていたのに、いざ自分が巻き込まれるだなんて夢にも思わなかった。

「どうすれば、元の世界に戻れるんですか」

「結界を操ってる人に言って頂戴。当の本人はまだ帰ってこないけど……」

「あら、呼んだかしら？」

不意に声が響き全員が一斉に振り向く。

聞き覚えのある声、それは水織が神社で出会ったあの妖艶な美女の声。

そして振り返ったその先に、紫紺の瞳の彼女はいた。

「あ、あんたは……！？」

「自己紹介がまだだったわね。やくもゆかり八雲紫よ。お久しぶり、水織君」

クスリと微笑を漏らし、優雅に日傘をさす美女。

あの時見た愉しそうな表情でこちらを見つめている。

「どう？ 素敵な世界でしょう」

「素敵な世界って……！ 何で、オレをここに？」

「ん？ だって貴方退屈そうにしてたじゃない。だからこっちに誘ってあげたの」

「だ、誰もそんなこと頼んで……」

「彼はともかくとして、彼女たちは何？」

急に話が変わり視線が秋姉妹に注がれる。

集中する視線の中、口を開いたのは穰子だった。

「あ、あの！ 実は相談があつてここに来たんです」

「相談……？」

「いいわよ。私も協力してあげる。話してごらんなさいな」

「ちよつと紫！ 私はまだ何も……」

霊夢の制止を余所に紫が勝手に話を進めようとする。

ゆかり
紫、というのが彼女の名前らしい。

こんな状況だったが、水織はこっそりと心の中に刻み込んだ。

穰子が真剣な表情で霊夢と紫を交互に見据える。

「実は、私たち信仰が集まらなくて困っているんです。それで、どうか信仰を集める良い手立てはないものかと助言を頂きたく、ここまで来たんです」

「信仰……？ そういふのは信仰に溢れた神社に相談しなさいよ。

私は関係ないわ」

「やっぱり……」

予想通りの言葉に穰子の肩ががっくりと落ちる。
静葉も、何処となく寂しそうな顔をしていた。

「じゃあこの件はお終いね。そういうのは守矢の神社にでも行っ
きなさ」

「人の役に立てば、自ずと信仰が集まるんじゃないかしら」

霊夢の言葉を遮り紫が唐突に口を挟む。

姉妹の顔が同時に上がって紫に向き直った。

「人の役に、立てば？」

「そうよ。力とか無くても、身近な所で人を助けていればある種信
仰に近いものを得られるんじゃないかしら」

「紫、まさかアンタ……！」

微笑む紫、顔を引きつらせる霊夢、そして不安と期待が降り混ざ
ったような表情の秋姉妹。

そして、さっぱり状況が読めず取り残される水織。

一斉に集まる視線を浴び、紫は悠然とした態度で一歩踏み出し口
の端をつり上げる。

「貴方達、銭湯って知ってる？」

心の底からこの状況を楽しんでいる、紫はそんな笑みを浮かべて
いた。

第三話 少年、姉妹と邂逅す（後書き）

かなり強引な展開ですが気にしない。

そしてここで書き溜め分が終了。

明日からは少し更新頻度が落ちますのでご了承ください。

さて、これを上げ終えたらダークソウルだっぜ！

第四話 ゼロから始まる銭湯経営

「ここよ」

紫の案内でたどり着いた一行を向かえたのは今にも崩れ落ちてしまいそうなほどボロボロに朽ち果てた廃墟だった。

場所は妖怪の山の麓よりさらに南下した中途半端な場所で、少し先には村のようなものが見えた。

廃墟の大きさはかなりのもので小さなお屋敷といっても差し支えない大きなのだが、その窓や戸は ひび割れていて屋根の瓦は所々剥がれ落ちたり穴が開いている部分もある。

幽霊屋敷、といった言葉が良く似合いそうだった。

「……これ、何ですか？」

穰子の至極シンプルな質問。

いきなり銭湯を知っているかと聞かれ、今度は意味もわからずこの廃墟に案内された。

何の説明も無しにここに連れてこられれば理解出来なくても不思議ではない。

「ふふ。なかなか趣のある建物だと思わない？ これは私が外の世界で偶然見つけた銭湯なの」

「銭湯って……」

どう鼻屑目に見ようと目の前の建物は廃墟である。

そして、まるで自分の家でも自慢するかのように得意気に胸を張る紫の姿に一同が沈黙。

それを無視して紫は言葉を続ける。

「これを直せば銭湯として再利用出来るでしょう？　そうすれば、たくさんの方がこの銭湯を利用してくれるわ」

「いや、これじゃ廃墟でしょ。こんなボロイまんまじゃ人なんか入らないで、逆に妖怪が棲みつくわよ」

「それは困るわ。私の銭湯なのに」

「アンタねえ……」

「それで、秋のお二人さん」

『は、はい！』

静葉と穰子が同時に返事して紫に向き直る。

「ここを貴方達で改修して、人々の癒しを提供できる銭湯として使えるようにしてみてもどうかしら」

「わ、私たちが」

「銭湯を……」

紫の笑顔に見つめられ、困惑する姉妹。

半眼で睨む霊夢、話についていけないので紫を凝視する水織。

「……ち、ちよつとだけ時間をください」

「どうぞ？　だけど、なるべく早くして頂戴ね」

許可をもらい穰子が静葉の手を引っ張って別の場所でしゃがみ込んで小さな会議。

「どうする？　せんとつ、っていうのをやって本当に信仰が手に入るのかなあ」

「わかんないけど……何だか、楽しそうじゃない？」

「ええ？　お姉ちゃん、本気で言ってるの？」

「本気だよ？ 銭湯って、どんなものなのか知らないけど」

「……でも、今のところ信仰に繋がりがりそうな手段ではあるのよね」

答えは出た。

静葉と穰子は立ち上がり紫に振り返ると二人で首肯してみせた。

「わ、わかりました。やります、やってみます！」

「うふふ。こうやって地道に頑張ればきっと信仰を集まるわ。頑張
ってね」

「……アンタら。こいつは妖怪よ？ こんな胡散臭い言葉を信じて
頑張るって本気で」

「ほ、本気です！」

声を荒げる穰子の剣幕に驚き霊夢の言葉が止まる。

「頑張らないと、いけないんです。でないと秋が、どんどん寂れて

……」

「……そう。なら、精々頑張rinaさい。私はもう用もないし行
くわ」

「私も野暮用があるし、そろそろお暇するわね」

「ちょっと待ったああああ！？」

踵を返す霊夢、すき間を開く紫の手と足が止まる。

全員にすっかり忘れ去られていた水織が全力で叫び思いの丈をぶ
つける。

「お、オレはいったいどうしたらいいんだ！？ 元いた世界に帰
りたいのに、何の話題にも出ないじゃねーか！」

「ああ、忘れてたわ」

「忘れるな!？」

あまりの扱いの悪さに水織の怒り爆発。

霊夢はかなり面倒くさそうにため息をついた。

「しょうがないわねえ……私の神社にいらっしやい。すぐに元いた世界に帰してあげ」

「ちよっとお待ちなさい」

霊夢の後を追う水織の手を再び紫が掴む。

振り向いた瞬間、紫の顔が至近距離に近づいて思わず赤面してしまふ。

「な、何ですか」

「貴方、確か実家が温泉旅館を経営しているのよね」

「何でそれを知ってるんだ? ってか、それがどうかし……」

「どう? あの子たちと一緒に銭湯やらない?」

「は、はあ!？」

紫の言葉に水織が叫ぶ。

意味がわからない。

突然こんな場所へ落としておいて、今度は自分に銭湯をやれと? あまりに身勝手かつ理不尽過ぎる言動に水織の堪忍袋が限界を迎えようとしたその瞬間、耳元に妖艶な囁き声が響く。

「この女の子、結構可愛いでしょう? もしも私みたいな可愛い子が毎日銭湯に行ったら……?」

「……ッ!」

何て事を言うんだこの人は。

それは思春期真っ只中の水織には効果抜群の恐るべき魔性の囁き。顔から全身までもを真っ赤にさせながら、下心と本心の混ざり合った苦悶の表情を浮かべた。

「……で、でも！ オレは全然関係ないんだしこんな訳のわからない世界にいられるか、オレは帰り……たい！ だがしかし、紫さんのような美女が毎日！ 毎日だと！？ 毎日銭湯に来て一風呂浴びてタオル一枚で牛乳飲んで……じゃない！ だからオレは無関係なんだ！ だから紫さんの入浴シーン何かに吊られるほど脆弱な人間であるはずがない！ 訳が無い！ でも帰らないと姉貴が葉月さんが心配して、だけど入浴シーン……ううああああ！？」

「紫、コイツは何なのホント」

「可愛いでしょ。心の中で思ったことを全部言っちゃうのよ？」
「世間一般ではそれをバカと言わないかしら」

悶絶する水織を見つめる紫の顔が心底楽しそうなのは言うまでもなく、しかしこのまま悶絶してもらっては埒が明かない。

紫はもう一度近づき、普通に言えばいいものをわざと水織の耳元で囁く。

「でも、知識はあるのでしょうか？ せっかく助けてもらったのなら、その恩に報いるべきではなくて？」
「た、助けてもらった恩って……」

水織の視線に姉妹が映る。

どこか不安げな表情をしている二人を見て、水織は脳裏で祖父の言葉を思い出す。

「……受けた恩は必ず返す。女の子だったら、三倍返し」
「あらあら。素敵な言葉ね」

「あの子たち、銭湯を知ってるのか？」

「さあ？ どうかしら」

「……………」

つまり彼女たちは銭湯を知らない、と。

彼女たちは、この世界で最初にお世話になった姉妹だ。

このまま助けられっぱなしで帰ってしまったら後ろ髪引かれるような気持ちになるだろうし、何より天国の祖父に怒られそうである。

「……………わかったよ。あの子たちを手伝う。それが、紫さんの狙いなんだろ」

「あら、狙いだなんてそんな悪者みたいに言わないで頂戴な」

しかしこの至近距離でその笑顔は反則だと思う。

水織は火照る顔を反らしたため息について、それから姉妹の元へ向かった。

突然水織が近づいてきたせいか二人の表情が微かに揺れる。

「あ、あの……………」

「助けてもらったお礼がてら、君たちと協力することになった。よろしくな」

「キミが、私たちに協力……………」

穰子が怪訝そうな顔をする。

外の世界から来た人間がいったい何を協力できるというのだろうか。

水織の表情も、何処か自信なさげで頼りなかった。

「じゃあ、後はよろしくね」

「私も帰るわ。じゃあね」

三人が協力するとなった瞬間、二人は逃げるようにその場を去って行ってしまった。

呆然と残される秋姉妹と、水織。

ほんのり肌寒い秋の風が三人の前を横切り水織がふるふるっと身を震わせた。

「……ここで立ち話しててもしょうがないし、中に入ろうぜ」

水織が戸に手をかける。

今日からここで厄介になるのかと思うと少し気が滅入りそうになる。

だが、これも全ては紫や来る美女きたの入浴……もとい、秋姉妹に恩を返すためだ。

水織はこれから始まる生活に不安と期待に胸を膨らませ、意を決し戸に掛けた手の力を込めた。

廃墟の戸には鍵がかかっていた。

・
・
・

「……その、なんだ。いきなり閉め出しくらうとは思わなんだ」

結局廃墟に入ることが出来ず、三人は妖怪の山を歩いていた。

しかし何の当てもなく歩いているわけではない。

姉妹が言うには、この山には機械に強い河童が住んでいるという話だ。

河童なんぞいるわけないので、水織は半ば聞き流していたのだが彼女たちの口ぶりからするとどうも本当にいるらしい。

ほとんど獣道といていい細い道を抜け、やがてその先から轟々と地を鳴らす大きな音が響く。

「滝……かぁ！」

その先には轟音を響かせる巨大な滝が流れ落ちていた。流れ落ちる飛沫が冷たくて心地よいが季節的にはやや寒い。

九天の滝という名前だと、横で静葉が教えてくれた。

「凄いな……うちの近くにも滝はあるけど、こんなにでかくは無いなぁ」

「ねえ、水織君。水織君のいた世界ってどんななの？」

ちなみに静葉は水織を呼ぶ時『君』をつける。

水織はいらないと言ったのだが、何となく響きがいいからという何だか訳のわからない理由だけで結局このままだった。

まあ、そこまで気にするようなことではないのだけれど。

さらにちなみに、穰子には気がついたら呼び捨てにされていた。

「オレの世界っていうか、オレが住んでた場所はこと同じ感じだよ。家は温泉旅館で、目の前には赤月山っていう大きな山があって、紅葉が名物なんだ」

「へえ……紅葉が名物の温泉旅館かぁ」

不思議なことに彼女らは温泉旅館はわかるのに銭湯は知らないらしい。

まあ、前者は温泉と旅館を足せばいいだけの話だからイメージも容易なのかもしれない。

「そこそ有名な旅館で、この時期はお客さんがよく来るんだよ。」

まあ、オレは大した仕事はしてないけど多少は手伝いしてるのさ」
「ふうん。でも、温泉旅館でお手伝いって凄いなあ。ちよつと尊敬する」

「そ、尊敬？」

「うん。だって、たくさんのお客さんの相手をしなくちゃいけないんでしょう？ 私はそういうの、ちよつと苦手だから」

「接客なんて、慣れりやどつてことないけどなあ……」

「でもさ水織、温泉旅館と銭湯って違うんじゃないの？」

そこに穰子が口を挟む。

彼女の言つとおり、温泉旅館と銭湯じゃ全然違う。

そもそも提供するものがワンランク違うわけで、旅館はもちろん宿を提供するが銭湯はお風呂だけを提供する。

しかし水織にとつてはどちらも大差なかった。

「まあそうだな。でもま、出来なくはないと思うぜ。うちの旅館にもボイラーで沸かす風呂もあつたし、それを弄つてたのは専らオレだつたしな」

「ぼ、ぼいラー？」

「ん？ ああ、お湯を沸かす機械のことだよ」

「ふうん……じゃあ、ますますにとりの世話になりそうだね」

「ニトリ？」

まさか幻想郷に来てその名を聞くとは思わなかった。

ニトリといえば、現世を生きる人なら誰でも知ってるほど有名な巨大なインテリアショップではないか。

水織も小さい頃は両親と一緒に行くことがあつて、寝具コーナーのベッドで飛んだり跳ねたりしていたのをよく覚えている。

しかし、まさかこんなところにまで支店を出しているというのだろうか。

凄まじいなあのインテリアショップ。

「えっと、にとりさんっていうのは河童さんなんです」

「……？ か、カッパって雨合羽の？」

「違うに決まってるでしょ。名前よ、名前」

「へ？」

今しがた頭を過ぎっていたダブルベッドが脳内から消え失せる。
まさか人の名前とは思わなかった。

というか、河童って……？

「妖怪の山の河童は技術者なんだよ。よくわかんない機械とか作ったり研究してたり」

「……『さごじょうのやり』なんか装備すると強くなるのか？」

「なにそれ？」

どうやらその、カッパとは違うらしい。

何だかよくわからない世界だ。

山の外見や植物なんかは元いた世界とほとんど同じなのに、突然妖怪とか神とかファンタジーな言葉が生活に混ざってくる。

実は夢なんじゃないか。

そう思っ て頬をつねってみたが、痛い。

目の前の姉妹も世界も消えない。

それはつまり、目の前が現実だということ。

「わからない。わからないな……」

「ほら、こつちだよ水織！」

穰子の声が響いて我に戻る。

滝の前を横切りそのまま進んでいくと山の岩壁に小さな洞窟が見

えてきた。

「あそこに、にとりちゃんに住んでるの。ちょっと人見知りな子だけど、優しくて良い子なんだよ」

「とりあえず入ってみようか」

そう言つと姉妹は躊躇いもなくずんずん奥へ進んでいつてしまった。

「ま、待ってくれよ!」

水織も遅れて駈け出し、河童の潜む洞窟にいざ侵入。

……そついえば河童つて、どんな姿をしていたらうか。

第四話 ゼロから始まる銭湯経営（後書き）

大変なミスを修正していたため、更新が遅れてしまいました；
すみませぬ……

では、また三日後ぐらいに。

感想、評価ポイント等、ありがとうございます。
更新頻度のせいかな、今作は閲覧者少なめです。

第五話 河童の機械技師

洞窟の中のはずなのに、明るい。

それは洞窟の壁に光源があるからなのだが、何故かその光は松明の明かりではなく人工的な光源。

つまり電気の光だった。

はじめとした湿気漂うこの洞窟の明かりとしてはひどく場違いな気がしてならなかったのだが、先を歩く姉妹はそんなこと微塵も気にしていないのか何事もなく進んでいく。

「……何で洞窟なのに電気が通ってんだ？」

そもそも今のところの様子からして、この幻想郷という場所に機械的な文化があるとは思えない。

一応確認はしてみたが、元いた世界で見た蛍光灯とほとんど変わりになく、ケーブルは天井伝いに伸びてそのまま洞窟の奥へと伸びている。

ということは、この奥に電源を供給している何かが存在しているということになる。

それが何なのかは、容易に想像がつくようなつかないような。

「にとりちゃん、遊びに来たよ」

「お姉ちゃんったら。私たちは遊びに来たんじゃないでしょ」

「あ、そうだった」

「はいはい。どちらさんかな……って、静葉ちゃんに穰子ちゃん。それと……ひゅ！？」

「な、何だ？ 今そこに誰かいたんじゃないのか？」

今しがた姉妹の前に誰かが立っていたような気がしたのに、水織

が顔をのぞかせた瞬間その姿が突然消えてしまっていた。

何事かと目を白黒させていると、静葉が苦笑混じりにその場で指をちょんちょんと何かにぶつけるような仕草をして見せた。

静葉の指が、何もないところでふよふよと跳ねている。

まるで見えない何かを突っついているみたいだ。

「にとりちゃん、相変わらず人見知りだなあ。そんなに恥ずかしがらなくてもいいのに」

「静葉、そこに誰がいるのか……？」

「うん。姿消しちゃってるけど……えい」

両手をドン、と前に押し倒すと『ひゃ！』という小さな悲鳴と共に突然レインコート姿の少女が何もないところから姿を現し、思わず水織も『うお！』と声を漏らしてしまった。

「あ、あわわわ……！」

「この子がにとりさ。妖怪の山一の機械技師なんだ」

「み、穰子ちゃん！ それは、言い過ぎ……！」

顔を真っ赤にさせ、なおかつ両手をブンブン震わせる少女。

水色のレインコートは小柄な彼女によく似合っており、その恰好のせいなのか彼女が機械に強いようにはとても見えなかった。

それと、帽子をかぶっているので皿の有無がわからない。

——ひよい。

「うわわわ！？ な、何するんだいきなり！？」

「いや、二人からアンタが河童だって聞いたから、てっきり頭にお皿があるのかと思って」

「そ、そんなもんじゃないやい！ っていうか、河童の頭に皿があるっていう固定概念はどうにかならないのか！」

「そんなことオレに言われてもな……」

どうせなら妖怪絵巻でも描いた人を呪ってほしい。
というか、普通河童と聞いたらそれしか浮かばないと思うのだが。
それなのにいざ対面してみれば。

「な、なんだよう」

まじまじと見つめられにとりは一步後ずさる。

「いや。河童って可愛いんだなあって思ってたさ」

「か、かか……ッ!？」

そんな水織の何気ない言葉に、少女の顔が爆発寸前の爆弾みたいに赤く明滅し始めた。

穰子もポカンと口を開けて呆けている。

何かおかしいことを言っただろうか。

何故か今度は少女の頭から湯気が出始めたのだが。

「あうわ、わわ……!」

「にとりちゃん面白ーい。頭から煙が出てるよ」

「お姉ちゃん! あれは混乱してるんだよ!」

少女、混乱中。

湯気が収まるまでけっこうな時間がかかった。

・
・
・

「……ご、ごほん。では改めて。私は、河城にとり。えと、君は？」
気を取り直して自己紹介するにとり。
僅かにまだ顔が赤いのはとりあえず置いておく。

「草津水織。水織でいい。そのかわり、こっちも呼び捨てでいいか？」

「構わないよ。それで、三人とも何か用かい？」

「うん。実はね、私たち銭湯をやるの」

「戦闘？ だから私のとくに武器を作りに来てもらったとかかな」

「そ、その戦闘じゃなくてね」

「んん？」

銭湯を戦闘と聞き間違えるつてのは如何なものなのだろうか。
というか彼女たちは本当に銭湯を知らないのか。

銭湯自体は、大昔の日本から続いている歴史ある商売だと祖父から聞いたのだが、それはやはりここが異世界だからということか。

「あのね、銭湯っていうのは、んつと……水織君、バトンタッチ」

「早！ さっきここに来る前に説明したろ？ ……まあ、簡単に言う有料のお風呂ってことだ」

「お風呂？ お金払ってお風呂に入るのか？」

そもそもどうして風呂がわかって銭湯がわからんのだこの娘たちは。

「そういうこと。それをオレと、この姉妹とで一緒にやることになったのさ」

「ずいぶんおかしい話だね。何でまたそんなことをやるのさ」

「紫さんの入浴シごふぁ！？」

何故か鳩尾に正拳突きを喰らった。

隣で穰子が顔を真っ赤にさせている。何故だ。

「実はねにとり。今年の紅葉を見て気づいたんだけど、私たちの信仰が薄まりつつあるみたいなの」

急に真剣な表情になって穰子が話を切り出す。

何だ、信仰って。

にとりはううんと腕組みしながら小さく唸り声を漏らしている。

「それで、八雲紫って人に銭湯はどうだって勧められたの。人間に身近に接することが出来れば、ある種信仰に近いものが得られるんじゃないかって」

「ふむふむ……それで銭湯ってのを始めることになったのか」

「だけど銭湯に使う建物がボロボロなの。にとりちゃん、何とかならない？」

「機械的なことならともかく、建物ってことはリフォームもかあ。

ちよつと大変そうだけど、他の仲間を呼べば大丈夫そうだな」

「仲間……」

河童の仲間って何なのだろう。

やはり同じ河童か、それとも他の妖怪とやらか。

銭湯とかリフォームとかよりそっちが気になってしょうがないんだが。

「じゃあにとりちゃん、協力してくれるんだね？」

「秋の神様の頼みを無下に断ることなんて出来ないさ。色々お世話になってることもあるし」

「うわーい。ありがと、にとりちゃん」

「……秋の、神様？」

今しがたにとりがそんなことを口にしたような気がしたのは気のせいだろうか。

水織の言葉に、にとりはさも当然のように答えた。

「何だ、知らないのか？ 彼女たちはこの幻想郷で秋を司る神様なんだぞ」

「……は？」

いやいきなりそんなこと言われても。

普通目の前の人間が『こいつ神様なんだぜ』とか言われても普通だったら絶対に笑われる。

それどころか下手したら妙な色した救急車を呼ばれられないし、インターネットの中だったら散々罵詈雑言を並べられおまけに語尾に草が生えるような勢いだろう。

しかしそれをにとりは平然と言ったのけた。

惜しげもなく、それがこの世の常識だとしても言わんばかりに。

「あれ？ 言ってなかったかな？」

「いや、あの……さ。普通そんなの信じるアホはいないと思うんだよ。てか、もしかしてオレそう思われてたりする？」

「そんなことないよ？ うんと、どこから話したらいいのかな」

「さつきから思ってたんだけど、彼は人里の子なのかい？ ずいぶんと妙な格好をしているけど」

「ああ、それも説明し忘れてた。んつとねえ」

「お、お姉ちゃんの代わりに私が説明するよ」

まず最初に水織が外の世界の住人であるということ。

というか、このことに関しては自己紹介の時点で自分から言っ

おくべきだったのかもしれない。

話を聞き終えたにとりはぽかんと間の抜けた表情になっていた。

「な、なるほどね。じゃあ幻想郷のことを知らなくて当然だ」

「あのね。幻想郷には少数の人間と、それからたくさん妖怪とか神様が住んでる世界なの」

「にとり、地図貸してもらえる？」

「はいよ」

本棚から丸められた地図が出てきてそれを広げる。

地図には楕円のような地形に、何やら簡易な建物の絵が描かれていた。

それはゲームにありがちなワールドマップといったところか。

ここ、と穰子が地図中心のやや上部、巨大な山の絵を指で示す。

「これが私たちが今いる『妖怪の山』。幻想郷で山と言ったら大抵はここを示すわ」

「ふ、ふむ……ん、ここはさっきの神社か。で、こっちは？」

妖怪の山の頂上に小さな神社が描かれている。

パッと地図を見渡したが神社は博麗神社とこの神社しか描かれていない。

「そこは『守矢神社』。少し前に神社ごと幻想入りした二柱の神を祀る大きな神社よ」

「幻想、入り？」

「水織みたいに、外の世界や別の世界から幻想郷に入ること幻想入りと呼ぶの」

「ふうん……」

さつきから相槌を打ちながら聞いているが、本当にゲームの、それこそRPGみたいな話だ。

それが今目の前で現実には起きているというのが未だに信じられない。

「あとね、ここが人間の住む村の人里なんだよ」

「そういえばさ、銭湯って何処でやるんだ？」

「ああ、それは……この辺りだっけか」

静葉が示した村と、妖怪の山との間を水織が指す。

位置としては中途半端な場所で、どちらかといえば銭湯の位置は妖怪の山寄りだ。

唯一の人里から少し距離があるのだが、これでは客が入るのか心配である。

「普通、銭湯ってのは町の中とかにあるもんなんだが、これで人が入ってくるのか心配だな」

「そうなの？ ううん、じゃありフォームついでに引っ越しもする？」

「か、簡単に言わないでくれよ。廃墟ごと引っ越しだなんて出来るわけじゃないじゃないか」

外の世界なら巨大なトレーラーで住居ごと運んだりすることもできるけど。

うんうんと唸りながら思案を巡らせたが、結局良い案は浮かばなかった。

この件に関しては我慢せざるを得ないか。

「まあ、引っ越しとかは後で考えなよ。今は銭湯のリフォームを優先しよう」

「そうだね。じゃあよろしくね、にとりちゃん」

「うむ。道具とかの支度とか色々必要だし、とりあえず作業は明日からでいいかな？」

「おう。よろしく頼むよ」

それから姉妹が少々雑談を交わしてから洞窟を後にする。気がつくとも西の空に日が沈もうとしていた。

秋になれば当然日の入りも早くなる。

黄昏色に染まっていく妖怪の山は壮観で綺麗だった。

「もうこんな時間かあ。そろそろ私たちも帰らないとだね」

「そうだね。じゃあ水織、また明日」

「おう。また明日な」

山の奥へと向かう姉妹に手を振り麓を降りていく。

と、銭湯予定の廃墟まで来て一つ重大なことを思い出した。

「鍵、閉まってるじゃん……」

しかも最悪なことに、腹の虫まで鳴きだした。

よくよく考えれば、姉妹が助けてくれた時に水を口にしただけで今日は何も食べていない。

餓死するとは言わないが、このままだと何だか腹が切ない。

「そつだ。神社だ、霊夢のこの神社に行けば何か貰えるかも」

空腹の体に鞭を打って神社に向かって歩き出す。

女の子に助けを求めるなんて恰好がつかないような気もしたが背に腹は代えられない。

「……？」

ふと、背後が気になって振り返る。

妖怪の山がそびえる雄大な光景。

それなのに、先刻よりも色が濃いのは気のせいか。

「……まあいいや」

秋の夜は、思いの外早いということなのだろう。

さして気に留めることもなく水織は歩き出した。

歩き出して間もなく、幻想郷に夜は訪れた。

第五話 河童の機械技師（後書き）

きつちり三日更新。

ちよつと遅い気もしますが、我慢。

しかし、水織の能力の開花が遅いなあ……

それと、お気に入り登録、お気に入りユーザー登録、並びに感想やコメント、評価ポイント等ありがとうございます。

おかげさまでお気に入りユーザーが30名になりました。

これからも頑張りますね。

第六話 夜と遊ぶ少女

「……もう夜かよ。うう、ちょっと冷える」

歩き出して数分もしないうちに、水織の頭上には漆黒の空が広がっていた。

一つの星も瞬かない闇が幻想郷を包み込み一寸先も黒く染める。それは足元すらも、見えないほどに。

「おかしいだろ……」

流石におかしい。

確かに水織は田舎育ちで街灯のない道を歩くのは慣れてはいるがこれは流石に暗過ぎだ。

足を止める。自然自分の足音が消え周囲一帯が闇と静寂に包まれる。

虫の声も、風の音も、何も聞こえない無音の世界。

ゾツとするような静けさだった。

何も出来ずその場で立ち尽くしていることしか出来ない。

いや、そもそも自分は立っているのか？

それすらもハッキリとわからない。

「ふふふ。こんな夜更けに一人でお散歩？」

「だ、誰だ!？」

闇から響く囁きにも似た小さな声。

何もかもが見えない世界で突如響いたその声に水織は身構える。

「ダメだよお。こういう夜はね、とっても恐い妖怪が出るんだよ」

「恐い妖怪……」

さっき聞いた穰子の言葉が脳裏を過ぎる。

幻想郷は神や妖怪の住まう世界。

そして夜は、妖の世界。それは元いた世界でも同じ話。

といっても、本物を見たわけではないのだが。

「お、オイ！ ど、何処にいるんだよ！ 隠れてないで、出てこい！」

声が、震える。

何も見えない世界で聞こえる声がこんなにも恐いと思ったのは生まれて初めてだった。

見えない視界の中で首を動かしそれでも声の主を探そうとするが闇は一向に晴れず目の前は依然として暗闇。

声が、水織の周囲で反響する。

「うつふふ。さあて、私は何処にいるのでしょう……きゃッ!？」

ドテッ！ とまるで誰かが転ぶような音が背後からして振り向くが何も見えない。

だがその方向から微かに『痛た……』と呟き声が聞えたような気がしたのだが気のせいだろうか。

「ふ、ふふふ。私の姿が見えなくて恐いでしょ？ 恐いでしょ？ これからあなたは、私に食べられちゃうんだかむぎゅ!？」

今の声、まるで喋ってる最中に壁にぶつかったような感じの声だった。

どうもさっきから様子がおかしい。

確かに水織の近くに誰かがいる。

それなのに、誰かの声はすれども未だに一度たりともこちらに接触してこない。

「く、うう……こうなったら、しょうがない」

すると突然今まで目の前を覆っていた闇がゆっくりと晴れていき、歩いていった道と、その向こうで頭を押さえる少女が映った。

「女……の子？」

闇から抜け出したような黒い出で立ち、月明かりに照らされ幻想的に輝く金の髪には小さな赤いリボンが結わえられている。

何故か鼻先が何かぶつけたかのように赤くなっていたが、見た目は少なくとも水織よりかは年下に見える。

一見すると可愛い少女、いや、少女というよりかはもう少し幼い気もする。

どうやら闇の中で響いていた声の正体は彼女だったらしい。

涙目な彼女は一度水織を指差し、両手を広げながら構え声高らかに叫んできた。

「どうだ！ 恐かったでしょう！ さあ！ 観念して大人しく私に食べられちゃいなさい！」

「こ、恐かったっちゃあ恐かったけど……」

少女が姿を見せた途端、そんな恐怖など何処かへ飛んでいってしまっていた。

一瞬でも恐怖を感じた自分が馬鹿らしいと思えるほどだ。まさかこんな小さな女の子に脅かされていたとは夢にも思わなかった。

「あのさ、そっちこそこんな時間にうるついでちや危ないんじゃないか？ その、恐い妖怪が出る……んだろ？」

「な……ッ！」

少女の顔が赤く染まる。

怒りか、恥ずかしさか、或いは両方か。

頬を膨らませ両手をブンブン振り回す様は少々愛くるしいとさえ思った。

……別に年下に興味はないのだが。

「ば、馬鹿にしてえ！ もう怒ったんだから！」

頬を紅潮させ少女が手にしたのは、一枚の札。

「お札……？」

短冊のような長方形で、全体的に暗い色をした札を少女が高く掲げ何か呟く。

「闇符『デイマーケイション』」

すると少女が手にしていた札から突然黒い塊のようなものが現れふわふわと手の上で浮かび上がる。

意味不明の物体、何だアレは。

今、あの少女は何をしたんだ。

目の前で起こる不可思議な現象に思わず呆然としてみると、少女はニツと口の端をつり上げた。

「そおれ！」

「う、うわッ!？」

意味のわからない物体を、水織は大袈裟に横つとびして回避。
振り返ってみると、今まで水織の立っていた場所に大きな窪みが
出来上がっていた。

「何だよ……それ!？」

「私の術スペル・カード符。ふふふ。私が勝ったら、あなたを食べるね」
「は、はあ!？」

そんな物騒な提案を、笑顔で少女が言ってくる。

冗談じゃない、だいたい勝ったらって何だ。これは勝負か何かだ
とでもいうのだろうか。

意味がわからない。

いきなり視界が真っ暗になって、少女が現れて、訳のわからない
攻撃、のようなものを仕掛けてきて水織の頭は混乱寸前。

次々と起こる理不尽な現象に、どう対処すればいいのか見当もつ
かない。

とりあえず、今わかっていることは一つ。

「たぶん、絶体絶命のピンチってヤツだ……!」

嫌な汗が背筋を走る。

どうすればいい。

逃げるのか、それとも、応戦するのか。

見かけは少女同然だから物理的な力でなら勝てるかもしれない。

……が、首を振る。

女の子を殴るなんて冗談じゃない。

そんなことが天国の爺ちゃんに知られてみる。家族だというのに
七代崇られそうだ。

だとすれば応戦は、無し。

つまり、ここでやるべきことはただ一つ。

グツと足に力を込めて踏みしめる。

少女と対峙したまましばらく睨みあい、そして、

「得意の三十六計でッ！」

「ふふッ。逃げようたってそうはいかないよ」

Ｕターンして走り出した水織の頭上を、大きな影が通り過ぎ少女が水織の往く手を遮ろうと立ちはだかる。

「……！」

「せっかく見つけた久々の人間だもの。簡単に逃がすわけないじゃん」

「さよならはとつぜんに、とはいかないってか。くそッ」

「何の話？」

クスクスと嘲笑う少女の姿が、少し恐い。

少女の赤い瞳が、獲物を目の前にした獣のように小さく細まる。

「逃げたってことは、私の勝ちで……いいよね」
「……ッ」

渴いた喉のせいで息が詰まり、悲鳴を上げかけたのにそれは声にならない。

このまま、目の前の少女に喰われてしまうというのか。

……というか、そもそも喰われるってどういう意味だ。

それは一般的な食事という意味なのか。

それとも……まさかこんな年端もいかない少女が性的に喰うとか言い出すのだろうか。

何という肉食系少女。

嗚呼、どうせ喰われるのならいつそ紫さんに食べられ――

ビュヒュンッ！

水織の耳をかすめる、疾風のように鋭利な風切り音。

死に際に描いたピンクな世界が一瞬で現実に取り戻され、水織の足元に白く大きな針のようなものが刺さっていた。

「え？」

「何となく不穏な気配を感じたかと思えば、アンタたち何してんの」「げ、巫女……」

月夜に映える、赤と白の巫女服。

再び振り返ると、そこには霊夢が月を背後に腕を組みながら立っていた。

手には少女と同じような、赤い札を握りしめている。

平坦な声音で霊夢が言う。

「水織、アンタ此处で何してんの。銭湯はどうしたのよ」

「銭湯どころか鍵がかかってたんだよあの廃墟。静葉も穰子も帰っちゃったみたいだし、仕方ないからそっちに行こうとしてたんだ」

「あの焼き芋姉妹……人間を放って帰るとは良い度胸してるじゃないの」

「うう、こりゃ退散した方がいいよね。じゃ！」

「待ちなさい」

「ひゃん！？」

飛び出そうとした少女のスカートを、水織の足元に刺さっていたものと同じような大きな針が貫いていた。

速過ぎて全く目で追い切れなかったが、恐らく霊夢の仕業だと思う。

そのまま霊夢が少女に歩み寄り札を構える。

霊夢が近づくにつれ、少女の顔がだんだんと引き攣っていく。

「また私に見つかるなんて、運が悪かったわね」

「こ、こうなつたらしょ、勝負だ！ 私が勝つて、あの人間を食べる！」

「往生際の悪い……」

針で貫かれたスカートを少し千切って少女が大きく飛び退き宙に舞う。

「と、飛んでるぞアイツ！？」

千切れたスカートでややセクシーさを増しながらまたしても少女が札を構え詠唱する。

「月符『ムーンライトレイ』」

手にした札から、月光にも似た銀色の光線が一直線に霊夢に伸びる。

威力のほどはわからない、だがさっきの攻撃でも地面を抉るほどの威力があった。恐らくあの攻撃も同等か、もしくはそれ以上のはず。

「霊夢、避ける！」

「言われなくても避けるわよ、バカ」

有言実行。

霊夢は少女の光線をひらりと飛んで回避すると、目の前で浮遊する少女と同じくふわりと宙に浮かぶ。

目の前で、二人の少女が空を飛んでいる。

あまりの光景に言葉が出ない。

そんな水織を余所に、二者の戦いは続けられる。

少女は光線を撃ちまくって、霊夢はそれをヒラリヒラリと回避していく。

「……どうなってんだ」

何度目かの光線を回避した時、突然霊夢の動きが俊敏になり少女の攻撃が追いつかなくなっていく。

水織もギリギリ目で追うのがやっとだった。

「術符使うまでもないわね。このまま終わらせるわ」

すると霊夢の周囲に、先刻見せた大きな針のようなものが浮かび一斉に少女へと突き進んでいった。

何本もの針が貫き、少女の体は一瞬で標本の昆虫みたいな張り付け状態となってしまった。

「うう……ぐすっ、ひっぐ」

「はい、私の勝ち」

泣きべそをかく少女、それを見下ろす巫女。

パツと見、少女を襲う悪の巫女とも見えなくもない構図だ。

くるりと振り返り、背後の少女には目もくれず霊夢が水織に言う。

「さ、とりあえず神社にいらっしやいな。その分じゃ、何にも食べてないんですよ」

「そっただけどさ……あの」
「何？」

水織は張り付けの少女を指差す。霊夢は首を傾げるだけで何も言わない。

「あの子、どうするんだよ。あのままにしておくのか？」

「ま、人間を襲った罰ってどこかしら。放っておいていいの」
「でも」

「少なくとも、アンタは命を狙われたのよ。そんな相手気にしないでいいでしょ」

「ううん……そうなんだけど」

気がつくのと、霊夢はさつさと神社の方へと歩きはじめていた。

ただの一度も振り返らない。

霊夢を追いかけていた水織だが、背後に残された少女が気になって踵を返す。

「あれは、流石にやり過ぎな気がする」

罪を憎んで人を憎まず、だ。

張り付けの少女の元へ近づくと、つれ泣き声が聞こえてくる。

水織と目が合うと、真っ赤な瞳が充血してさらに赤くなっていた。

「この針ってさ、オレでも触れるのかな」
「え……？」

白い針にそっと触れる。

ほんのり温かい不思議な感触だが、どうやら触っても無害のようだ。

一本ずつ抜いていき、やがて少女に自由が戻る。

「な、何で助けるの」

「誰かを助けるのに、理由なんかいるかい？」

「……？」

水織の、人生で一度は言っておきたい台詞第二位。
ちなみに一位は『釣りはいらねえ』だったりする。三位以降は考え中。

「ほら、ここにいとまた霊夢に怒られるぜ。早く行った行った」

「あ……ありが、と……」

少女は何度も何度も水織を振り返りながらちよつとずつ歩いていき、やがて夜闇の中へと姿を消した。

何となく、心がスカッとした。

やっぱり女の子に暴力はいけない。

例えどんな事情があっても、女の子同士でも、だ。

「さて、霊夢を追いかけないと」

神社について霊夢に『さっき何してたの』と訊ねられたので正直に答えた。

晩飯が無くなった。

第六話 夜と遊ぶ少女（後書き）

何も更新してないのにお気に入りに入りユーザーがどんどん増えるw
登録、ありがとうございます。

三日に一度つてのは意外とバランスいいかもしれませんね。

では、また三日後ぐらいに。

第七話 未だ見ぬ世界

「……………む」

視界に飛び込んでくる見覚えのない天井。

掛け布団を吹っ飛ばして跳び起きると水織はすぐさま自分の体を確かめた。

いつものシャツとズボン、傍らには愛用のジャンパーが無造作に置かれている。

しかし周囲には見覚えのない家具やら襖やら。

そして水織は思い出す。ここは博麗神社だった。

「やっぱり夢じゃないのか……」

半ば諦めつつジャンパーを羽織って外に出ると神社入り口の取水場で顔を洗う。

寒いとまではいかないが、神社を包むひんやりとした朝の空気に水織は小さく身震いした。

「あら、早いよね」

気がつくのと霊夢が水織の後ろに立っていた。

ずいっとタオルを差し出されたので遠慮なくそれで顔を拭くと幾分か眠気が取れてスッキリした。

「まだ朝の六時よ。そんなに早く起きてどうするの」

「誰かさんが晩飯くれなかったから腹減って起きたんだよ」

どうせならメザシの一匹でもよこせってんだ。

腹の虫がやや遠慮がちにくうと鳴く。

そんな話をしたせいで余計に腹が減ったではないか

「いいわ。少し早いけど朝食にしましょうか。色々と話さなきゃいけないこともあるし」

やれやれと首を振った霊夢の後を追って食卓につき朝食をとる。
白米、味噌汁、焼き魚に漬物……元いた世界でも馴染みの、至って普通の和食だった。

「んじゃ、いただきます」

食事の前で手を合わせ、早速箸で焼き魚をつまむとほぐれた身から湯気が湧き出て香ばしい香りがふわっと漂う。

料理は出来たて、しかも今の水織は空腹。味のほうは言うまでもない。

「……美味しいや！ 腹が減ってるから余計にそう感じる」
「私の料理の腕にはノーコメントだね。まあいいけど」

食器があらかた空になったところに霊夢が口を開く。
昨日戦っていた少女、ルーミアのことだ。

「ルーミア……？」

「アイツは歴れっきとした妖怪よ。『闇を操る程度の能力』で人を暗闇に閉ざし喰らうの」

「闇を操る能力……」

だからあの時急に目の前が真っ暗になったのか。
しかし、横文字の妖怪なんて初めて聞いたぞ。

妖怪っていうと、もつと小難しい漢字の名前ばかりだと想像していたのだが。

残っていた焼き魚の尻尾をかじる。

「そのわりには、自分の作りだした闇で視界を失くしてしまうらしいけどね」

だからあの時鼻先すりむいてたのか。

……？ あそこはただの一本道だったのに、いったい何に顔をぶつけたってんだ？

「というかさ、その『能力』って何だよ。ここの妖怪はみんなそういう『能力』ってのを持ってるのか」

「ええ、別に妖怪に限った話じゃないわ。私だって持ってるし、あの焼き芋姉妹も持ってるわ」

「霊夢の能力って？」

「私は『空を飛ぶ程度の能力』」

「空を飛ぶ……」

あの時霊夢が突然飛び上がったのはその能力の所為か。

残ったご飯を咀嚼しながら昨日のことを思い出す。

能力は、何となくわかった。

じゃあ昨日戦ってた時に使ったあの光や針は何なのだろうか。

「まあ、あれは私たちなりの決闘と言ったところかしらね」

「決闘？」

「そ。めんどくさいから細かい話は端折るけど、要は簡単に勝ち負けを決める方法よ。勝ったら勝ち、負けたら素直に負けを認める」

「ふうん……」

味噌汁の中身が無くなったので椀を霊夢に渡すと嫌そうな顔された。

おかわり禁止なら先に言え。

こっちは成長期なんだぞ、成長期。

「とまあ、そんなところかしら。それぐらいの話ならあの姉妹にもわかるから何かあればそっちに聞いてちょうだい」

「ん、了解」

食事を終えて自分の食器を片づけると、途端にやる事が無くなってしまった。

このまま適当にごろごろしてもいいのだがふと何となく廃墟が気になった。

霊夢に外出したいと告げると数枚の符を手渡された。

昨日の戦闘で見たものほとんど同じものだが、これは何となく違うような気がする。

「護身用よ。道中、また妖怪に襲われそうになったらこれを千切りなさい」

「え？ 今は朝だぜ？ 妖怪なんて出るわけ」

「夜にだけ活動する妖怪なんてそうそういないもの。朝だって、スキあらば襲ってくるに決まってるじゃない」

じゃ、と素っ気ない言葉の後霊夢は社の方へと戻っていつてしまった。

手渡された札を見つめゴク、と唾を飲み込む。

「……ま、まあ大丈夫だろうよ」

鳥居を抜けて石段を駆け降り妖怪の山へと向かう。

朝日に照らされた人気のない田舎道は元いた世界とよく似ていた。そういえば異世界だというのに日本語で通じているっていうのは不思議だ。

よくよく考えれば、神社や妖怪なんて言葉もほとんど日本と同じだ。

ここは日本の何処かなのだろうか。

「何だか、妙な感じだな」

そうこう考え事しながら歩き続けて……十分ほどだろうか。

時計が無いので時間の感覚がわからないが、気がつくと最初に紫に案内された廃墟の屋根が水織の視界に映っていた。

……遠い。

本来、銭湯というのは近所にあって気軽に行ける環境の方が望ましい。

このままでは銭湯としては危うい立地だ。

「妖怪も出るって話だし、こんな辺鄙な場所で客が来るかなあ……ん？」

廃墟の前に、見覚えのある赤いスカートが揺れている。帽子をしてないし、あれは恐らく静葉だろう。

「おはよう、静葉」

「あ！ 水織君！」

振り向いた静葉は水織の姿を見てビックリしたような顔をしていた。

そのままトットと水織に近づき体のあちこちを見つめてきた。

「な、何だ何だ？」

「怪我とか、ないの？ 大丈夫？」

「いや、何ともねえよ。いきなりどうしたんだ？」

「え、えつと……ごめんね」

「……？」

何で謝られたのだろうか。

水織が首を傾げると、静葉は申し訳なさそうに顔を俯かせそばそと話します。

「昨日、水織君のこと放っておいて帰っちゃってさ。神様なのに人間を追いてっちゃうなんて……」

「ああ、そのことか。別に気にしてねえよ。オレも何にも言わなかったし」

「だ、だけど」

「いいって。そんな顔すんな」

神様だろうとなかろうと、女の子がそう簡単に暗くなっちゃいけない。

女子は笑顔であるべきだ。

そしてその笑顔は、男子が作ってやらねば。

それから適当に雑談をしながらしばし廃墟の前でのんびり過ごす。昨日の夜の出来事、ルーミアという妖怪に襲われたことと助けたこと。

それから今朝の霊夢の話。

「なあ、静葉たちにも神社とかあるのか？」

「え……？」

水織は何となく気になって訊ねてみた。

静葉たちの家、というか神社とはどんなものなのだろう。

二人は秋を司っているという話だから神社というよりもっと大きな御殿とかになったりするのだろうか。

うわ、どうせならあんなちっぽけな神社よりそっちに泊りたかったかも。

すると、何故か静葉の顔が再び陰ってしまった。

「も、もしかして聞いちゃまずかったか？」

静葉は軽く微笑みながら首を振ったが、その笑みにも何処か影が差しているような気がするのはいのせいだろうか。

「う、うん。私たちの神社は、その……」

「お姉ちゃん！」

妖怪の山の方から威勢のいい声が聞こえてくる。

振り返ってみると、山の斜面を裸足で駆け降りてくる穰子の姿があった。

「あ、水織！ よかった、無事だったんだ」

「何とかな。てか、二人ともここで何してんだ？」

「水織を探そうと思って来たの。だけどすぐ見つかってよかったわ」
「うん。水織君が無事で安心した」

神社のことを聞きそびれてしまったが、静葉の顔が笑顔に戻っていたのでこれ以上は聞かないことにした。

別に今聞く必要もないし、また今度機会があるときに聞けばいい。

「それで、今日はどうするんだ？」

「にとりちゃんがもう少ししたら来るって言ってたし、それまで待

ってよつか」

そうして間もなく、妖怪の山の方からにとりが一人で姿を見せた。仲間は後から合流とのことで、とりあえず廃墟の中を見たいとのこと。

水織が玄関の鍵の旨を伝えると、にとりはレインコートのポケットから小さな針金のようなものを取り出す。

む、これ見覚えがあるぞ。確かキーピックとかいうヤツだ。

こつちの世界でも女性が装備しているものなのか。

「これぐらいの鍵ならちよちよいの……？　どうかしたか水織？」

「い、いや。何でもない」

しかしあんな細長い針金でどうして鍵が開くのだろうか。イマイチわからん。

やがて力チ、と小さな音を立てて廃墟の戸が開くと埃っぽい空気がむわっと立ち込めてきた。

「う……でも、割と綺麗なんだな」

正面両手には小さなカウンター。

奥には二つの戸が左右に並んでいて、恐らくそこは脱衣所でその奥が浴場となっているんだろう。

土足のまま上がり脱衣所であろう部屋の戸を開ける。

案の定中には衣類などを置く棚が置かれていた。

そして最奥の戸を開けるとこれまた予想通りタイル張りの大きな部屋となっていた。

「うお、想像してたよりもかなりデカイな……」

浴槽の大きさは、一言で言うならだいたい小学校の小プール程度、おおよそ20メートル前後ぐらいだろうか。

深さもそこそこあるし、これなら大の大人でもゆったりと湯船につかれそうだ。

正面向かって右手の壁際には蛇口がしっかりと備え付けられているし、水さえあればすぐにでも営業できそうだ。

とはいえ、もちろんこのままでは意味が無いので。

「ボイラー室は何処だろな……」

部屋を出て探すが、ロビーにそれと思わしき扉は見当たらなかった。

裏口だろうか。ぐるっと建物を一周して歩くと小さな灰色の扉を見つける。

戸を開けて階段を下りていくと薄暗い部屋の奥で明かりがちらついていた。

「お、水織」

「にとりか。何でここに」

「何でって、ボイラーを見にきたのさ。もちろんここも直さなきゃいけないしな」

「機械に強いつてのはホントなんだな」

にとりの足元に散らばる工具の山がそれを物語っていた。

水織もしゃがみ込んで一緒にボイラーを覗きこむ。

といっても、かろうじて操作方法がわかるだけで機械などさっぱりなのだが。

複雑な機械を目の当たりにして水織が小さくうめく。

「……ホントに直るのか、コレ？」

「直さないと銭湯出来ないんだろ。これぐらい直してみせるよ」

「頼もしいカツパだな」

「こ、これぐらいどうってことないのさ」

にとりが工具を手に早速作業に取り掛かる。

仲間が来てからでいいんじゃないや、と聞いたら『細かいところは今のうちに終わらせてしまふ』とのこと。

作業を始めたにとりの表情が真剣そのものになったので水織は大
人しく退散した。

このままいてもしょうがない。後できゅうりでも渡してやろうか。
……好きなのかどうか知らないけど。

「水織く〜ん！ 何処〜？」

静葉の声が上から聞こえてくる。

何の用だろうか。

ボイラー室を出て玄関の方へ向かうと、静葉と穰子と、それから
紫の姿を見つけた。

「あら、おはよう水織君」

「おはようございます、紫さん」

「……私たちの時と態度が違い過ぎない？」

「気のせいだ」

「うつふふ。どう？ この建物使い物になりそう？」

「もちろんです紫さん。ただ、ちよつと問題が」

「問題？」

水織はこの銭湯の立地について紫に説明した。

妖怪が蔓延るこの世界で、しかもこんな辺鄙な場所では客が見込
めない。

そこで、以前話に聞いた人里に銭湯を移設したいと水織は訴えた。

「人里に移設……そうね。そうしないと儲からないものね。わかったわ。その件は私に任せてちょうだい」

「ありがとうございます、紫さん」

「だったら、人里に下見に行つてきてはどうかしら？」

「下見……か」

そういえば水織は妖怪の山と博麗神社以外の場所にまだ訪れていない。

銭湯の経営もそうだが、単純に幻想郷がどんな場所なのかは水織も興味があつた。

「じゃあ一緒に行こつか。私たちが案内してあげるよ」

「そう……だな。どんな場所で商売するのは知っておかなきゃいけないし、よろしく頼むよ」

「うん、頼まれた」

姉妹の簡単な説明を受けながら人里へと向かう道を歩き出す。

期待と不安で何だか胸がドキドキしてきた。

と、静葉が目の前を指差し声を上げる。

ただっ広い平原の真ん中に小さな集落が見えてくると、自然と足の取りは加速していた。

第七話 未だ見ぬ世界（後書き）

少し修正してたら遅くなりました；
すみませぬ。

ちよつと話のテンポが遅い気がするけど気のせい。
そして、恐らく一章の中で水織君の能力が覚醒することはなさそうです。

では、また三日後くらいに。

第八話 幻想郷の人里

それはまるで、自分がタイムスリップをしたかのような不思議な感覚。

人里に辿り着いた水織がまず最初に抱いた気持ちはまさにそんな感じだった。

「まるで歴史の教科書みたいだな」

何となく想像はしていたのだが、いざ目の当たりにするとその衝撃は凄まじい。

行き交う人は皆一様に古めかしい着物姿。

水織が着ているようなズボンだとかジャンパーだとか、そういった類の恰好をしている者は誰一人いない。

しかしそんな彼らから見れば奇抜であろう恰好をして歩いているのに、周囲の視線が大して集まらないのは何故なのだろうか。

水織はそのままあれこれと考えながら姉妹と人里の中を歩いていく。

「あ、静葉様だ！」

「穰子様！」

里を歩いていると姉妹に手を振る少女や両手を合わせて拝む老婆の姿がちらほら見えた。

静葉も穰子も笑顔でそれに応えている。流石は神様といったところだろうか。

歩き続けて里の中心部辺りにつくと三人で少し休憩をすることになり、静葉は近くの茶屋から饅頭と湯のみを持ってきた。

「おばさんがサービスだつて」

「ふうん。神様ってのは役に立つんだな」

「ちよつとはありがたいと思いなさいよ」

「ううん……」

貰った饅頭を口に放り込んで考える。

確かに凄い話なんだろうけど現実味が無いというか、何度聞いてもイマイチしっくりこない。

別に海を割ったりするわけでもなし、静葉と穰子の姿から見てもそんな力があるようにはまるで見えないし。

隣で饅頭を美味しそうに頬張るその姿は何処からどう見ても普通の女の子のそれだ。

「そういえばさ、静葉にも穰子にも『能力』ってあるんだよね？」

「あるよ。私は『豊穰を司る能力』。そしてお姉ちゃんは『紅葉を司る能力』さ」

「豊穰と、紅葉……」

豊穰とは、その名の通り作物の穰が豊かに実ることだろう。^{みのり}

そして紅葉は……やはりあの、モミジやイチョウが色付くあの紅葉だろうか。

豊穰はともかくとして、静葉の紅葉っていうのは……

「何だか、地味な能力だな」

「あ、あう……」

む、静葉の顔がわかりやすく暗く沈んでしまつてオレの目の前に右フックが迫りくがっはあ！？

「な、何しやがる穰子！？」

「お姉ちゃんが気にしてることを平然と言っな、バカ！」

「んなコト言ったって、オレは思ったことを素直に」

「い、いいんだよ穰子。気にしてないから」

「お姉ちゃん、顔が真っ暗なんだけど」

「は、ははは……」

今の静葉にはどよんという効果音が世界一似合うと思う。

しかし、妹は豊穰だなんて立派な能力なのにどうして姉はシヨボイのか。

某大佐曰く『兄に勝る弟などいない』ではなかったのだろうか。

この場合は『姉に勝る妹』だけ。

「お、お姉ちゃんはこの能力で紅葉を操って、秋の侘^わび寂^さびを表現するのが役目なの！」

「侘^わび寂^さび……？」

間を取ったらワサビだな、とか言ったら間違いなく穰子のデンプシールドが待っているので口の中に閉じ込めておく。

「侘^わびと寂^さびは、言わば閑寂^{かんじやく}と清澄^{せいちょう}の世界。お姉ちゃんは紅葉で世界に秋の雰囲気を出してあげてるの！」

「侘^わび寂^さびってアレだろ？ 茶道とかで重視する雰囲気の」

「侘^わびは「わぶ」という『気落ち』や『辛いと思う心情』を表す動詞から生まれた言葉で、寂^さびも同様に「さぶ」という『古くなる』『色褪せる』という意味の動詞が coming しているの」

やや顔を上げながらぼそそと静葉が説明する。

侘^わび寂^さびの通り、今の静葉の顔は穏やかで物静かで、少し寂しげだった。

「だから、私が頑張れば幻想郷が、この世界が秋に変わっていくの。それは静寂と、ほんの少しセンチな季節で……」

「あわわ……！ お、お姉ちゃんネガティブになるの早いよ！ まだ私たちの秋は始まったばかりで」

「そっか。でも、案外悪くない能力だな」

「え……？」

静葉と、ついでに穰子が意外そうな顔してこちらを覗きこんでくる。

湯のみをすすって一息つけてから水織は言った。

「風情があっていいじゃん。オレはそういうの好きだし。地味って言ったの、気にしてるようなら謝るよ。ごめんな」

「う、ううん。別に、私もそこまで気にしてないし。それに」

「それに？」

暗い顔が途端パツと明るくなって笑顔に戻る。

静葉の頬が仄かに紅葉色に染まっていた。

「褒められたの、初めてだから。嬉しい」

「ん。そっか」

「……えへへ」

水織は残った饅頭を口に放り込んで飲みこむと、茶屋の外に出てしばし里の様子を観察する。

今いるここはちょうど東西南北に道が伸びていて意外と人通りが多い。

真ん中にはぽっかりと広い空間が開いていて今は子供たちがわいわいがやがや鬼ごっこらしき遊びを楽しんでいる。

……もしも、ここに銭湯を建てたらどうだろうか。

これなら里の何処からでも気軽に立ち寄れて客入りはかなり期待できる。

銭湯を移設するならこれ以上のベストポジションはないと思う。

「移設するとしたら、ここがいいな」

「銭湯？ だけど、子供の遊ぶ場所無くなっちゃうよ？」

「無駄にだだっ広いからその点は心配ないんじゃないか？ ……むしろ、オレはどうやって移設するのかを心配してるんだけど」

「そういえば、紫さんは任せて」とか言ってたね」

「あの人って、何か胡散臭いんだよなあ」

「バカ。そこはミステリアスと言ってやるんだ」

「神様相手にバカ呼ばわりって……というか水織、紫さんと私たちとで扱いがずいぶん違うよね」

「気のせいだっけの」

茶屋を出てほんの少し進み移設候補地を確認する。

十字路のど真ん中というのは非常に便利な立地だ。移設するなら是非ともここが望ましい。

「じゃあ、一旦あの廃墟に戻ろうぜ。その事を紫さんに話さない」と
「そうだね」

「水織、そういえば今日の宿はどうするの？ 決まってるなら私たちと行こうよ」

「ん、そうだな。また霊夢のところに厄介になるのも悪いし……」

これなら図らずとも姉妹の神社に向かえそうだ。

素晴らしい御殿を頭の中で想像しながら水織たちは妖怪の山の方へと引き返して行った。

・
・
・

水織たちが戻ると、ついさっきまで廃墟だった建物が消え失せていた。

いや、消え失せたという表現は正しくない。

「す、すっげえ！　まだ半日ぐらいいしか経ってないのに、もう直ってる！？」

水織たちの目の前には廃墟改め、立派な銭湯が出来上がっていた。

「おお、水織か。リフォームも全部終わったよ」

あまりの仕事の速さに驚愕する水織の前に、スパナを抱えたにとりが誇らしげな顔を見せた。
何ということでしょう。

あれだけ荒れ放題だった廃墟が河童の手により生まれ変わってしまいました。

いったい何処のリフォーム番組だ。

そしてあのリフォームの資金って何処から出てくるのだろうか。
説明で出てくる資金以上に人件費が凄そうなのだが。

「ま、私たちが本気を出せばこんなもんさ」

「私たちって、仲間とやらは？」

「リフォームが終わったもんだから焼き鳥屋に打ち上げ。私は説明がてら残ったのさ」

「そっか……へえ、すげえなあ」

正面玄関を抜けると、まず目についたのが予想以上に広々とした

ロビーだった。

両側のカウンターはピカピカに磨きあげられ自分の顔が映るほどにまで綺麗に仕上がっていた。

「脱衣所も完璧。残るは……！」

ガララ！ と小気味いい音を立てると浴場に踏み込む。
純白の壁に、薄く青みがかったタイルが敷き詰められ、元いた世界でも見た、それはまさしくオーソドックスな公衆浴場。
シャワーも蛇口も新品同様に光り輝き、今すぐにも熱いお湯を注いでくれそうだ。

「……あ」

「どうだ水織。これなら銭湯とやらが経営できそうか？」
「あ……ああ、バッチリだ。河童の技術って凄いいんだな」
「ふふん。もっと見直してもいいんだぞ。ハッハッハ！」

妙にご機嫌なにとりがボイラー室の使い方を教えるからと言って水織を残し浴場を出る。

確かに、あの廃墟を半日程度でここまで修復する技術は凄い。
完成した浴場を見て水織はそう思うのだが、一つだけ、心残りがあつた。

「……まあ、知らないんだから当然か」

浴場入って正面の壁は、真白なまま何も描かれていなかった。

・
・
・

やがて日が沈み、説明を終えたにとりが妖怪の山に帰ると、水織は銭湯隣に新しく作られた小さな小屋で寝転がっていた。

この小屋はにとりのサービスだそうで、水織の自宅代わりにどうかとのことだ。

「おかげで寝る場所には困らなくなったな。へへ、一人暮らしみたいで緊張するな」

とはいえ、家具は最低限なものだけしかないので今現在のこの部屋はがらんとしている。

物々しいよりかはマシだが、逆に何もないと妙に落ち着かない気もする。

さて、これからどうしようか。

去り際に穰子から貰った柿をかじりながらポケットしていると、部屋の戸がコンコン、とノックされた。

こんな時間に誰だろうか。

静葉が何か忘れ物でもしたのか、それとも穰子だろうか。

「へいへい。今開けますよっと」

引き戸を開けてフツと顔を上げると紫紺の瞳と目があった。

「こんばんわ、水織君」

「ゆ、紫さん！？ え、ちょ、わ、な、なな何の用ですか!？」

「何の用って、ついさっき貴方が銭湯を移設する場所が決まったって言ったから」

「え？ 紫さんにそんなこと言ったかな……?」

今日紫と会うのは朝と今とを合わせて二度目のはずなのだが。

紫は部屋へと上がりちゃんと座布団の上に座り込む。正座してる姿も美しい。

「それで、人里の真ん中に銭湯を移設したいのよね？」

「は、はい！ 一番人通りも多いし、客入りが一番見込める場所だと思いますして」

「試しに聞くのだけれど、博麗神社の傍はどうかしら？」

「え？ 博麗神社ですか？ ううん……」

あの神社、こう言っでは失礼だが参拝客があまりないような気がする。

里から見ても遠いし、その道中には妖怪も出るし危険で客入りとしては微妙だろう。

神社の近くに銭湯、というと逆に何かご利益がありそうなのだが。

「まあ、それは冗談だからいいわ。今日はもう遅いし、移設は明日でもいいかしら？」

「は、はい！ でもあの、どうやってこの建物を移設するんですか？」

「ん？ 聞きたい？」

紫は扇子をそつと口元に寄せ、ふふふつと何か意味ありげな妖艶な微笑を漏らす。

怪しい、いや、妖しく美しい顔だ。

自分の顔が意味もなくどんどん熱くなっていくのをただただ感じていると、やがて紫が声を上げて笑いだした。

「ふっふふ。そんな顔していったい何を考えているのかしらねえ？ 一度貴方の心の中を覗いてみたいわ」

「ど、どうぞ遠慮なく！？」

「ふふふ。じゃあまた明日、ね」

帰る直前、茶目つ気たつぷりにウインクを残して紫は部屋を去っていく。

ポカンと呆け、そのまま呆けたままいつしか水織は眠りについてしまっていた。

そして……

・
・
・

「……あれ、オレ寝てたのか」

何も着替えず、そのままの姿。

適当に雑魚寝したせいか少し体が痛い。寝違えたかもしれない。

苦にならない程度に体をほぐし、洗面台で顔を洗いタオルで拭く。

……と、何やらがやがやと人のどよめき声のようなものが聞こえ顔を上げる。

「え……？　ここ、妖怪の山の麓だぞ？　何で人の声なんか……」

気になって窓辺に近づきカーテンを開く。

目の前には訝しげにこちらを見つめたり指を差したりする人々の姿。しかも大量に。

それはまるで、下見に行った人里の住人がこの銭湯に集結したかのような光景だった。

「うお、すげ……！　まだ開店もしてねえってのに……」

とにかく、今にも押し寄せてきそうな彼らに事情を説明しなくては。

慌てて靴をはき玄関の戸を開け放ち外に出る。

「……す、すみません！　まだお店は開……店、してな……」

突如姿を現した水織に一旦どよめきが止まり、そして水織の言葉も止まる。

何故か。理由は至極単純。

「は……？　は……？」

見覚えのある木造建築群。

目の前の人は古めかしい着物姿。

親の背に隠れる少年少女の姿は、昨日鬼ごっこをしていた子供たち。

「ど、どうなってんだあああああ！？」

水織が寝ている間に摩訶不思議な天変地異が起こったとでもいうのだろうか。

それは、寝起きの頭では理解できないような、あまりに突拍子なく信じ難い光景。

水織は今、人里の中心で張り裂けんばかりの奇声を発した。

第八話 幻想郷の人里（後書き）

またまたユーザーも、お気に入り登録件数も増え、ありがとうございます。

読者の皆様にはいつも感謝感謝です。

そして今日も調整して遅れてすみませぬ；
最近チェックが雑なので、また誤字とか脱字とかあるかも……ガクブル。

感想、コメント等、何方でもどんなことでも、気軽に書きこんでいただければ嬉しいです。

ではまた三日後くらいに。
それでは。

第九話 名付けて『秋の湯』

「ほえ…… ホントにあっさり移設しちゃったんだねえ」

人里のど真ん中、静葉は出来上がったばかりの銭湯の屋根を見上げながらぼんやりと呟いた。

屋根の向こうには見事な秋晴れが広がっていて、まばらな雲が空を泳ぎ澄み切った青の空に彩りを添えている。

「朝起きて外に出たら里の人たち全員に変な目で見られた。恥ずかしいわ気まずいわ……」

静葉から貰った栗をつまみながら水織がやれやれと嘆息しながら呟く。

おかげで静葉たちが来るまでずっと部屋にこもりっきりで何も出来なかった。

「あの紫って人の仕業なんだろうけど…… とんでもない人だね」

「流石紫さんだ。そこに痺れるし惚れる」

「…… 水織、八雲紫は妖怪だって」

「おはよう、三人とも」

「うわ！？ 紫さん！？」

いつしか水織と姉妹の間に日傘を携えた紫が現れていた。

ほんの少し眠たげな表情で、小さな欠伸を扇子で優雅に隠していた。

「銭湯の位置はここでもいいのかしら？ 人里の真ん中だと聞いたから」

「で、でもいきなりやることはないんじゃないですか？ オレ朝起きたら人里でめちゃくちゃビックリしたんですけど」

「夜じゃないと目立ってたまらないもの。まあ、結局目立ってしまうんでしょけど」

「そりゃあ……」

人里のど真ん中に突如現れた巨大な謎の建物。

元いた世界なら新聞の一面を余裕で飾れるし、朝のニュースならまず一番最初に紹介され生中継ものだろう。

……そういえば、この世界のメディアってどんなものなのだろう。やはり古式ゆかしくかわら版とかだろうか。今のところそんな看板見かけたことないけど。

「さて、私はそろそろ退散するわね。少し疲れてるし、ここでとかく追及されるのも面倒だから」

「え？ 追及？ いったい誰に」

「しっつれゝいしまっす！」

突如水織の目の前に漆黒の影が過ぎたかと思うと、そこには黒髪の少女が立っていた。

白シャツに黒のスカートというシンプルな姿で、手には小さなメモ帳とペン。

無垢な好奇心な瞳の少女は、パツと見かなり可愛い。

しかしながら一番目についたのは彼女の背の、漆黒の翼だった。

「うわ……！？ 空から女の子が落ちてきた！？」

「失礼な。私は華麗に着地したじゃありませんか」

「あ、天狗の新聞記者さんだ」

「天狗の、新聞記者……？」

天狗って、あの鼻が高く赤い顔のあの妖怪だろうか。

だが目の前の少女は漆黒の翼はあれど、別に顔が赤いわけも無し
特別鼻も高いわけではない。

静葉は彼女を天狗の新聞記者と言っていたが……

「どうもこんにちは。私、清く正しい射命丸と申します。はい、こ
ちら名刺」

「ど、ども」

名刺なんて初めて貰った。

小さな名刺には『射命丸^{しやめいまる} 文^{あや} 文文。新聞編集長』と書いてある。

「ぶんぶん新聞……か？ ずいぶんダサイ名前の新聞だな」

「そんな読み方する人初めて見ましたよ。文文^{まる}。新聞！ ですよッ」

「……結局ダサイな」

横で静葉と穰子が口元を手で覆って笑いを堪えている。

この『文文』の後の句点はそう読むのか。おかげで妙な恥をかい
てしまった。

こほん、と仕切り直し文は手帳を開きペンを水織の鼻先にズバツ
と突きつける。

「さて、早速取材です。えと、まずお名前は？」

「み、水織です。草津水織……」

剣幕のせいかわず敬語が出てしまった。

名前を聞いた途端、文はすぐさま手帳に何かを書き始めた。恐ら
く水織の名前だろうけど。

「では次。こちらの建物はいつたい何なんですか？ 先ほど、あな

たはあちらの小屋から出てきたようですけど」

「こ、これは銭湯です。えと、あの小屋はオレの自宅というか、何というか」

「ふむふむ……して、あなたは何のために銭湯を？ 何故ここに？

あなたの出身は」

「えっと、それは……」

矢継ぎ早に繰り出される質問に押されっぱなしの水織。

勢いのまま様々な質問に答えさせられることとなってしまった。

もちろん水織が外から来た人間だということも。

そして何故か個人的な情報まで根掘り葉掘り洗いざらいに。

「はいはい。これにて取材は終了です。お疲れさまでした」

パン、と手帳をたたむ音で取材終了。

文の取材を終えた水織はマスコミに追われる芸能人のような気持ちだった。

ただの質疑応答だというのに、この短時間で体にドツと疲れが押し寄せてきた。

「では、早速号外を出させていただきますね！ それでは、っとおッ！」

何をそんなに急いでいるのか、文は手帳を胸ポケットにしまい込むとすぐさま地面を蹴って飛び上がった。

気がつくと文の姿は彼方へと消え失せ、銭湯前にはポカンと立ち尽くす水織と姉妹だけが残された。

「……何なんだ、あの人」

「幻想郷最速の新聞記者さんだよ。私たちも、時々新聞読ませて

らつてるの」

「早速銭湯のことが記事になるんだろうね。ちょっと楽しみだけど、あの人の記事は玉石混交（ぎよくせきこう）というか、何というか」

「ふうん……」

しかし、ある意味では幸先の良いスタートかもしれない。

新聞というメディアにこの銭湯のことが書かれていれば良い宣伝となる可能性が高い。

誰かしら記事を見れば興味を持ち、この銭湯を利用してくれるかもしれない。

最も、まだオープンしてはいないしその日にちも決まっていないのだが……

「水織君」

「ん？」

「それであの、銭湯のことなんだけど」

「ああそうだな。ここで立ち話してもしようがないし中に入ろうか」

銭湯自体は出来上がったのでこれからの経営のことを考えなくてはいけない。

三人は正面の玄関をくぐり銭湯内へと入っていった。

・
・
・

「水織君、それでね」

「わかってるよ。お店自体は出来たんだから次は経営の話だよな」

カウンター奥の事務所で三人で座って早速会議。これから決める

こと、やることが大量にある。

「まず最初に決めるのは」

「お店の名前ね」

「……多分違うと思うぞ穠子」

最初に決めるのはもちろん……残念ながらそこから先が出てこなかった。

「……な、何から決めたらいいんだろうな？」

「えゝ？ 水織君、しっかりしてよ」

「んなこと言ってもなあ……」

ここからは経営の話。

そもそも、まだ中学生の水織に銭湯とはいえ一つの店を経営しろという方が無理難題なのだ。

本当に銭湯の名前から決めるのか？ それとも料金？ いや、営業日や営業時間か？ 肝心の銭湯はどうする？ 石鹸などの備品は何処から？

考えることが多過ぎて水織の頭の中が思考で埋め尽くされていく。何からやればいい。

何処から考えればいい。

そんな中、穠子がひょいっと手を上げた。

「……何だ？」

「そもそもさ、銭湯ってどうやって使うのになって思ってたさ」

「ああ？ んなもん金払って風呂に入るんだろ」

「だからさ」

穠子がニコニコと何故か得意気な笑みを浮かべている。

何か妙案でもあるのだろうか。
水織が首を傾げていると、指を上げてこう言った。

「私たちにさ、最初から順序通り教えてよ。まず最初は何をして、次に何をやるのか」

「何って……そうか」

「ん〜？」

穰子の考えが読めた。

反対に静葉はさっぱりわからない様子で首を振り子みたいに左右に揺らしていた。

「そうだな。最初から考えりゃいいんだ。んじゃ実演しますかね」

「ま、待ってよ二人とも」

水織は事務室を出て、銭湯正面の入口に立つ。

「まず最初はこのカウンターで料金を払うんだ」

店によっては後払いという店もあるが、とりあえずここでは最初で。

「じゃあ、まずはお金だね」

いつの間にか穰子の手にはメモ帳が握られている。用意がいいじゃないか。

第一に、料金。

料金を一律にするのか、それとも年齢層で分けるのか。

ここはやはり大人と子供で分けるのがセオリーか。しかしあまり細かく分けてしまっても面倒なだけで。

「穰子、メモに大人と子供で料金を分けるってメモしておいて」

「うん。それじゃ、肝心の金額はどうするの？」

「ううん、そうだな……」

ちなみに、実際の銭湯での入浴料金は物価統制令という勅令の規定により、各都道府県の知事の決定で料金の上限が定められる。平均で考えると地方によって多少の差異はあるが、大人ならだいたい四百円程度、子供はその半額ぐらい。

さらにちなみに、上記の料金分けは幻想郷用にと大人と子供だけと簡略化してあるが、実際は『大人』（中学生以上）、『中人』（小学生）、『小人』（未就学乳幼児）と細かく三つに分けられる。

そういえば幻想郷のお金って、元いた世界と同じなのだろうか。

試しに穰子に聞いてみると、見覚えのあるようなないような銅銭を差し出してきた。

……何だっけコレ。

確か、和同開珎わどうかいちんだっけか。

それとよく似ているような、元いた世界じゃ滅多に見られないような穴の空いた古ぼけた銅銭だ。

価値は……古銭収集家というわけじゃないしよくわからない。

「ううん……イマイチ価値観がわからないから、そこは穰子に任せよ」

「うん、了解」

ふんふんと鼻歌交じりにメモをとっていく。

さて、基本料金が決まったところで次は何だろう。

「水織、銭湯に入る時気をつける事とかあるの？」

「気をつけること？」

脱衣所を抜けて出来上がったばかりの大浴場で穰子が水織に訊ねた。

銭湯で気をつけること……か。

「石鹸で滑って遊ばない。うつ伏せでロケットスケートやると色々悲劇……」

「何の話よ」

「昔そんなことをした巡査がいたって話」

「???」

冗談はさておき、銭湯では色々とマナーがあるのは事実だ。

穰子は恐らくそれを自分に確認してくれてるのだろう。

姉が少しマイペース過ぎるせいか、彼女はどうかやしっかり者らしい。

「そうだな……風呂のお湯がどんなに熱くても、水で温くしちゃうんだな」

「え？ 何で？」

「銭湯は共同の浴場だからな。個人の都合で勝手に水を足したりしちゃダメだ。熱いお湯が好きって人に迷惑だろ？」

「でも、それじゃ熱いお風呂苦手な人は入れないよ？」

「普通お風呂に入る時は最初に体を洗って体を慣らすもんだろ。だから多少熱くても我慢すること」

「ふえ……」

ほとんど銭湯を知らない子供向けの注意書きを、箇条書きで穰子が一通りメモしていく。

これを後で脱衣所辺りに張っておけば大丈夫だろう。

それから三人で水織の実演を交えながら細かな部分を確認すると、いつしか茜色の空模様となっていた。

やはり秋の夜は早い。

何時しか人里にも提灯の明かりがぼつりぼつりと灯り始めた。

「……じゃあ、営業時間は普段は夕方から深夜まで。たまには早朝営業もして、水曜日が休業日ってことでいいか」

「うん。うわあ、何だか緊張してきちゃった。これから忙しくなりそうだね」

「これも信仰のためだよお姉ちゃん。三人で協力して頑張らないとね」

「あ、水織君。この銭湯の名前は？」

おつと。ここまで考えて肝心な事を忘れるところだった。

しかしこの銭湯の名前に関しては既に一つの候補を考えてあった。

「そうそう。この銭湯の名前なんだけどさ」

「うんうん」

ニツと笑みを浮かべ水織は銭湯の名を二人に告げた。

「静葉と穰子は秋の神様だろ？ だからさ、シンプルに『秋の湯』ってどうよ」

ちょっと気を利かせた水織会心の命名。

姉妹二人の表情は言うまでもなく、こうして幻想郷に初の銭湯『秋の湯』は誕生したのであった。

第九話 名付けて『秋の湯』（後書き）

どうにか人里の中心で銭湯を開店した水織と秋姉妹。

現世の人間と、幻想の秋の神。

奇妙な形で繋がった三人の銭湯経営は、果たして上手くいくのだろうか？

静「私たちの物語はこれからだ」

穰「って、これじゃ打ち切りみたいじゃないの!？」

それと、幻想郷のお金の設定はわかりやすくするためのオリジナル設定です。

次回更新はやっぱり三日後くらい。

そして次回より第二章が始まります。

第十話 絵描きさんを探して

「なあ、お兄ちゃんや」

週に一度早朝営業をする日曜日。

浴場をデッキブラシで掃除をしていた水織は、湯船につかる老人にちよいちよいと手招きされて視線を向けた。

「ん？ どつたの爺ちゃん」

老人は真後ろの壁を指差して水織に言った。

「この壁、真っ白で味気ないのう。何か絵を描いたりせんのか？」

「あ……それは」

実は水織も秋の湯が出来た時からずっとこの壁が気になっていた。何も描かれていない、真っ白な壁。

本来の銭湯なら、ここにペンキ絵と呼ばれる銭湯の象徴ともいえる特殊な絵を描くのが普通なのだが依然として秋の湯の壁は未だに白いまま。

このままでは少し、いや、かなり寂しいものがある。

「ごめんな爺ちゃん。本当は大きな絵を描く予定だったんだけど、出来上がったばかりでまだ描いてないんだ」

「そうかそうか。ちいと残念じゃのう」

「うん……」

真白な壁を見上げ水織は眉を寄せた。やっぱり、真っ白なままじゃダメだ。

どうにかして、この秋の湯の象徴となる“ペンキ絵”を描かなくては。

掃除用具を抱えた水織は老人にごゆつくり、と一言残してから男湯を足早に出ていった。

・
・
・

「え？ 絵の上手い人を知らないかって？」

カウンターでお客さんに釣銭を渡していた穰子はうんと小さくうなつて、該当しそうな人物を思い描いたが、やがて首を振った。

「……私の知り合いには、そんな人いないかなあ」

「ん、そっか……」

「どうしたの急に。もしかして水織の趣味？ イモ判でよければ作ってあげよっか？」

「いや、いらねえ」

小さ過ぎてペンキ絵に使えるわけがないし、というか何故イモ判だ。凝った年賀状作るとき以外で耳にしたの初めてだぞ。

「あれ？ 何の話してるの？」

休憩を終えた静葉が事務所から顔を出す。

ちようどいいから二人にも事情を説明しようか。

「実はさ……」

・ ・ ・

「なるほど。それで絵の上手い人ってわけね」

事務所に場所を移して三人で小会議。

水織は早朝の老人のことと、それから元いた世界でのペンキ絵のことについて話をした。

静葉も穰子もうんうん頷きながら話を聞いてくれている。

穰子とはかく、静葉の方はちゃんと理解しているのか少し心配だった。

「でも、幻想郷で絵の上手い人って聞いたことないねえ」

「私も思い浮かばないな……」

「ちなみに二人とも絵は描けるか？」

「へのへのもへじなら上手いよ？」

「……それは落書きじゃないのか」

それぐらいならオレも描ける。

しかもただの絵ではなく、銭湯専用のペンキ絵となるとずいぶん勝手は違う。

仮に絵の上手い人を見つけたとしてもそう簡単に描けるような代物ではない。

「ほら、前に言ってた能力。絵が描けるって能力の人とかさ、いないのか？」

「いるんならとくに教えてるって」

「そうだよなあ……ううん、困ったな」

水織自身も流石にペンキ絵となると描けない。

ただ絵筆を走らせる絵画とは違ってかなり大がかりな作業になる。

もちろん人一人では描けないから、誰か他の人の助けも借りなくてはいけない。」

「お困りのようですね？」

と、いつの間に現れたのか射命丸文が事務所の戸にもたれながら立っていた。

「うお、あんたはいつぞやの新聞記者の」

「清く正しい射命丸です。覚えてくれたんですね」

ニコニコ笑顔の文はペンをくるくる回しながら手帳を取り出すと、ぱらぱらとページを捲りやがて止まる。

何が書いてあるのだろうと水織が覗きこんだら額を叩かれた。

「ダメですよ。この手帳は幻想郷のトップシークレットです。さて、お探しの絵描きさんですが、森に行ってみてはどうでしょうか？」

「森？」

「ああ、魔法の森だね」

穰子が水織のフォローをする。

文は場所を知らないという水織のために手帳に手製の地図を書きだしそれを干切ると水織に手渡した。

この里からそう遠くない位置にあるようだ。

「魔法の森の近くに香霖堂と呼ばれる道具屋さんがあります。その店主は外の世界のものも集めておりますし、話をすれば何か力を貸してくれるかもしれませんよ？」

「香霖堂……外の世界のものも集める道具屋か」

外の世界のもの、か。かなり興味がある。

それに、いざとなれば画材やペンキを買わなければならないのだから都合がいかもしれない。

……まあ、売っていればの話だが。

「決まりだね。香霖堂に行つてまずは道具を揃えろと」

「先に道具を集めるつても何だかなあ。タヌキの皮算用みたいな」

先に絵描きを見つける方が順当な気もするが、水織は魔法の森へと向かうことを決めた。

「それじゃ、明日にでも行つてみるか」

「おー」

「うん。そうだね」

「いや、静葉か穰子はここに残らないといけないぞ。店番がいなくなっちゃうから」

「明日は臨時休業つてことで」

「……仕方ないな」

いきなり臨時休業する銭湯というのはどうなのか。

結局何をしに来たのかわからない文を見送ると、水織は次の日に備えて早めに寝ることを決めてからボイラー室の方へ向かっていった。

・
・
・

そして迎えた次の日の月曜日。

本日の空は生憎の曇り空で、遠くには薄く黒ずんだ雲まで見える。

「こりゃ、一雨きそうだ」

「森の中なら多少は雨宿りできるから大丈夫でしょ。ほら、見えてきたよ」

人里から北東へ向かって歩き出してから十分程度だろうか。

視界の先にうっそうと広がる森林地帯が見えてきた。

入り口にいざ立つと、暗い。

森の木々がただでさえ少ない陽光を遮り、奥は一層の闇が広がっている。

顔のようにも見える樹木の表面が何とも不気味な雰囲気を醸し出している。ここで肝試しとかやったらすごく楽しそうだ。

「んじゃ、香霖堂とやらを探し……お、おい。どうしたんだよ穰子」

姉妹は水織の背中にくつついたまま一向に離れようとせず、がくがくと小刻みに震えていた。

穰子が青い顔して震えた声音で告げる。

「こ、こここ恐くないよ？ 全然、まったく、これっぽっちも！」

「んじゃ手を離せよ。動きにくいったらぎゃああッ！？ おま、ばッ、それ関節入ってるぞオイ！？」

「穰子ちゃん、オバケとかダメだもんねえ。寝る時いつも私にくっもくもく？」

片手で水織にしがみ付きながら、もう片方の手で静葉の口を塞ぐという何とも奇妙に器用な動きを見せると、穰子は涙ぐんだ顔で叫ぶようにしていった。

「い、いいから行って！ わ、私は水織の背中と守るからさ、水織

は365度全方位見張ってちょうだい！」

「全方位って、5度多いじゃねえか」

体にくっ付いたままの穢子を引きずるようにしながら歩きだす。

日の光があまり届かないせいとか、この森に入った途端一気に体感温度が下がったような気がした。

薄闇の中でどうにか見える視界では奇妙な色をしたキノコがうねうねと身をよじっているのが見えた。

何なんだこの森。

薄気味悪いつてレベルじゃない。

本当にこんな場所に道具屋を営んでいる人がいるというのだろうか。そしてそれはいつたいどんな人物なのだろう。

興味があるような、しかし出来たら知りたくないような複雑な心境だ。

ジメジメとぬかるんだ道を適に進んでいくと、やがて道の向こうが白み始めてきた。

光の向こうには開けた場所、それから小さな小屋が見えた。

「あれが……香霖堂って道具屋か？」

古びた外見に、所々剥がれ落ちている瓦屋根。

店先の看板はボロボロで、何か書いてあるだろうはずなのに全く読み取れない。

恐る恐るといった感じで水織が近づいて中を覗きこんでみると、店内は雑貨なのかガラクタなのか区別のつかないような物でごちゃごちゃとしていた。

「う、ごめんください……」

声が店内に響き意味もなく虚しくなる。

埃っぽい店内は見た目通り古びたカビと埃の匂いで包まれていた。

「……誰も、いないのか」

「だけど、いたような跡はあるよ。ほら」

静葉に指差され気がつく。

店の奥、店主の自室と思わしき部屋のちゃぶ台に、湯気のものぼる湯のみが見えた。

それはつまり中身を入れてまだ久しく時間が経っていないということ。

「ってことは、待ってればお店の人が来るのか」

「じゃあ、ちよつと待ってよっか」

「……穰子、いい加減離せ」

「も、もうくっ付いてないでしょ!」

そうしてしばらく店内でぼんやりと過ごす水織たち。

水織は店内のガラクタを適当に眺めたりして、静葉と穰子は、何処かの温泉旅館の紅葉饅頭のパンフレットに釘付けになっている。

まさか実家じゃないだろうな、と覗きこんだが見たこともないような旅館だった。

「おや、お客さんかな」

凜と澄んだ、落ち着きのある声が聞こえて振り向くと、そこには銀の髪で眼鏡の少年が何かを抱えたまま玄関で立っていた。

「よかったら、手伝ってくれるかな。一人で運ぶのは意外と苦だね」「り、了解っす」

そのまま少年の荷物を倉庫のような小部屋の奥へ運ぶと、少年は水織に微笑みながら礼を述べた。

とても誠実そうで優しくそんな少年だ。落ち着いた印象もあってか、少年は水織よりもいくらか年上に見えた。

「ありがとう。おかげで助かった」

「いえ、これぐらいどうってことないっす。えと……」

すると、少年は水織が言わんとする言葉をわかっているかのように水織の口元を手で制し、少しずれた眼鏡の位置を直した。

「自己紹介がまだだったね。僕はもりちかりんのすけ森近霖之助。ここで商いをさせてもらってる者だ」

「草津水織っす。あの、実はちょっと訊きたいことが」

「ああ、いいよ。とりあえず店に戻ろつか。神様を待たせちゃいけないしね」

霖之助と名乗った少年は水織の腋をぬけて店の方へと戻っていった。

「……あれ？ オレ、静葉たちのこと話したっけ？」

「水織君、こっちだよ」

「う、ういっす」

霖之助に呼ばれ、水織は小走りでその後を追いかけた。

第十話 絵描きさんを探して（後書き）

新章、突入。

そしてこっさり飛び出したバカテスネタ。

お気に入り登録件数40件突破、ありがとうございます。

今回、全体的にちょっと地味なお話だなあ……

二章のタイトルを更新したら、今日はパパッと寝ちゃいます。
最近片頭痛が酷くて酷くて……；

第十一話 秋の湯のペンキ絵

「なるほど。銭湯の象徴ともいえるペンキ絵を描く材料と、そしてペンキ絵の描き手を探してるわけだね」

事情を霖之助に話すと、彼は興味深そうに眼鏡の縁を少し持ち上げた。

よく見るインテリのポーズだ。

水織は眼鏡などかけないから無縁だが。

「それである、霖之助さんはペンキ絵を描ける人を知りませんか？」
「ペンキ絵か……ふむ」

瞳を閉じ、腕組みしながら思考するその姿が眼鏡と相まって様になっている。

やがて霖之助は口を開いた。

「残念ながら、僕にも思い当たる人物が浮かばない。絵描きを能力ちからとしてる人もいないんじゃないかな」

「そ、そうっすか……」

霖之助の言葉に、水織は落胆しがくんと肩を落とす。

これで秋の湯のペンキ絵計画がふりだしに戻ってしまった。

あの爺ちゃんが悲しむ姿が脳裏に浮かぶ。

せつかくの銭湯なのに、秋の湯の壁は何も描かれない真っ白な壁。それはまるで、ジャムの入っていないジャムパンをかじるような気持ちだ。

どうにか、ペンキ絵を描けないものだろうか。

と、不意に霖之助は一つうなずきこんなことを口にした。

「でも……そうだな。僕でなければ協力しようか」
「え？」

突然の霖之助の言葉に首を上げ水織は目を丸くする。

「といっても、下手の横好き程度の画力しか持ち合わせていないけど。それでもいいかな」

「霖之助さん……！」

「霖之助でいい。さんは要らないよ」

ガツシと霖之助の手を握り（ほとんど潰すような勢いで）、水織は何度も何度も上下に振りまわした。

「ありがとうございまっす！ これで、ペンキ絵が出来るッ！」
「そういえばさあ水織。ペンキ絵ってホントに必要なおあだあッ！？」

水織の鉄拳が穰子の脳天に直撃し、その愚鈍な言動を止める。
当然穰子は涙目で水織に訴える。

「な、何するんだ水織！？ 神様を殴るとか罰当たりだ！」
「罰当たりもくそもあるか！ 銭湯には必要不可欠なんだよ。本当は、もっと前にオレも描きたいと思ってただけだよ。にとりたちにまた手伝わせるのも悪いと思ったから、言うに言えなかったんだ」
「そ、そう……なんだ。あたた……」

他者にはなるべく迷惑をかけるべきではない。

それが女の子なら尚更、自分がお世話になった女の子なら絶対、だ。

だから水織としては自分の力で、あるいは自分の行動で解決したかったのだ。

水織の手がほけると、霖之助は早速小さな紙と筆を取り出し、ペン回しの要領で筆をクルクル弄びながら訊ねた。

「さて、ペンキ絵として描くなら何を描くのかな？」

「あ……えっと」

ここまでやって、すっかり忘れてた、とは言いつらい。

その場で脳みそをフル回転させ浮かび上がったイメージは、ペンキ絵としては最もベーシックな絵だった。

「……山つす、山。あっちの世界じゃ、ペンキ絵って言ったら大抵富士山って言う日本で一番大きな山を描くんです」

「なるほど。幻想郷で言うなら妖怪の山と言ったところか」

すると霖之助がフリーハンドで紙に筆を走らせていく。

緩やかな曲線で山の斜面を描き、背景には雲と太陽を上らせる。

驚くべきことに、彼は下書きも何もしないに見事な水墨画を描いてしまった。

今すぐ額に飾ったらいくらか値が付きそうで、それはとても下手の横好きとか言うレベルの代物ではなかった。

「す、すげえ！？ 霖之助、絵がめっちゃ上手い！」

「それほどでもないよ。これは落書きさ。実際はこんな小さな紙に書くんじゃないくて銭湯の壁に描くんだろう？ もっと大掛かりになる」

「そ、そっか……それもそうだな、うん」

「他にはどんな絵があるんだい？ もっとイメージを膨らませて、候補を描いていこうじゃないか」

「う、うつす！」

水織が絵のアイディアを出し、霖之助がそれを描いて、二人で思案する。

この一連の流れを、彼らはこのまま夕刻まで続けることとなった。

「私たち、暇だなあ……」

「これなら、水織だけで来た方がよかつたんじゃ」

「おい、静葉、穰子も」

姉妹が退屈で不貞腐れていると、水織が数枚の紙を握りながら手招きしていた。

何の用だろうか。

二人が首を傾げていると、水織は純粹無垢な子供のような笑いながら一枚の絵を取り出した。

「秋の湯のペンキ絵なんだからさ、当然秋の山の方がいいよな？」

「あ……」

それは、妖怪の山を背景に紅葉を散らす、秋満載の風情ある絵だった。

・
・
・

そして次の日。

この日、秋の湯は二日連続しての臨時休業となった。

里の人には迷惑をかけるかもしれないが今日だけは我慢してほしい。

「まさか昨日出たあの絵をいきなり描くとはね。驚いた」

「善はマツハだって言うからね」

「音速で善いコトをする、か。それはそれでご利益もマツハで来そうだ」

昨日分かったことだが、霖之助はかなり頭が切れるらしい。少なくとも水織よりは確実に。

水織としては、まるで兄のような存在で非常に頼もしい存在だった。

どうせなら霖之助のような兄が欲しかった。

……出来ればあの姉と交代してくれないだろうか。

「それにしても、これが君たちの秋の湯か。綺麗な店じゃないか」

「まだ出来て間もないですから」

「……そういえば、どうして秋を司る君たちがこの店を？」

「まあ、色々と事情が……」

「ふむ……まあ、余計な詮索はしないでおくさ。さ、作業を始めようか」

香霖堂から持ってきたペンキ絵用の特殊な塗料や大きな筆などの画材を抱えると浴場へと向かう。

今日はもちろん誰もいないしお湯も出していないため、大浴場はひんやりとした空気で満ちていた。

向かって正面の壁、湯船のすぐそばにある真っ白な壁。

霖之助は湯船の中に道具一式を置くと早速支度を始めた。

水織もジャンパーを脱いでアンダーウェア姿になる。

「う、ちつと寒い」

「むしろ着てた方がいいんじゃないのかい？ ペンキが肌について

しまうよ」

「いや、このジャンパーは気に入ってるんで」

丁寧にジャンパーを折り畳んで邪魔にならない場所に置く。

霖之助はペンキ絵専用のペンキを用意していてバケツにそれぞれの色ごと分けて流し込む。

戸を全開にして換気扇も回し空気の循環は確保。

そして、この秋の湯に描くペンキ絵のラフィラストのメモを取り出すと、二人して壁とイラストとを何度も見比べる。

「それで……どこから描けばいいのかな」

「えっと、確か」

頭の中の記憶を掘り起こし思い出す。

ペンキ絵は細かな下書きをあまり必要せず、フリーハンド且つ大雑把に描く。

例えば、最初は山の斜面のラインだけだとか、背景の雲の位置を適当に目印付けるとかその程度だ。

ふと、ペンキ絵は芸術ではなく男気だ、とか委泉が楽しそうに言っていたのを思い出した。

そういえば祖父は妙に銭湯というか、お風呂が好きだった。

別に水織は嫌いではないが、かといってそこまで情熱注ぐほどでもない。

そんな自分が今ペンキ絵を描こうとしていると思うと、何だか不思議な心境だった。

「ホント適当で大丈夫っす。最初に背景ちょこつと描いて、それから妖怪の山のライン描いて色をつけて」

「なるほど。じゃあこんな感じでいいか」

黒のペンキの入ったバケツに大きな筆を浸すと、霖之助は早速筆を走らせた。

背景には茜色の空と雲、それから紅葉を描く予定で、霖之助はそれらのだいたいの位置に薄く描いて、さらに山の斜面を描いていく。流れるような動作に水織は思わず見とれてしまっていたが、慌てて背景用のペンキを取り出しバケツに注ぐ。

水織も脚立を使って壁の上部に雲を描いていく。

その下で霖之助は妖怪の山の斜面を描き終わり、今は木々の部分を塗る色を調整していた。

「あ、ちょっと待ってください」

「ん？　どうかしたかな」

左右を飾る紅葉の葉を描こうとしていた霖之助を水織が止める。

「えっと、ペンキ絵は遠い方から順に塗り重ねていくのがベストだと思います。だから最初に山と背景を完成させて、それから紅葉なんかの飾りを」

「ん、わかった。じゃあ僕もそっちを手伝うよ」

二人で上から下へと少しずつ絵を描いていく。

背景は空色に、山の斜面を紅と、所々にイチヨウの黄を混ぜながら染める。

段々と出来上がっていくペンキ絵を見つめながら、ここまで全く仕事のない姉妹は呆けるようなため息をついていた。

「しかし、やることないわね……　ちょっと面白そうなのに、見るだけじゃつまないわよ」

「……あの絵、綺麗だね」

「そりゃ、私たちの秋の山を描いてるんだから綺麗に決まってるよ」

「だけど、今年はやっぱり色が薄いような気がして……」

「気にし過ぎだよ。信仰とかそんなことより、ホントはお姉ちゃんがネガティブ過ぎるからいけないんじゃないの？」

「そう……かなあ？」

実際、人里から見える妖怪の山は見事なまでに紅一色で、静葉の言うような色の薄さなど微塵も感じられない。

やっぱり、姉の考え過ぎなのではないのだろうか。

役目を終えた冬になれば二人して落ち込むことはあるが、今はまだ冬じゃない。

「あ、そうだ。お姉ちゃん、私ちよつとだけ出かけてくるね」

「え？ うん……？」

何故か穰子は浴場を出て何処かへと行ってしまった。

私も一緒に、と思ったがペンキ絵のことが気になって結局追い掛けはしなかった。

そうこうしているうちにペンキ絵はどんどん出来上がっていく。いつの間にか半分以上出来上がっているではないか。

「わあ……すごい……」

「あれ？ 穰子は？」

「さっきどっか行っちゃった」

「そうか。ここまでの感想でも聞こうかと思ったんだけどな」

「綺麗だよ。すつごく。本物より、綺麗」

静葉の目の前で広がる、紅に染まる妖怪の山は出来かけではあったが本当に綺麗だった。

本心での発言だったのだが、水織はぶんぶん首を振りながらそれを否定した。

「いやいや。本物には負けるさ。絵で見る妖怪の山と、目で見る妖怪の山は別物なんだし」

「負けず劣らず、ってとこなんじゃないかな。僕も初めて描いたけど、なかなか良い出来だと自負しているよ。後は、残った部分を塗ってそれで完成だ。男湯が終わったら女湯も描かないと」

そして二言三言適当に言葉を交わすと二人は再び作業に取り掛かってしまった。

仕方なく静葉は壁から距離を置いて二人の作業を見つめた。

「お姉ちゃん」

「穰子。それは……？」

いつの間に帰ってきたのか、穰子は浴場の戸口で息を切らせながら立っていた。

手には何やら良い匂いのする紙袋を握りしめていた。

多分、穰子の好物の焼き芋だと思う。

「水織も、あの人も頑張ってるのに何にもしないのって悪いと思っただからさ。差し入れにっ」

「穰子は偉いなあ。私なんて何も出来ないのに……」

「じゃあ、お姉ちゃんも手伝って。お茶も淹れてあげたいからさ」

「あ……うん。わかった」

そして水織たちが男湯の絵を描き終わったのを見計らって二人は焼き芋とお茶の入った湯のみを差し出した。

「さ、差し入れです！」

「お、ありがと静葉。はい、霖之助のも」

「ああ、ありがとう。ちょうど喉が渴いていたんだ」

出来上がったペンキ絵を見上げながら水織はお茶を一息で飲み切ってしまった。

そして受け取った紙袋から漂ってきた甘い香りに水織は苦笑を漏らした。

「……この焼き芋は穰子か。お前本当に芋好きだな」

「い、いいでしょ別に！ 文句があるなら返してちょうだい」

「しかもお前、何を勘違いしたのか三つしか入ってないぞ」

「ええ！？ そ、そんなハズは……」

紙袋から出てきたのは小振りの焼き芋が三つ。

穰子が勘違いして三つと頼んでしまったのか、それとも店主がうつかり間違えてしまったのか。

何にせよここにある焼き芋は三つだけだ。

「ご、ごめんなさい！ あの、えっと、また買ってくるから」

「ちよつと待った」

駆け出そうとした穰子の肩を掴むと、水織は自分の焼き芋を半分に割って差し出した。

「オレの半分やるからさ。それでいいだろ」

「でも、それじゃ」

「いいって。それに、たかが焼き芋一つで泣くな」

「だ、誰が泣いて……！」

声を荒げた瞬間、穰子の瞳から一粒だけ雫が零れ、水織はニッと笑い、穰子は顔を深紅に染めた。

「差し入れ、ありがとな」

「あ……」

それだけ言って水織は壁の方へ戻っていくと、早々に後片付けを始めた。

ポカンとその場に立ち尽くしていると、背後から静葉がニコニコしながら耳元で囁いた。

「どうしたの？ 顔、赤いよ？」

「そ、そんなコトないよ！？ ちょっと、お芋が熱かっただけで」

「いいなあ。私も半分こしてもらいたかったなあ」

「お、お姉ちゃんってば！」

ただでさえ赤くなっていた顔をさらに赤く染めると、穰子は逃げ出した姉を追いかけて浴場を飛び出して行った。

第十一話 秋の湯のペンキ絵（後書き）

最初、ペンキ絵は妹紅に描いてもらう予定でしたが、そもそもどうやって彼女と会うのだろうか、と考えたらボツになっちゃいました。妹紅だと豪快に描いてくれそうだったんだけどなあ……w

ひとまず、これで秋の湯のペンキ絵は完成ですかね。

さて、これからお話はどう転がっていくのか。

拙い文章で申し訳ないですけど、乞うご期待なのです。

むむむ……穰子のキャラがぶれだしてきた；

第十二話 秘湯の噂

それから二日ほどで営業を再開したその日。

水織は出来上がったばかりの秋の湯のペンキ絵を見上げながらデッキブラシの上で器用に頬杖をついていた呆けていた。

別に掃除をサボっているとかそういうわけではなくて、ただ何となく、元いた世界を思い出していたのだった。

「あれから結構経ったけど、姉貴や葉月さんはどうしてるんだろう……？」

この世界に来るといつか、半ば無理やり引きずり込まれたというか、そのせいで家族や親しい友人には何の連絡も告げていない。

向こうじゃ今頃大変な騒ぎになっているのではないだろうか。

突然、一人の人が消えたのだ。

水織の実家がどんなに田舎だとしても警察は動くだろうし、少なくとも新聞にだってなっているはずだ。

旅館を経営する姉貴の迷惑になっていなければいいが……

「こら水織！ サボるな！」

「サボってねえよ！ ちょっと考え事してたんだ」

頭の片隅で元の世界のことを考えながらデッキブラシで床をガシガシと乱暴に擦る。

今日から仕切り直して銭湯を始めるわけだから綺麗にしておかなければならない。

しかも今日は霖之助が秋の湯に遊びに来ることとなっている。尚更綺麗にしておかねば。

そして浴場の掃除を終えて石鹸の補充などの適当な雑務も済ませ

ると、水織は自分の担当しているボイラー室へと向かった。

銭湯のお湯を管理する大事な場所。

利用してくれるお客さんの好みもあるだろうが、ひとまず温度は熱めの42度。

来てくれる子供も最初は熱いだの何だの文句を言うが、結局最後には牛乳片手に笑顔で帰っていく。

その笑顔を見ると、ちょっと嬉しいというか、楽しいというか。

委泉も、こんな気持ちを経験していたのだろうか。

「さて、と」

ボイラーの調整以外でこの部屋に用はないため外に出て秋の湯正面に立つ。

妖怪の山に沈みかけた夕日が黄昏色に染まっている。

もう間もなくすればお客さんが秋の湯に足を運ぶころだ。

「水織君、夕御飯の支度出来たよ」

「おう、わかった」

夕食を済ませたら早速営業再開だ。

ほんの少し気合いを入れ直すと、水織は自宅の方へと向かった。

・
・
・

「秋の湯に、ようこそ」

「いらっしやいませ！」

秋姉妹が笑顔でお客さんをお出迎え。

そういえば幻想郷の人たちにとって、秋の神様に微笑みかけられながら暖簾のれんをくぐるというのはやはり神聖な気持ちになるのだろうか。

でも、普通に接する人もいればちゃんとお辞儀をしたり、中には銭湯の料金とは別に賽銭を置いたりする人もいる。

しかし、これって銭湯としてはどうなのだろう。

神様商法ってちょっと卑怯なんじゃないだろうか。

「やあ、水織」

「あ、霖之助。こんばんわ……ん？」

すると、霖之助の後ろから見覚えのある赤いリボンの少女と、見覚えのない金の髪の少女が現れた。

「リア充爆発しろ」

「な、何でそんな恐い顔してるんだ水織……？」

「おーおー、ここが銭湯ってヤツか。へえ……」

見覚えのない方、金の髪の少女は不思議な格好をしていた。

御伽噺の魔法使いがかぶるような三角帽子。

服は黒地に白いレースがあしらわれたドレスのような、ローブのような出で立ち。

一見すると、典型的な魔女のような姿だった。

「いっつもシャワーばっかだと風呂も恋しくなるからよ、銭湯ってのはありがたいぜ」

「魔理沙、ちゃんと金は払いなさいよ」

「銭湯ってのは読んで字の如く金を払うもんなんだろ？ それぐらいは図書館で予習済みだぜ。お前こそちゃんと払うんだろっな？」

「水織、私はツケで」

「銭湯でツケは利かねえよ!？」

「でも紫はほぼツケだと言っていたのだけれど」

「それはそれ。これはこれ」

静葉が水織の言葉に反応して台帳を掲げてきた。

「えゝ？ 水織君、紫さんの料金ってツケだったの？」

「色々お世話になってるし当たり前」

「あ、水織!」

「？」

「そういえば、私も前に一度アンタを助けたわよね」

「し、しまった……」

時既に遅し。

霊夢は我が物顔でカウンターを越えるとずんずん脱衣所に入って行ってしまった。

もちろん料金など微塵も出さない。霖之助の苦笑が横で聞こえる。

「ま、まあ、彼女の分は僕が払うから。気を悪くしないで」

「あ、ずるいぞ香霖。それならアタシの分も払っておいてくれよな。じゃ」

「おい！ 魔理沙の分まで払うとは一言も」

脱衣所の戸がピシャリと閉められその声は届かず。

霖之助の苦笑いと、水織の鋭く突き刺さるような視線だけがこの場に残る。

「う、誤解してるようだけど、彼女たちとは何の関係もないからね？ ただの友人だ」

「そういうことにしておいてやる」

「手厳しいなあ……ハハ」

三人分の料金を払って脱衣所に向かう彼の背中、心無し猫背のように見えた。

……しかし、まさかこの世界にもリア充がいるとは思わなんだ。

「あ、売り物の牛乳補充しとかないとな」

コーヒー牛乳、フルーツ牛乳は鉄板だ。

風呂上がりのこれのためだけに秋の湯を利用してくれるという人もいるくらいだし補充は欠かせない。

個人的にはイチゴ牛乳が好みなのだが何故か銭湯では見かけない。何故だろうか。

「だ、ダメですって！ まだ痛みが引いてないのに歩いちゃ……！」
「……何だ？ 女の子の声？」

倉庫から牛乳の入ったケースを持ってきてカウンターに戻った時、甲高い声と口論するのが聞こえてきてふと手を止める。

声は秋の湯の玄関から聞こえてきて、水織が早足で向かうところには見覚えのある老人と少女の姿があった。

「あ。爺ちゃん」

「おお、兄ちゃんか。こんばんは」

水織の呼びかけに、その老人はニカツと歯並びの悪い笑顔で振り返ってみせた。

しかし、何故か後ろに立っている少女はご立腹の様子で、老人の腕を握ったまま放すことはなかった。

「まだ動いちゃダメですって！ 家で安静にしてないと危ないですよ！」

「たかがぎっくり腰程度で大袈裟なんじゃ。わしゃ別にこのぐらい何でも……はうツ！」

「じ、爺ちゃん!?」

痛みのせいか、老人は苦悶の表情を浮かべるとその場でぐらりと揺れ崩れてしまった。

少女がその体をどうにか受け止め支え、水織も肩を貸した。

「すみません。ご迷惑をかけて」

「いいよ。気にすん……?」

改めて少女の姿を見つめ思わず言葉に詰まる。

幻想郷の住人のは、一部例外を覗いてほとんど和服や着物のような古めかしい姿をしているはずなのに、彼女の姿はどう見ても学校の制服のようだった。

セーラー服じゃなくて、ブレザータイプの。

そういえば水織も幼稚園の時に一度着たような覚えがある。

いや。特筆すべきは衣服だけではない。

彼女の頭には何故か、網タイツ姿で、胸ぼーんの腰きゅッなお姉さんが付ければバッチシ似合いそうなウサギの耳がピコピコ揺れているのだ。

ブレザー姿にウサ耳とはどういうセンスだ。

この老人に付き添っているとはつまり……

「あ、アンタこの爺ちゃんの孫娘か？」

「え、ええ!? 違いますよ。私は鈴仙と申します。今は、お師匠様のお仕事の手伝いでこの方のお薬を届けに来たんです」

「薬……お医者さんってことか」

「えっと、まだ見習いのようなものですけど」

ブレザーでウサミミで看護婦見習い？

どっかの大きなお友達向けな属性だなオイ。

「この人、腰を痛めているというのに銭湯に行くんだと聞かなくて」
「湯治というものを知らんのか！ 腰も温かくしてりゃ治るわい、
ツツツ……」

「だから、無理しちゃダメだって……」

痛みを伴い尚も立ち上がろうとする老人を鈴仙が制する。

言動は元気だがその額にはかなりの汗が滲んでいる。相当な無理
をしているのは火を見るよりも明らかだ。

「あの、どうしてそんなに銭湯にこだわるんですか？ 前はそんな
ことなかったのに」

「もちろん、出来上がったばかりのペンキ絵を拝みに行くためじゃ
よ」

「爺ちゃん……」

水織の心がブルツと震える。

早朝に会ったあの時から、この老人は秋の湯のペンキ絵をそこま
で楽しみにしていてくれたのだろうか。

でも、何故だ？

幻想郷に銭湯の文化はないはずで、故に素人が見てここまで感動
されるほどのものだろうか。

……いや、違う。

水織は心の中で首を振った。

そんな細かな理屈とかはどうでもいい。

今は、この老人のために出来ることをしてやればいいのだ。

「鈴仙、ちょっといいか？」

「はい？」

「オレがこのまま爺ちゃんを担いで行くから、今日だけ勘弁してもらえないか？」

「いや、でも症状が悪化したらお師匠様に怒られちゃうし……」

「医者の見習いだって言ってたっけな。一つだけ教えてやる。世の中にはな、湯治とうじっていう治療方法があるのさ」

「湯治……？」

鈴仙にとっては知らない言葉だろうし聞き慣れない言葉だろう。

首を傾げるのも無理はない。

と言っても、水織自身もそこまで詳しく知っているわけではないが。

「銭湯とかで体を温めるとな、筋肉痛とか皮膚病とかに効果があるのさ。昔っから伝わってる伝統的な健康法ってヤツだ」

本当は、半分嘘で半分事実なのだがこの場を誤魔化すにはちょうどいい。

少なくとも、目の前の鈴仙の瞳がキラキラと輝いているから効果はあったみたいだし。

……？ こいつ、本当のウサギみたいに紅い目してる。

「湯治……ですか。今度、お師匠様にも質問してみないと」

「今日だけ勘弁してくれ、な？」

鈴仙は洪々と言った感じで小さく頷くと老人を水織に任せ、夜の人里を去っていった。

しかし、こんな夜に女の子一人で大丈夫だろうか。

水織の時同様、妖怪に襲われなきやいいが……っと、鈴仙も気になるが今はこの老人が最優先だ。

「でも、銭湯のお湯じゃあんまし効果ないんだよなあ。結局はただのお湯だし」

「そうじゃのう。せめて、噂に聞く鬼の秘湯ならば、効果はあるかもしれない」

「鬼の秘湯……？」

「少し前に、新聞で見た噂なんじゃがのう」

少し前、この人里から遠く北東で間欠泉が吹き出すという事件があったらしい。

その一連の騒動の中、地底世界のある場所で偶然小さな秘湯が出来上がったという。

しかし、そこはどうも鬼の住処となっているらしく、現状ではほぼ鬼たちの占領状態なのだから。

いったいどんな物騒な記事だ、と言いかけてあの新聞記者を思い出した。

そういえば、静葉たちが彼女を幻想郷最速の新聞記者だと言っていた。

つまり、逃げるのも容易だったということだろうか。

実はとんでもない新聞記者なんじゃないか、アイツ。

「そんな秘湯にでも入れれば、こんなぎっくり腰なんぞあつという間に治るんじゃないかなあ」

「そうだなあ……」

老人の手伝いをしながら、水織は少し思考を巡らせていた。

この秘湯とやら、上手く活用できないだろうか。

例えば、そのお湯を……いや、ダメだ。

「いくらなんでも、パイプ使うとしても距離が遠すぎる。未来から来たネコ型ロボットじゃないんだし、空間と空間繋げるなんてこと出来な……ん？」

水織はあることを思い出す。

この秋の湯を、たった一晩で妖怪の山から人里まで移動させた彼女を。

もしかしたら、彼女に協力してもらえれば何とかなるのかもしれない。

「……明日、ダメ元で聞いてみようか」

老人の歓声が聞こえる脱衣所の中、水織は神出鬼没な八雲紫とコンタクトを取る方法を考えていた。

第十二話 秘湯の噂（後書き）

静「どうもこんばんは。今日は夜斗さんの代わりに、私たちがあ
とがきを担当させていただきます」

穰「え？ アイツは何処行つたのよ？」

静「んつとねえ、なんか小奇麗なスーツ着て『オレ、千早をトップ
アイドルにしてくる（キリッ）』とか言つて出かけちゃった」

穰「……千早つて誰よ？」

静「さあ……？」

穰「せっかく昨日誕生日だつて聞いたから、スイートポテト作つて
持つてきてやったのに」

静「残念だねえ。さて、次の更新は10月31日更新予定です」

穰「うん。お楽しみに」

静（穰子、タグには気づいてないみたい……くすくす）

第十三話 繋げ、スキマパイプライン

「おはよう水織君。さっそくで悪いけど、朝一番のお風呂を頂いたわ」

早朝営業の日曜日。

今の今まで水織が何とか会えないかと画策していたのに、当の八雲紫は水織のそんな努力をあざ笑うかのような形であっさりと秋の湯に現れた。

朝風呂を浴びてさっぱりとした顔で、白く滑らかな肌が輝きを増してつやつや輝いている。

「今日も素敵ですね紫さん」

「ふふふ。褒めたって何もあげないわよ？」

店の冷蔵庫を勝手に開けて牛乳を飲む。

腰を片手に一気飲みする姿が眩しい。美人は結局、何をしても美人なのである。

「……あのー、お金は」

「ここに秋の湯を移設させたのは誰の」

「あーあーわかりました。ツケですねえー」

半ば投げやりに呟き穢子が台帳に赤線を引く。

どうやら紫のツケは全部しつかりとメモをしているらしい。

……そういえば、どっかの高校生もパシリにされた時のツケをメモしてたっけ。

同じように返す時は恐ろしいのだろうか。

「それで、私に何かご用？」

「ああ、はい。実はちよつと訊きたいことが」

水織は老人から聞いた地底にあるという鬼の秘湯のことを話し、それからそのお湯をどうにか紫の力で引けないものかと訊ねた。

一応、引く、という言い方でどうやら通じたらしく、紫はふんふんと頷きながらほんの少しずつ口の端がつり上がっていった。

「なるほど……つまりこれを利用すれば、私はただで温泉に入り放題、と……」

「いや、アンタなら勝手に地底世界にでも下りりゃ入れるでしょうよ」

「えゝ、やだあ？ 地底の世界とかこわゝい」

静葉、ティッシュ。

「……ご、ごほん！ それで、あの、出来るんですか？」

「そうねえ。ただ空間を繋げるだけだし他愛もないでしょ」

「ありがとうございます！」

「あら、まだ手伝うだなんて言ってないわよ？」

「うぐっ……」

期待させて、あつさり落とされた。

それはまるで紫の手の上で転がされてるような気持ちだったが、あの老人のため。

ここで簡単に引き下がるわけにはいかない。

「え、えつと。毎日牛乳をサービスで付けます！」

「ううん……」

首を縦に振らない。

というか、これは毎日やられてるから意味がないな。

「じゃあ、オレが毎日お風呂上がりの紫さんをマッサーうぼがぁッ！？」

「変態水織いッ！」

「そうねえ……でも、マッサージチェアとかは欲しいわねえ。あの河童にでも依頼しましょうか」

穰子にバックドロップ喰らってる間に話が違う方向に反れた。

……それにしても、どうにか紫の首を縦に振らせるような良いアイデアはないものだろうか。

「あ、そうだ」

天地がひっくり返った状態の水織が思案しているとポンと紫が手を叩いた。

「温泉タマゴ。私あれが食べたいわあ」

「温泉……タマゴ？」

「ああ！ それなら私も食べてみたいかも」

「ええ……？ 温泉タマゴなんか食べたいの？」

目を輝かせる紫と穰子を交互に見ながら水織は姿勢を直して強打した首をさする。

死ぬかと思ったが、一応折れてなかった。うん。

「そうよ。温泉と言ったら温泉タマゴでしょ」

「私も、一度でいいから食べてみたいと思ってたんだあ。水織、温泉行けば作れるの？」

「一応作れるけど……そんないもんじゃ」

ドン！ とデカイ音がしたかと思うと、いつの間に用意したのか、カゴいっぱいのお卵と何故か雌鶏一羽。

卵はともかく、雌鶏は必要ないだろうと思うのだが。

「じゃあ、水織君と貴女たちで行ってらっしゃいな。地底の大穴の場所は知ってるでしょう？」

「いや、でも店はどうするんだよ」

「臨時休業だね」

「……開店してから臨時休業多いなこの銭湯」

迷惑ではなくお湯をかけるのが銭湯なのだが。

何だかお客様に申し訳ないな。

すると、紫が水織の方を見つめながら小さく唸っていた。

「あれ？　どうかしたんですか？」

「いやね、流石に何の装備も無しに地底世界に行くのは危険だと思っただから」

「お、オレのこと心配してくれるんですかッ!？」

「ううん。何か武器かなにかを持たせないと思うてね」

「……武器？」

そして思い出したのだが、水織たちが今向かおうとしている場所は鬼の住処となっている地底世界。

確かにそんな場所に丸腰で行ったら命の保証はない。

……というか、今頃になってそんな危険な場所に向かうと思った体が震えだした。

一歩間違えたら死んでしまう。

少なくともこの世界には本物の妖怪がいて、神様がいて精霊がい

る。

そんな世界だから、この世界の鬼も、恐らく水織の頭の中にある通りの筋骨隆々な化け物であるはず。

「あの、そんな危険な場所に静葉や穰子、ましてやオレなんか行つて大丈夫なんですか？ 普通にオレ死んじやうんじや」

「そうならないために武器を用意するの」

そこはどちらかと言えば防具を用意するのでは？

まさか攻撃は最大の防御とか言っくんじやないだろうな。

それとも紫は、RPGで言うところの、防具よりも武器に金をかけるタイプなのだろうか。

水織の不安など露知らず、紫は適当に用意すると言って右手を薙ぐと、また何処かへと姿を消してしまった。

静葉も穰子も、別段恐怖を感じているようには見えない。むしろ嬉々とした表情で談笑している。

この先、大丈夫なのだろうか。

「ああゝあ。どっかに緑色の自分が一つ増えるキノコ落ちてないかなあ……」

出来れば本当に欲しい。

今ほどあの配管工兄弟が羨ましいと思ったことはない。

・
・
・

そして迎えた次の日月曜日。

臨時休業の立て看板を置いた秋の湯は何となく寂しそうな顔をし

ているように見えるのは、気のせいなのか、それとも水織の心情なのか。

水織は紫に家で待っていると言われ待っているのだが未だに姿を見せない。

姉妹の方はもう少しすれば来るだろう。

欠伸をしながら玄関の前で待っているとトントン、と肩を叩かれ
回れ右。

「お待たせ」

「うお、紫さんか。おはようございます」

今日も変わりなく美しい。

朝日を反射する金の髪はライ麦畑の穂のようにキラキラと輝いていた。

「それで……そうそう。貴方の武器持ってきたわよ」

「あ、ありがとうございます……す………？」

ほい、紫に手渡されたものは、元いた世界でも見覚えのあるものだった。

木製の棒にグリップ、先端は西洋の剣のような先端をしていてスプーンのように僅かな窪みがある。

それは、それは地面を掘る時にあれば間違いなく役に立つこと間違いないのアレ。

何処からどう見ても、アレ。

「……………これ、スコップですよね」

「そうよ。スコップ」

冷たい風が一陣雑いで沈黙が流れる。

早朝だというのに、水織の思考回路はオーバーヒート寸前まで加速する。

どうしてスコップなんだ。これって武器じゃないし、というかただの道具、道路工事のあれだよ。これが武器っていったいどんな世界だ。緑色の勇者のように魔法弾跳ね返せてか。地面掘ってお金稼げってか。ひっくり返してみても斜め四十五度から見下ろしても至って普通の剣スコップだよコレ。え？ え？ いったい紫さんは何を考えているんだ？ ああ！ わかった。このスコップでボケろってことだな。つまり紫さんは、早朝からオレのウィットに富んだジョークを期待してるんだな。そうと決まれば何か一芸を披露せざるを得ない。そしてあわよくば紫さんが水織君キヤーステキー！とか言ってくれるんじゃないかと。あれ、ハッピーエンドなんじゃないかコレ。

「……結婚してください」

「いったい朝から貴方は何を考えてるのかしら？」

それはこっちの台詞だよ！ とか死んでも言えない。死んだら言えないけど、絶対言えない。

一応水織は紫に異論を申し出た。

「あの、普通武器って言ったらもっところ……殺傷能力のあるものをですな」

「スコップで刺されたら痛いわよ？」

「いやそうですけど……もっところ、剣とか槍とか、そういうのを武器って言っんじゃないんですか？」

「何の技術も持たない人間が、いきなりそんなものの振り回したらそれこそ危険よ」

「そりゃあ、そうですけど……」

紫の言うことももつともなのだが、だからって何でスコップなんだ。

これなら洗濯物を干す物干し竿の方がマシな気がする。

「あ、水織く〜ん」

そうこうしているうちに秋姉妹も駆けつけて全員がそろった。

「何でスコップなんて持ってるのさ」

「いや、紫さんに武器だつて渡された」

「はあ……？」

「あそうそう。水織君にこれを渡しておくわ」

紫は胸元をこそそと探ると小さな二枚の札を取り出した。

あ、霊夢から貰った術符とか言うヤツだ。

そんなことより胸元からそんなもの出さないでください。

「静葉、ティツシュ」

「はい」

二枚の札は何やら異なる紋様が描かれており、紫色の縁に一方は赤い字で、もう一方には青い字で書かれていた。

紫がそれぞれの術符を指差しながら解説。

「これは私の能力に似せた術符で、この二枚で空間を繋げるの。赤いほうが入り口で、青い方は出口よ」

「へえ……何か、天狗の抜け穴思い出しちゃったな」

「何それ？」

「いや、何でもない」

あつちはテープなんだけど。

受け取った術符はジャンパーの内ポケットにしまい込み、水織は温泉タマゴ用のタマゴが入ったリュックサックを背負う。

「じゃあ、気をつけて行つてらっしゃい。良い報せを期待してるわ」

「はい。必ず紫さんの元まで帰ってきます」

「温泉タマゴ、忘れないで頂戴よ。私の友達も楽しみにしてるんだから」

「んじゃ、れつつごー」

紫さんの友達？

いったいどんな人物なのだろうか。

多分おそらくきつと紫さんと同じくらいの美人なのだろうけど、何だか想像つかない。

「あの、水織君」

「ん？ 何だ……あれ？」

振り返ると、いない。

静葉と穰子の姿が影も形もなくなっていた。

くすくすと小さな笑い声が頭の上から聞こえてきて見上げると、二人はふわりふわりと飛んでいた。

「歩いてちゃ日が暮れちゃうよ。ほら、掴まって」

「お前らはいいいよなあ……オレも空を飛んでみたいや」

「ほら、私とお姉ちゃんの手に掴まりなっ」

「いや、待ってくれ。もう少し」

「え？ 何で？」

「もう少しでパンツ見えぶふッ！」

穢子に踏み潰された。

大きな足跡とあざが出来てパンダ顔になった水織は、二人の手を借りて空へ飛び上がると地底へと続く大穴を目指した。

「あれが、地底の大穴……」

人里からまっすぐ北東。

綺麗に円形にぽっかりと口を開く大空洞は、まるでブラックホールのように何もかもを吸いこんでしまいそうな闇が広がっていた。

第十三話 繋げ、スキマパイプライン（後書き）

すげえタイトル、そして温泉タマゴのためだけに手助けしてくれる紫さんって……

夜「そして、私は帰ってきたぁ！（ＣＶ大塚明夫風味）」

静「お帰り〜」

穰「で、今度は私たちをトップアイドルにしてくれるの？」

夜「ティンと来ないから無し」

穰「……解せぬ」

静「ほら、あそこで紫さんがプロデュースしてほしそうな目でこっちを見てるよ」

夜「え、アイドルって少女しか（ピチューン

……し、しかし。もし東方キャラでアイマスやるんなら１、早苗さん２、栞３、幽香だな」

穰「歌って踊れる幽香さんを想像できないです」

夜「奇遇だな。俺もだ」

お気に入り登録、評価ポイントありがとうございます。

ホントはあてな主役のハロウィン短編書くつもりだったんですが、手違いで消しちゃった（死にてえ……

次回更新は１１月３日。

いよいよ水織君の能力開花か？

そして地底で待ち受けるものとはいいたい……！？

感想やご意見、作品作者に対する質問などなど、サイト登録の有無関係無しに書けるよう設定してありますので。何かあればいつでも何でも気軽に書き込みくださいな。

それでは、待て次回。

第十四話 姐御肌な鬼娘

「ゆっくり下りるからさ、ちゃんと掴まってよ」

麗らかな日の光すらも吸い込み、漆黒の闇へと帰してしまう大空洞。

二人の手を強く握りしめながら三人でゆっくりと降下し、水織はその闇の向こう側の世界に期待と不安の両方がない交ぜになったような気持ちで臨んだ。

大空洞の闇が文字通り地の底から這い上がるようにして広がり、不意に上空を見上げると静葉と穰子の後ろには針で空けた穴のようなほんの小さな光源だけが見て取れた。

いつの間にかこんなに下りたのだろう。そして、いつになったら地面に着くのだろう。

自分の足が地に着かないこの感触は初めてで落ち着かない。

そうした不安に駆られていると、やがてトンと水織の靴が地面に触れ同時に姉妹の手が離れた。

「なあ、明かり……あれ？ 明るいぞ……？」

確かに自分たちは闇の中を降下していたはず。

それなのに自分の手足も見えれば影だつて伸びている。

視線を上げると、何やら白い光を放つ物体が洞窟の天井をまるで夜空を埋め尽くす満天の星空のように輝いていた。

「そつえばさ、鬼の秘湯って何処にあるんだろうな」

「え？ 水織知らないの？」

「いや知らねえよ。オレはあの爺ちゃんからそついう噂があるって聞いただけだし」

「……そういうの、もつと早く言つて頂戴よ。はあ」

穰子が心底呆れた様子でため息を吐く。

しかし、いつまでもここに留まっていてもしょうがないので先を往くことにした。

妙に綺麗な洞窟の道を歩きながら水織は二人に訊ねた。

「なあ、ここってどういう場所なんだ？ 鬼の住処とは聞いていたんだけど……」

鬼どころか、虫の一匹すら見当たらない。

時折前方から生ぬるい風が拭いてくるだけで、特に危険な場所には到底思えなかった。

こんな洞窟があれば、家の近くにあれば秘密基地にして遊びたいような気もする。キャンプとかもいいかもしれない。

「ここは地霊が住まう地底の世界よ。大昔は地獄として機能していたの。前に一度、間欠泉と一緒に地霊が沸き起こる異変があったのだけれど、霊夢や魔理沙がこれを解決したの」

「じ、地獄……？ っていうか、異変って？」

「んつと、この世界で言う事件って思ってもらえばいいのかな？」

「そう……か。あの霊夢って凄いヤツなんだな」

あと魔理沙ってヤツも。

しかし二人ともそうは見えないんだけどなあ。

そのまま何度か質問を繰り返しながら道を歩いていくと、やがて目の前に人工的な道が現れ雰囲気が一変した。

石を敷き詰めて出来た長い道を抜けると、やがて目の前に巨大な木造の橋が見えてきた。

「立派な橋だなあ。元いた世界じゃもうこんなの見れないと思……」

橋の中央に人影を見つけ足を止める水織。

人影はどうやら少女らしく、地底の明かりに輝く金の髪が見て取れた。

コツ、コツ、と橋を鳴らしながらゆっくりとこちらに近づいてくる。

「この地に何の用かしら。人間と、それから……？」

水織と、それから横の姉妹を見つめ訝しげな表情をする少女。

色の薄いやや地味な服装で、何故か彼女の耳は尖っていた。

……たぶん、俗に言うエルフ耳ってヤツだ。実物を見るのは初めてだった。

若干キツめな視線に威圧するような声音、こちらを警戒しているのは明らかだった。

「えっと、こんにちは。それとも、こっちじゃこんばんはなのかな？」

「呑気な挨拶はいいのだけど……貴方達のような者が何の用かしら。少なくとも、ここは貴方達が来るような場所ではないわ」

「え、えっと……水織君、お願い」

「またかい。……えっと、実はその」

目の前の少女にこちらの事情を全て話してもよいものか少し悩んだが、ここの地理に詳しくないこちらとしては何か手掛かりが欲しい。

水織は外から来たということ、それから自分たちが経営している銭湯のこと、ここに来た目的、一通りのことは全て話しそして本題

へ。

「それでさ、鬼の秘湯っていうのを探してるんだ。何か知らないか？」

「鬼の……？ 私は心当たりがないからわからないわ」

「そっか……」

でも、と少女が付け加え答える。

「知り合いに鬼ならいるから、彼女に聞いてみたらどうかしら」
「ホントか？ 助かるぜ……？ ん？ かの……じょ？」

聞き間違いだろうか。

目の前の少女は、鬼を、彼女と言っていたような。

鬼にも性別があるのか？

水織が知っている御伽噺の中で、女の鬼というものは見たことも聞いたこともないのだが。

トラ柄パンツに晒^{sun}でも巻いているのだろうか。

「この時間ならいつもの酒場で飲んでるはずだから……いいわ。少しだけ手伝ってあげる。別に私たちの力目当てってわけでもないみたいだし」

そう言う少女はついてきてとだけ言い、水織たちに背を向けて歩きだした。

「……なあ、ここは何なんだ？ 地底世界、なんだよな？」

「そうよ。そしてここは地底の都。旧都と呼ばれることが多いわ」

水織の質問に、淡々と答える少女。

橋を越え旧都の内部に入る。都と言っただけあつて活気づいた声があちらこちらから聞こえてくる。

こっそり、視線を動かしてみる。

活気に溢れていいのだが、その全員が人外で居心地はお世辞にもいいとはいえなかった。

人生に絶望したのか路地に座り込む妖怪。今日の獲物でも見つけたかのように爛々と瞳を輝かせる図体の大きい人のような形をした者。

スラム、とまではいかないがパツと見あまり治安はよろしくなさそうだ。

「……幻想郷ってのはよくわからねえな」

地の底にまで蔓延る妖怪。

だが、どうして彼らは外に出ないのだろうか。

ここにいるのは頑強な妖怪たちと、例外はあるがどう見ても凶暴そうだ。

睨みこそしてくるが、皆一様にこちらに襲いかかってくる様子はない。

夜ではないからか？

でも地底に夜も何もあるのだろうか。……頭が混乱してきそうだ。思考を止めて前に向き直ると、赤い提灯を吊るした一軒家が見えてきた。と同時に香ばしい匂いまで漂ってくる。

何を焼いているのかはわからないが美味しそうな匂いだ。

「勇儀、いるかしら？」

ガラガラと店の引き戸を開けた瞬間、強烈なアルコールの香りがむわっと広がり思わず水織は顔をしかめる。

未成年にはキツ過ぎるほど強烈なアルコール臭は飲んでもいない

のに体がふらつきそうだ。

「お、パルスイじゃないか。橋の守護はどうしたんだよ？」

「今少しだけ休んでいるわ。外の世界からの珍客のせいで、ね」

「ああ？」

少女と誰かの話し声がこちらにまで聞こえてくる。

彼女、パルスイと言っらしい。

そういえば名乗ってもいないし名前を聞いてもいなかったな。

店の前で棒立ちしていると、暖簾の向こうから腕だけにゆつと出てきて指がちよいちよいと動いた。

こちらに來い、と言っことらしい。

「……でもよ、未成年がそっいう店に入るってのは」

「いいからホラ！ さっさと入る」

「お、押すなよ穢子」

当たり前ですが、お酒は二十歳から。

もちろんお店に行くのもダメです。ゼツタイ。

くたびれた暖簾を押し退けて店に入るとアルコールの匂いが数段強くなった。

心無し視界がぐにやりと揺れる。

マズイ。飲んでもいないのに二日酔いになりそうだ。

「う……く、ッ」

あまりに匂いが強過ぎるせいか、それとも水織に耐性がないのか、或いは両方なのか。

水織の視界が、まるで天地が逆転するかのようになりにやりと歪み

立っているのですえ覚束なくなり——トン、と誰かの腕が水織を抱きとめた。

「お、おいおい。大丈夫かお前？ 待つてな。今冷たい水でも用意してやつから」

霞む視界の向こうで声だけが聞こえる。

この声は……穰子か、それとも静葉？ さっきの少女？ まるで思考が定まらない。

次いでタタタ、と足早に駆け寄る足音。そして大きく振りかぶる謎の人影。

……おかしい。

さっきの声は、冷たい水を持ってきてくれると言って——バシャーンッ！

「うおわあああ！？ つ、冷たあああ！？」

突然顔面に冷水を叩きつけられ、水織の体が否が応にも飛び上がる。

二日酔い（？）は確実に醒めたがおかげで全身がびしょ濡れ。

「だ、誰だ！ 冷たい水を寄越すんじゃないなくてぶっつけたアホは！？」

冷水で冷えた体を烈火の如く燃え上がらせると、視線をあちこちに動かしてこんなバカげたことを仕出かした犯人を探す。

店には苦笑するパルスィと、おろおろと狼狽える静葉と穰子、それから……

「せっかく助けてやったつてのに、開口一番アホ呼ばわりかい？

最近の人間ってのは礼儀つてのを知らないみたいだねえ」

カウンター席の椅子で器用に胡坐をかく、朱色の杯を手にした少女の姿。

その隣には恐らく冷水の入っていたと思われるバケツが無造作に転がっていた。

犯人は間違いなく、ヤツ。

「だ、誰だよお前は……ッ！」

少女が振り返り、そして水織は驚愕の表情を浮かべた。

額に一角を生やしたその少女の姿は、まさしく伝承や御伽噺の鬼そのもの。

……いや、そんなことはどうでもいい。

水織が最も驚いたのは、その鬼が金棒を持っていないだとか、トラ柄パンツに晒を巻いていないからでもない。

ただ、単純に。

「……綺麗だ」

「あ？」

彼女が綺麗だったから。その一言に尽きる。

流れるように華麗なスタイルには無駄がなく、洗練されつつも女性らしさを損なわない見事なまでのプロポーション。

水織の頭の中で踊っていた筋骨隆々の鬼のイメージが一瞬で塗りがえられ、そして同時に今しがた吐いた暴言の数々を思い出し、すぐさま無礼を詫びなくてはとババツと土下座の構えを取った。

その間僅か0.05秒ほど。

驚くべきことに、あの宇宙刑事が蒸着するのと同じ速さである。

「す、すみません！ あの、助けていただき、ありがとうござい
ますッ！」

「ハハ。今度は打って変わって平謝りか。面白いねえ」

カッパと笑いながら杯の酒を豪快に、一息で飲み干す。

体操着みたいに真つ白な服に、見たこともないような不思議な生
地のスカート。

腕には何故か鎖のようなものが付いている。恐らくアクセサリー
か何かの類。少なくとも水織はそう判断した。

「あの！ オレ草津水織って言います！ それで、こっちは」

「言われなくてもわかるさ。秋を司る姉妹神だろ」

静葉と穰子が無言で頷く。

何故わかったのだろうか。それは彼女が“鬼”だからなのか。

杯をカウンターに下げ水織を見据える一角の少女はニツと白い歯
を見せた。

「山の四天王が一人、ほしくまゆつぎ星熊勇儀。鬼の秘湯を探してるとか言ってた
ね。あつち遙々外の世界からここまで来たんだ。特別に教えてあげやって
もいいよ」

「ほ、ホントですか!？」

「但し」

勇儀と名乗った美女はグツと拳を握りしめ正拳を打ち、水織の顔
面で寸止めする。

凄まじい拳圧と風が襲いかかり一瞬後ろに倒れそうになるがどう
にか踏ん張って堪える。

「ぐ……っッ」

「弱い人間にや興味が無いんだ。ここは一つ、私と勝負といこうじゃないか」

「勝負……？」

負ける気など更々ない。そんな余裕たっぷりの笑みを浮かべ勇儀が指を立てた。

「もちろん決まってるだろう？ 弾幕勝負さ」

第十四話 姐御肌な鬼娘（後書き）

勇儀のキャラが安定しないので、最近地霊殿をちょこちょこやっています。

ううん……イージーでもお燐までが限界だなあ；

そしてお気に入りユーザー減っちゃったい；

でも、へいき、へっちゃら！

……ぐすん。

次回更新は11月6日。

時間はいつもの通りです。

では、まで次回。

第十五話 怪力乱神

弾幕勝負のため、水織たちは旧都から東に抜けた先にある荒野に場所を移した。

勇儀は酒場を出てからやる気満々のようで、先ほどから柔軟体操をしたり、腕をバキバキならしたり、近くの大岩を素手で軽く砕いてみせた。

……その剛腕、女とはいえ流石は鬼と言ったところか。
エネルギーがアクティブ。

煌めく汗は勇儀の周囲で弾け、彼女を引き立てるかのように輝いては消える。

元の世界にいたら間違いなく運動部、出来れば陸上部あたりが望ましい。

真っ白な体操服がよく似合いそうで、濡れた上着が彼女の引き締まったボディラインをくつきり余すところなくさらけ出し、「先輩、タオルっす!」とか言ってタオルを渡せば、ちよつと照れ臭そうに頬を染めながら「ありがとよ」とぶつきらばうに返す先輩的な……
……いかにいかにダメだダメだ、惚れる。

と、水織の脳内はピンク色の青春真っ盛り。何と場違いなことだろうか。

「さて、早速始めようじゃないか」

「あ……いや、でもオレは何の能力も持ってないし」

「ああ？ 何寝ぼけたこと言ってるのさ。私が戦いたいのは」

そっち、勇儀に指を差されたのは秋姉妹。

突然の指名に静葉は一瞬ポカンと呆けて、穰子はぎゅつとその表情を強ばらせた。

「え、えつと……わ、私たちじゃお話にならないよう……な……？」
「いいじゃないか。私としては、今ここで神様と戦えるっていう千載一遇のチャンスが無駄にしたいくないのさ。アンタらが勝てば秘湯を教えるよ」

「もし、負けたら……？」

「そういうのは後で考えりゃいい」

姉妹は一度顔を見合わせた後、頷く。

水織では弾幕勝負は出来ないし、指名を受けているのは私たち。逃げるなんて無様な真似は出来ない。

水織の前なら、尚更だ。

「わ、わかったわ。じゃあ、私から戦う」

「そうこなくっちゃ。ほら来なよ」

指先で軽く挑発。

穰子は一度大きく息を吸って心を落ち着かせると、ポケットから薄いオレンジ色の術符を取り出し握りしめる。

勇儀は杯を手にしたまま笑みを浮かべてこちらを見据えている。警戒しているのか、それとも余裕なのか……恐らく後者だろうけど、こちらとしても迂闊に動くのは好ましくない。

まずはけん制して様子を見る。

「……ッ！」

予備動作を見せず、穰子は術符を握りしめていない方の手を薙ぐと勇儀に向けて複数の光弾を放った。

緩やかな放物線を描くそれは、しかし相当なスピードで襲いかかり、勇儀を一瞬にして光の中へ消し去ってしまう。

だが相手は妖怪、ましてや鬼。

これしきのけん制攻撃程度では効き目など微塵もないだろう。

「遠慮なんか要らないよ。最初から本気でかかっておいで」

白煙の向こうから聞こえる勇儀の声。

案の定彼女に傷を与えることは出来ず、穰子は小さく唸った。
動じないということは、この程度の弾幕では意味を成さないという
こと。

なら、単純に威力を上げればいい。

握りしめた術符を構え詠唱する。

穰子の符が鮮やかな光に包まれると、パチン、と弾けるような音
と共に彼女の周囲に光弾の群れが出来上がる。

「秋符『オータムスカイ』」

穰子の周りで群れを成していた光弾が一度大きく広がると、彼女
を中心に大きく円を描くようにして展開される。

その光景を遠目で見つめる水織は、目の前で起きていることが本
当に現実なのかと再び思った。

「ゲームの魔法みたいだ。あれが、弾幕勝負ってヤツなんだよな？」

何となしに隣にいたパルスィに訊ねると、緑色の目が少し細くな
った。

「……そうよ。ルールに則った正当な決闘。それが弾幕勝負よ」
「ルールってのは？」

「細かなルールは端折るけど、簡単に言えば、妖怪が異変を起こせ
るように、人がその異変を解決できるように、人と妖怪との実力差
を無くすため、決闘よ美しくあれ、と言ったところ」

「妖怪が異変を起こせるようにって、妙に物騒なルールだな」

いつそそんなルール無い方がいいのでは？

しかし、パルスィは首を振った。

「妖怪は元来、力を競いたがる種。常に他者と競い合い力を高めたりすることが常なのだけど、ここは幻想郷。とても小さな世界なの。だから妖怪の小競り合いが影響でバランスを崩し、崩壊に繋がるかもしれない。それを防ぐためにこのルールがあるの」

「よくわかったような、わからないような……」

「端的に言えば、この世界で勝ち負けを決める程度のルール。その程度で覚えてくれれば結構よ」

「ふうむ……」

そうこう話しているうちにも穰子と勇儀は戦闘を続けている。

穰子は創った光弾を放ち、勇儀はそれを避け、往なし、躲^{かわ}し、それはさながら舞踏のよう。

そして弾幕勝負を知らない水織の目から見ても、勇儀がかなり強いということだけはわかった。

かれこれ数十分。

穰子が肩で息をしているのに対し、勇儀の方はちっとも乱れず威風堂々と胸を張って仁王立ちしている。

……あの膨らみはDだな。間違いない。

「どうしたどうした。最近の神様ってのはそんなに弱っちいのかい？」

「く、う……」

こちらが一方的に攻撃しているというのに情けない。

「だ、だったらこつちで！」

ポケットから別の術符を取り出し構え投げる。

符が弾け、先ほどと同じような光の弾が連なり飛んで行く——が、
全て彼女の拳によって弾かれ消え失せる。

穰子は齒嚙みする。

いくら相手が山の四天王とはいえ、私だって一柱の神なのだ。

それなのに自分の攻撃がいても容易くかき消されてしまう。

実力差なのだろうか。自分の力が妖怪に劣るだなんて、出来れば
認めたくない。

「おいおい。それで本気なのかい？ 期待外れも甚だしいね……」

「ま、まだこれからだよ！ 私は、まだ本気をこれぽっちも出して
ない！」

「へえ……そうかい」

刹那、勇儀の姿が目の前から姿を消える。

慌てて視線を動かした直後、ドン！ と地響きのような音と共に
穰子の懷で不敵に微笑む勇儀の面が見えた。

「『大江山嵐』」

「——あうッ！？」

気づいた時には既に遅く、穰子は勇儀の光弾を下腹部に直撃し、
凄まじい勢いで遙か後方へと吹き飛ばされてしまった。

傍観していた水織の顔が瞬時に凍りつく。

「……お、おい！？ 穰子！？ おいッ！？」

無我夢中で地面を蹴って穰子の元へと急ぐ。

水織が体を抱きかかえると、穠子は小さく息を吐き出し薄っすらと目を開けた。

「あ、あはは……ま、負けちゃったや。ごめんね」

「すっかりしろって！ お前、骨が折れたりしてるんじゃない……ッ」

「だ、大丈夫だよ。そこまで私は弱くないもの。それに勝負って言っても、私たちにとっては遊びみたいなものだし」

「遊び……！？」

かすれるほど小さな穠子の言葉が、信じられない。

どう見たって痛そうで、苦しそうで、今の穠子の顔は見るに堪えないほど衰弱している。

「……ん。ちつと加減を間違えたかね。でも、ひとまず私の勝ちだ」

杯の酒を一気に飲み干し、次いで別の酒を注ぐと右手でまたこちらを挑発する。

「困ったなあ……これじゃ、水織の探してた温泉の手がかりが手に入らないね……イテテ」

「穠子？ 動くなつて。まだ体が……」

「平気。これぐらいすぐに治せるよ」

水織の腕の中、穠子がゆっくりと目を閉じ息を整える。

そして何か呪いのような言葉をつぶやくと彼女の体がつつすらと温かな輝きに包まれていく。

すると、彼女の顔色が少しずつ回復し、やがて水織の腕を抜けてひよいと軽く立ち上がってみせた。

「ほらね。それに、このルールで致命傷を受けることはないからそ

「こまで心配してくれなくてもいいんだよ」

「そ、そう……なのか」

何だか大袈裟に心配して損したような、恥ずかしくないような。それで他の二人も平然としていたのか。余計に恥ずかしい。

「……今度は、私がお相手します!」

「さあて、どれほどのものか……期待してもいいんだよね?」

睨みあう少女と美女。

先に動いたのは静葉だった。

「枯道『ロストウィンドロウ』」

オレンジ色の術符を千切り、静葉の足元から幾千の光弾が舞い上がり列を成すようにして勇儀に襲いかかる。

それはまるで、街道を吹き抜ける風に踊る枯れ葉のように、優雅で気まぐれで。

弾幕はやや不安定な軌道を描きながら勇儀の真正面へと突っ込んでいく。

穰子の攻撃よりも遥かに強力で、盛大な爆音と砂煙が舞い踊る。

「す、すげえ……!」

「お姉ちゃん、気合い入ってるなあ……」

次いで静葉は砂煙の向こう側に向けて別の術符を放ち追い打ちする。

満足に見えない視界の向こうから襲いかかってくる攻撃には、流石の勇儀でも避けるのは厳しいはず。

このまま弾幕を張り続けていれば、流石の彼女と言えど苦戦を強

いられるはず。

「秋符『フォーリンブラスト』」

「はッ、威勢がいいのは大いに結構！ でもちよいと力み過ぎやしないかい！」

白煙の向こうから弾丸のような勢いで勇儀が踊りかかる。

その手には杯と、巨大な光。

静葉が見上げると、勇儀が手にした光を叩きつけるのと、それはほぼ同タイミング。

轟音、そして小さな叫び声。

穢子が吹き飛ばされたのと同じようにして静葉が白煙の向こうから飛び出していった。

「し、静葉！？」

「お姉ちゃん！」

まさしく勇儀は鬼のような強さだった。

鬼神、と言っても差し支えないのかもしれない。

これで彼女たちは“遊び”と言うのだから水織には信じられない。

……こんな危険な遊びがあつて堪るか。

「い、いたたた……」

「かーッ、弱い！ 前に戦った巫女や人間の方がよっぽど強いよ。

そんなんじゃないじゃないか」

「く、悔しいなあ……もう！」

傷付いた静葉が怒りに頬を紅潮させながら立ち上がりまたしても別の符を取り出し弾幕攻撃を行う。

杯を手に、勇儀はそうこなくっちゃ、と小さく舌舐めずり。

高速で放たれる光弾をひよいひよいと軽く避けてみせ、そして静葉の目前に立つ。

「あ……」

「まあ、残念だけど今回は私の勝ちってことで——」

右拳に集まる光の塊。

静葉は足がすくんでしまっただけ何も出来ず、ただ呆然と勇儀の顔を見上げていた。

「いいよねッ！」

「ひッ——！？」

あまりの恐怖にギュッと瞳を強く閉じ、力無くその場にしゃがみ込む。

情けない。

私は、こんなにも弱い神様なのか。

一人の人間の男の子の力にも、なれないような情けない神様なのか。

迫りくる拳は、こんな自分に相応しい痛みなんだ。

覚悟を決めた静葉だが、しかし何時まで経っても勇儀の攻撃が来ない。

何が、あったのだろうか。

恐る恐る、静葉が瞳を開けてみると静葉の前に誰かが立ちはだかっていた。

「……乱入者ってかい。なかなか味な真似をするじゃないか」
「え……」

静葉の前に立つ、小さな影。

影は先端の尖った長い棒のようなもので静葉をかばい、勇儀の右拳を受け止めていた。
小さな影が言った。

「……こ、この勝負、オレが預かった！」
「み、水織君……！？」

勇儀の腕を退け、スコップを構えたのは水織だった。
とてつもない衝撃で、腕がビリビリして涙目だが、幸いにも声が震えることがなかった。
少しは、様になっただろうか。

「この世界のこと、弾幕勝負つてのはよくわからないけどさ」
「……？」

静葉にだけ聞こえるような声量で水織が呟く。

「やっぱり、女の子が傷付くのはよくない。女の子ってのは、笑顔でなきゃいけないんだ」

水織はシャベルを構え直し、切っ先を勇儀へと向ける。

「……だから、静葉と穰子の代わりに、オレが戦う」

足、腕、心……言ってしまうば、水織の全身全霊は震え今すぐにも逃げ出したい。

だけど、目の前で女の子が傷付いているのは、どんな理由であれ見過ごせない。

それが例え遊びでも、だ。

「それに……前にも、こんなことがあった気がする。だから」
「え……？」

水織の言葉に、静葉が首を傾げる。

だから、の先は何と言ったのだろう。

訊ねようとして、しかし水織の背中では気づけばどんどん遠ざかっていってしまった。

「だから、今度は逃げない」

こんなスコップ風情で、こんなちっぽけなオレで、何ができるのかはわからない。

だけど、もう逃げちゃいけない。

どうしてそんなことを、今になって強く意識したのか……理由は一切わからない。

とりあえず今は、二人に代わって勝たなくてはいけない。

意を決し、水織は全速力で駆け出した。

第十五話 怪力乱神（後書き）

ついさつき出来たばかりのお話ですッ！

調整に時間がかかったちゃって遅れてしまい、申し訳ないです；
今日は誤字脱字が酷いかも……ガクブル

そして、夜斗の書く弾幕勝負は、弾幕勝負にあらず。

……ダメじゃん；

勇儀の口ぶりが、何故か小町と同じような言い回しで少し引っかけ
っております。

……とまあ、色々とすみません；

こんなんだから原作知らないだろとか突っ込まれるんだよなあ……
シクシク

第十六話 スコップ無双、誕生

「この勝負、オレが預かった！」

大見得切って勇儀と静葉の間に割り込んだ水織だったが、正直勝てる見込みなどまるで無かった。

それもそのはず、水織はもちろん弾幕使うこともできなければ能力も無いし、そもそも戦う術を知らない。

喧嘩とは違う、これは曲りなりにも決闘。

……というか、そんな決闘に単身スコップ片手に割り込んでしまったが、ルールの大丈夫だろうか。

水織の突然の乱入に勇儀は一瞬眉根を上げたが、やがて少し不満そうな表情で水織を見た。

「けど、お前は只の人間ただだろう？ 何の能力ちからもない人間なんぞ相手にしても楽しめるとは思えないんだけどね……」

「そ、それは……」

今の勇儀が求めているのは強者であって、ただの凡人や弱者を求めているのではない。

乱入してから後悔したが、よくよく考えれば水織のような一般人と戦ってくれる可能性はほぼ皆無ではないか。

困惑する水織に、しかし勇儀は意外なことにある条件を提案した。

「……相分かった。それじゃちよいとルール変更としようじゃないか」

「ルール変更？」

勇儀は手にした杯を一度飲み干し空にして新しい酒を注ぐと、杯

を水織に示しながら言った。

「この杯の酒、お前が私を攻撃して一滴でも零してごらんよ。そうすればお前の勝ちだ」

「……わ、わかった。それぐらいなら、オレでも出来る」

かもしれない、という後ろ向きな言葉は口の中で飲みこむとスコップを握り直し構える。

しかし、いくら静葉や穰子の代わりに戦うとはいえ女の人、しかも美女に対して攻撃を振るうことになるなど誰が予想したか。

だからと言って逃げるわけにもいかないし、ここは覚悟を決めて戦うしかない。

……爺ちゃん、本当に七代崇ってくれるなよ。

「——ッ、うおりゃあああ！！」

スコップを下段に構え勇儀の正面に走り斬りかかるが、何の訓練もない人間の攻撃、ましてや常軌を逸したような存在に容易く届くわけもなく、水織の攻撃は何度も何度も避けられ切っ先が虚しく空を断つ。

「アッハハ。そんな出鱈目な攻撃じゃかすりもしないさ」

「くそッ！　こんの……ッ！」

とにかく杯に一撃当てればそれで終わる。

水織は勢いに体を任せがむしやらにスコップを振り回すが依然として変わらず。

勇儀はほんの僅かに足を動かし、身を擦るだけでその攻撃を回避し、やがて突っ込む水織の脚を軽く払った。

「うおわ……だッ!？」

情けなく倒され、成す術なく水織は顔面から地べたに激突。

激しい痛みと恥ずかしさ、おまけに怒りも合わせて顔が烈火の如く真っ赤に染まる。

……カッコ悪過ぎる。

女の子の前で、女の子に負ける。

自分がこの世界では、いや、この世界でも無力な存在だと痛感する。

「やっぱり、約束しただけじゃ……意味がないんだ」

「……ああ？」

蚊の鳴くような、本当に小さな水織の呟き。

身体能力の高い勇儀の耳にもそれは届いた。

よろよると覚束ない足取りで立ち上がり、砂埃だらけのジャンパーを脱ぐと腰に袖を撒きつける。

アンダーウェア姿となった水織はもう一度強くスコップを握りしめ直し、勇儀を威圧するかのように睨みつけた。

「……根性はあるみたいだね。それならちったあ楽しめそうだ」

「せえ……のッ!」

低く構え、自分に出せる最大速度で駆ける。

狙うは勇儀の持つ杯ただ一つ。

水織は一心不乱にスコップの切っ先を何度も突き出し、止め処なく連撃を叩きこんでいく。

「……ッ」

勇儀の表情に、ほんの僅かだが焦燥の色が見え始めた。
ただの人間と侮っていたはずの水織の攻撃精度が急激に増している。

今まで軽く身を動かす程度で避けられたはずの攻撃が、今は少し余計に動かないといけないほどに、鋭く速くなっている。

この戦いの中で成長した？ ……いや、違う。

今の水織の表情は、成長を確信し猛進していくような戦士の顔ではない。

「何だつてんだ……コイツ」

そして何故か、水織の顔は……酷く、辛そうな顔をしていた。

今にも大粒の涙を零しそうで、泣きだしてしまいそうなその表情は、秋姉妹の代わりに戦うと立ちはだかった時とはまるで別人だった。

何が原因で苦痛に顔を歪めているのかわからないが、その表情は見ているこっちが痛々しく思えるほどだ酷く歪んでいる。

堪らず勇儀が叫ぶ。

「おいおい！ お前、どうしたんだ？ 何でそんな顔して」

「ッ、ああああ！」

「くッ——！」

切っ先が一閃して勇儀の頬に一瞬触れる。

ギリギリのところで回避したはずなのに、その頬から赤い雫が一筋滴る。

明らかに水織の様子がおかしい。

何かに取りつかれたかのような愚直で戦略の欠片も感じられない無粋な攻撃の数々。

頬の血と同時に汗を拭う。何時の間に汗をかいていたのだろうか。

「……能ある鷹は爪を隠す、ってかい」

緊迫と同時に胸の跳ね馬が昂ぶり踊る。

鬼の性と言うやつは全く空気を読まない。読む気など、更々ないのだ。

強いヤツであれば、事情はどうあれ全力で戦いたい。

勇儀の闘志に火がついた。

こんな面白い人間に遠慮は無用。

勇儀は姿勢を落として構え、真っ向から水織のスコップを手の甲で受け止める。

「結構結構！ 暴れるヤツってのは大好きだ！」

「ぐッ、らああああ！！」

拳に弾かれた勢いを生かし、水織は咄嗟に体を回転させ横薙ぎに払うが、勇儀は後ろに跳躍しこれを回避。と同時に光速の弾幕を放ち反撃。

「ゆ、勇儀さん！？ 水織君は、ただの人間で！」

「あれの何処が普通だい？ アイツは、能力ちからを持っているよ」
「水織が、能力を……！？」

正面から襲いかかる色取り取りの光弾。

水織はスコップで、それを――

「はッ、あああッ！」

――斬った。

真一文字に切り裂かれた光弾は見事に二つに裂け、水織の背後で

爆ぜた。

静葉も穰子も、その光景に啞然としていた。

「……す、すごい」

「……………水織、君？」

高速で迫りくる光弾を、スコープの先端に器用に当てながら、時には体をかすめることもあったが、水織はどうか勇儀の攻撃を捌いていた。

常人とは思えないその動き。

水織は、何の能力もない普通の少年だったはず。

それなのに何故目の前の水織はあんなにも強いのか。

水織をそこまで強くする能力とは、一体何なのだろうか。

「はっはっは！ いいねえ！ 面白い人間だ！ 気に入った！」

「セッ——い！」

豪快に笑いながら、水織の激しい攻撃を受け往なし、勇儀の胸の昂ぶりが最高潮に達していく。

こんなに面白い人間は、あの巫女と魔法使い以来じゃないか。

外の世界もまだまだ捨てたもんじゃない。

つつい拳に力が入ってしまい、本気の一撃が地面や周囲の岩壁を容易く壊してしまう。

瞬間、勇儀の攻撃を回避した水織が高く跳躍した。

スコープを下段に据えながら、先端部分を勇儀目がけて突き出しながらの向こう見ずな一撃。

猪突猛進過ぎる攻撃など、避けるのは簡単だ。

一度姿勢を正し水織の攻撃を見据えるとほんの僅かに右足を引き体をずらす。

案の定、水織の攻撃は勇儀を捉えることは出来ず、スコープは勇

儀の足元に深く突き刺さる形となった。

「惜しいね。今一步、速さが足りなかった」

「み、水織君!？」

水織はスコップを握ったまま、何故か顔を上げずに俯くばかり。負けを認め諦めてしまったというのだろうか。

「じゃあ、私の勝ちだ! 鬼符『怪力——ッ!？」

そこで勇儀の言葉が止まり、静葉も穰子も何事かと視線を向けた。すると何故か、今勇儀の立っている地面が傾斜のキツイ坂道のように斜めに盛り上がっていた。

何が起きたのか。

静葉は次いで水織の方へと視線を向け、そして驚愕した。

「お、お前の仕業か!？」

「ッ、でえやああああ!!」

弓なりに撓るスコップと、体全体でスコップを持ち上げる水織。水織が突き刺したスコップは、まるでスプーンでゼリーを掬^{すく}うかのように、地面を大きく掬い上げていた。

地面が、あんな風に簡単に持ち上がるなど、本来はあり得ない光景。

そしてそれが、水織の能力と気づくのに時間は数秒たりとも要らなかった。

「うわ、ったたた!？」

何の予兆もなく突然足場が傾けば、よほどのバランス感覚を持つ

者でもないかぎり姿勢を維持するなど無理な話。

そしてそれは鬼であろうとまた同じ。

勇儀は慌てて足を踏ん張りどうにか傾斜に耐えようとしたが、傾斜はどんどん傾いていき、立っているのですら辛くなる。

再び、グググ！ と地面が震え傾斜がさらに傾いていく。

「——ッ、らああああああ！！」

水織のスコップが地面から抜け振り上がったところには、傾斜は直角を迎え、もはや立ちはだかる断崖となった。

こうなっては、何人だろうと立っているのは物理的に不可能である。

衝撃で跳ね飛ばされた勇儀はそのまま放り投げられるような形で宙を舞うが、しかし勇儀は諦めなかった。

空中で一度杯を放し、くるくると体を回転させながら華麗に着地してから杯を受け止めようと手をあげて、目を見開いた。

カン！ と気味の良い音を響かせたと思うと、木製の杯は投げつけられたスコップに貫かれ宙を舞い、そして地面で真つ二つに裂け無残な姿で転がっていた。

水織が、勇儀の着地と同時にスコップを投擲していた。

そのあまりにも突飛な攻撃に誰しもが驚き水織に驚愕の眼差しを送った。

「……や、約束だからな。酒を零したから、オレの、勝ち……うくッ」

「水織君！！」

駆け出し水織の元へ駆け寄ると、静葉はその体を両手でひしと受け止めた。

「……な、何なんだい。アイツ。どう見たってひよろつとした只の人間のはずなのに」

水織が掬い上げた地面を振り返り、勇儀が声を震わせる。

「地底に、もう一つ大穴が出来上がっちまったじゃないか」

そこにはたった一人の人間が、たった一本のスコップで掘ったとは到底思えない巨大な大穴が、旧都の外れにぽっかりと出来上がっていた。

第十六話 スコップ無双、誕生（後書き）

またまた遅れてしまい、申し訳ない；

ついに解禁、水織君の戦闘シーン！ そして覚醒！ 気絶！；
この一連の流れはもはやテンプレですね。

次回更新は11月12日。

もう少ししたら第二章、終了かな。

それでは、感想ご意見等、お待ちしております。

第十七話 こっそりジェラシー

「う、ううん……？」

頬に伝わる冷たい感触に、水織がうつすらと目を開ける。

目を開けたその先では、静葉と穰子がこちらの顔色を窺うようにして覗きこんでいた。

気がつけば、水織はまた静葉の膝枕の上だった。

「水織、大丈夫なの？」

「はあ？ 大丈夫って……いつッ」

むくつと体を起こし自分の体を確かめる。

腕も動くし足も動くのだが、軽く動かすと鈍い痛みが全身に走る。何故だろうか。というか、オレは今まで何を……！

「そうだ！ 勇儀さんは？ オレ、勇儀さんと戦って、それで……」
「さん付けはしなくていいよ。勇儀でいいさ、水織」

背後から割れた杯を持って勇儀が現れる。

真っ二つに裂けた杯を水織に示して二ツと白い歯を見せると、いきなり水織の首に腕を回した。

「へ？ うおわ！？」

「何だい何だい！ そんな強い能力ちからを持つてるってのに出し惜しみするだなんてズルイじゃないか！」

「ゆ、勇儀……痛いし苦しいし、そのむ、むむ……うッ!？」

何の遠慮も無しに勇儀の胸の膨らみが頬に押し当てられ、水織の

全身が炎が迸りそうなほどに火照る。

このままだと戦闘後の痛みで死ぬんじゃないで、柔らかな胸で圧殺されそうである。

……それはそれで悪くないかもしれない。

「み、水織が苦しんでるじゃないか！ は、早く離れなよッ！」
「おおっと。こいつは失敬失敬。ほれ」

ポイツと軽く放り投げられ、今度は穰子がそれを両手で抱えるようにして受け止める。

「おあだッ!？」

受け止められた瞬間、ゴチン、と鈍い音がした。

何か硬いものにぶつかったかのような鈍痛に水織が顔をしかめる。

「み、水織大丈夫？ 怪我とかさ、ほら、どこか痛いところがあればすぐに言いなよ？」

「お前じゃ、膨らみが足りな」

「うおりゃあああああああ!!」

穰子の見事な巴投げが決まり、満身創痍の水織は再び宙を舞い、どしゃ、と顔面から無様に着地する。

一瞬首が変な方向に曲がったような気がしたが気のせいだろう。

「で、一体何が起こったんだ？ ……いたた」

首の根を摩りながら水織が訊ねると、静葉も穰子も、もちろん勇儀も眉根を寄せ怪訝そうな表情になる。

「ああ？ まさか水織、覚えてないのかい？」
「覚えてないって……………ッ？」

勇儀が指差す方向を見つめ言葉を失う。

地底の世界、この荒野の外れに、いつの間に出て上がったのか巨大な大穴がぼつかりと口を開いていた。

まさか戦いの最中に勇儀がやったとも言っただろうか。
確かに鬼なら、これぐらい造作もなさそうだが。

「何を勘違いしてるんだい。これはお前がやったんじゃないか」
「……………へ？」

事も無げに勇儀があっけらかんと言い張る。

次いで指を差した方向には、まるで巨大なスコップで大雑把に掘り起こしたかのような土砂が積み重ねられていた。

これを、勇儀は水織がやったのだと平然と言ったのけた。

「……………はははは！ ま、まさかあ？ オレが、地面をひっくり返したとも言いたいんですか？ このスコップで？ うっそだあ？」

「ほ、ホントだよ？ あのスコップで、ドーン！ って」
「……………」

静葉の言葉に絶句する水織。

振り返り、半ば放心状態で大穴を見つめる。

あんな巨大な穴をオレが空けた？ こんな何の変哲もないスコップで？ そんなことあるわけがない。

しかし、そんなことあるわけないのなら、この手に残る不思議な感触は何なのだろうか。

「それが水織の秘めたる能力ちからってヤツなんだろうよ。たまげたものだ」

「オレの能力……」

自分の中に、そんな得体の知れない能力ちからがあるのかと思うと少しゾツとした。

これじゃまるで、人ではないみたいではないか。

と、水織が呆然自失していると勇儀に肩を叩かれた。

「ほら、ポケツとしてるんじゃないよ。秘湯に用があるんだろう？」

「え？ 秘湯……あ、そうだ」

ここに来たのは噂の鬼の秘湯を探すためだ。

本来の目的を思い出し、水織は立ち上がるとスコップと荷物を拾い上げた。

「ここから少し歩くよ。疲れてるならおぶってやろうか？」

「い、いいよ！ そんなことしなくても」

確かに疲れてはいるが歩けないほどではない。

水織はジャンパーを羽織り直すと、戦闘の疲れを微塵も感じさせないような歩みで進む勇儀を追いかけた。

・
・
・

勇儀を追いかけて十分ほどだろうか。

水織たちが元いた場所からさらに奥へと進んで鍾乳洞に辿り着くと、やがて目の前から白い煙と腐ったゆで卵のような匂いが立ち

込めてきた。

「うう、くっさ……」

「この匂い……硫黄みたいだ」

硫黄は確か、硫化水素が冷え固まったもの、だったような気がする。

火山性のガスには硫化水素や二酸化硫黄が含まれていて、それが地表で冷やされたものが硫黄として出来る。

硫化水素は有毒性のある気体なのだが、勇儀は全然ものともしていないし静葉も穰子も顔をしかめているだけで特に身体に影響は無いらしい。

当然、水織は鬼でもなければ神様でもないわけで、奥へ進むにつれやや気分が悪くなってきた。

「……大丈夫？ 顔色が悪いわよ」

「ちょっと匂いがキツイ。理科の授業とかでも、マスクしてたしな

あ……」

「スカーフ、貸してあげようか？」

「ん、助かる」

パルスィから鶯色のスカーフを借りて口元を覆う。

そのまままっすぐ進んでいくとだんだんと蒸し暑くなって、再びジャンパーを脱ぐ羽目になった。

……どうせなら脱いだままで来ればよかった。

腰に結び直してまたしばらく進んでいくと、視線の先に光が見えた。

「ほら、着いたよ」

「うわ……！ こりゃ、すげえッ！」

鍾乳洞の奥に広がる乳白色の世界。

天井に連なる氷柱のような白い石が、まるで豪邸のシャンデリアのような優雅な趣を醸し出し、その広さも秋の湯と同じくらい広々としている。

それは、水織が今まで見たこともないようなロマンチックで幻想的な天然の露天風呂だった。

勇儀がまるで自分の家を自慢でもするかのように胸を張って威張る。

「どうだい。幻想郷中を探し回ったってこんな珍しい温泉はないよ」

「すげえ、すげえよ勇儀！」

「あ、ちよいと待ちな水織！」

水織は臨界点寸前のテンションで勇儀の制止すら無視して飛び出し、目の前の乳白色の温泉に何の躊躇いなく右手を突っ込んだ。

右腕から伝わる、まるで沸騰したお湯のような灼熱の感触に水織は――

「あつじやああああああ！？」

この鍾乳洞が崩れるんじゃないかと言わんばかりの勢いで絶叫した。

右腕をブンブン振り回して強引に冷ましながら、どうにか落ち着きを取り戻す。

「そこは源泉だからただの人間じゃ入るなんて無理だよ。私はよく我慢比べに使ってるけどね」

「熱湯コマーシャルやってる人の気持ちがわかったよ、くそう……ッ」

まだ冷え切らない腕に息を吹きかけっていると、勇儀が別の場所を指差した。

たぶん、そっちは常温だから入れるぞ、という意味だろう。

気を取り直して乳白色の湯に、今度は、おっかなびっくりといった感じでゆっくりと手をつ突っ込む。

焼けた肌に染み渡る滑らかな感触。

お湯の温度は四十度辺り、熱過ぎず温過ぎずとちょうどよい温度だ。

乳白色の湯は舐めてみるとかなり酸っぱい。

「……泉質はやっぱり、硫黄泉か。となると、筋肉痛とかには効かないんだよなあ」

「何をぶつぶつ言ってるの？」

「泉質を調べてるんだよ。あの爺ちゃんはぎっくり腰って言ったよな。硫黄泉は神経痛にも効くから、これでも大丈夫……なのかなあ？」

ぎっくり腰って神経痛、なのだろうか。

「水織君、温泉とか詳しいんだ」

隣で水織を眺めていた静葉が感心した様子で呟く。

そんな大層なもんじゃないと水織は首を振った。

「旅館で生活してりや嫌でも覚えるのさ。爺ちゃんも、重度の温泉マニアだったし」

「ふうん……」

一応、硫黄泉は飲めば腹痛にも効く……が、これは別に関係ないか。

水織はリュックの中から紫の術符を取り出し、源泉の端にこっそりと張り付けた。

これでもう片方の符を秋の湯に張り付ければ、ここのお湯が使い放題となる。

…何だか卑怯臭いな。

「よし、これでやることは済んだな。勇儀、ありが……つてえ!？」

「うん? どうした水織?」

振り返ると、何故か半裸で勇儀が立っていた。

鍛えられ引き締まった体には晒が巻かれていて、くつきりと流線型のスタイルと豊満な胸が見て取れた。

「い、いやいやいや！？」 あ、な、な、な、な何で脱いでるん
つすか！？」

「何でって、入るからに決まってるだろ？ お前の世界じゃ服着たまんま入るのかい」

「い、いや入らないけど……ってそうじゃなくて!？」

水織の前だというのに、当の勇儀は何の遠慮も無しにどんどん脱衣の作業に入る。

上着を捨て袴を脱ぎ、残る一枚布が今！ という決定的な瞬間を迎えた途端、水織の視界が突然暗黒の世界に包まれてしまった。

「だ、誰だ！？ 今一番いいところがふあつ！？」

と同時に頭部に強い衝撃が襲いかかり、水織の意識はそのまま闇の向こう側へと吸い込まれてしまった。

そして意識を失った水織を、静葉が真っ赤な顔で抱え上げると勇儀に大雑把な一礼した。

「じゃ、じゃあ私たちは失礼します！」

「はあ？　せつかなんだしお前らも入ってけて」

「結構ですッ！」

そしてそのまま、水織は姉妹に担がれるような形でその場を後にした。

取り残された勇儀はただ呆然とその後ろ姿を目で追いかけて、やがてふうと小さく息をつき肩をすくめた。

「せつかくここまで来たつてのに入らないで帰って行っちゃったよ。忙しい連中だね」

「私も付き合つて疲れたし、帰ろうかしら」

「なあ、パルスィ。あいつら何で帰っちゃったんだろうな？」

「さあね」

「ううん……」

勇儀は腕を組みしばらく考えたが、結局特に何も思いつかなかった。

脱ぎ捨てた服をこそごそ漁ると酒の入った瓶とお猪口を取り出し、ついでに何処に入っていたのか朱色の盆を浮かべて酒を注いだ。

「ま、いいや。久々に面白いヤツと戦えたし、満足満足」

上機嫌で酒を飲み始める勇儀を残してパルスィが洞窟を歩きだす。

……実は、静葉と穰子が勇儀の胸に対して嫉妬していたのをパルスィはちゃんと感じ取っていた。原因は言うまでもなく彼だろう。

「人に恋する神様……ね」

恋に嫉妬は付き物。それは至極当然なのだが、しかし何と人間臭い神様だろうか。

「……秋の湯か。私もちょっと行ってみようかな」

その日から、秋の湯のお湯が鬼の秘湯と同じ乳白色になった。

当初は利用客から気味悪がられたのだが、あの老人のぎっくり腰が治ったという噂が広まり、秋の湯は毎晩行列が出来上がるほどの大繁盛となった。

里の住人は皆『秋の神様のご利益だ』と口々に言っている。

本当は鬼の秘湯のお陰なのだが、これは水織と秋姉妹だけの秘密である。

第十七話 こっそりジェラシー（後書き）

お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます。
これにて、第二章終了です。

やっと目覚めた水織君の能力、そしてちょっとパワーアップした秋の湯。

これからどんなお話が繰り広げられるのか、乞うご期待です。

それと途中、水織君が硫黄の匂いが〜と言っていますが、厳密に言えば硫黄は無臭です。

この場合の腐った卵のような匂いというのは硫化水素の匂いです。
そこそこ、ちょっと注意です。

これ書いてると、実際に温泉とか銭湯に行きたくなりますねw
読んでる人も、そう思ったりすることがあるのかな？
感想ご意見、待ってます。

次回はやっぱり三日後、11月15日です。
では、待て次回。

第十八話 夢と、第三の美女

遠くで、女の子の泣き声が聞こえる。

やめて、やめてッ、やめてッ！

声は神社横の、普段物置として使われている蔵の方から聞こえた。水織はすぐさま駆け出し蔵の影からそっと顔だけ覗かせて様子を見うかがう。

蔵の前で、少女が少年たちに囲まれていた。

栗色の髪に黒く澄んだ瞳が特徴的な可憐な少女。

彼女は水織にとって、初めて出来た友人と呼べる存在だった。

そんな少女が今、少女よりもずっと背の高い少年たちに囲まれ苛められていた。

栗色の綺麗な髪を引っ張られたり、乱暴に蹴飛ばされたり。

少女は何度も何度もやめると叫んでいるのに、少年たちは聞く耳を持たず苛めを続けている。

——やめろ！ オレの友達に、何をするんだッ！

しかし水織の叫びは誰に届くことなく虚空に響く。

何故か。それは単純に水織が叫んでいないだけだった。

今の叫びは、心の叫び。

何度声に出そうとしても言葉より先に体が震えだし、唇が思うように言うことを聞いてくれない。

心の中では勇気よりも先に恐怖が全てを支配していた。

恐くて、少女の前に姿を見せられない。

今の水織は少女と同じくらいの背丈で腕も小枝のように細く、とても太刀打ちできるような力は持ち合わせていない。

ここで少女の前に出ても、目の前でコテンパンに打ちのめされ逆に惨めな姿を晒してしまうことになる。

そんなこと、絶対に嫌だった。

あの子に、絶対にカッコ悪いと思われてしまう。

それは子供ながらの小さくて身勝手な自尊心。^{プライド}

……そうだ、誰か大人を呼べばいい。

あの子が苛められていると報せ、誰かに助けを求めればいいんだ。それは少女を助けるための名案だった。

いや、違う。

本当はただこの場から早く逃げたかった。

自分ではどうにも出来ない、だから誰かに助けを求める。

それは当然のこと。力のない子供なら、もっと当然のこと。

——違うッ！

本当は適当に理由をつけて逃げたかっただけ。

目の前の少女を見捨てて、ひとまず自分の身だけは守ろうという矮小な防衛心。

だから、水織は——

・
・
・

「——うわあッ!!」

体を起こし、気がつくと水織は自室の布団の上だった。

そして、今見ていたものが夢であると気づくのに少々時間がかった。

全身をびっしょりと濡らす汗の感触が気持ち悪くてシャツを脱ぎ

捨てると、朝の冷たい空気に冷やされ体がぶるぶると震えた。
寒さだけの、せいだろうか。

「……何で、この夢………もう、忘れたはずなのに」

もう、九年も前の出来事。

ここ最近はこの夢など存在すら忘れていたはずなのに、何故今になって再びこの夢を見たのだろうか。

思い当たる節など一つもないのだが、もしかしたら能力とやらの目覚めのせいで疲れているのかもしれない。

「疲れ……か。うん、そうだよ。こういう時は風呂でも入ってサッパリすりゃあいいんだ」

カゴに下着を突っ込んで玄関に立ち、ふとあの少女のことを思い出す。

「そういえば、あの子も不思議な“力”を持っていた……」

だが、どんな能力だったかはすぐに思い出せなかった。

水織は足早に男湯に湯を張り、そして誰も見ていないことをいいことに湯船に思いつきり飛び込んだ。

・
・
・

「いらっしやいませえ。秋の湯へようこそお」

静葉が入り口でお客さん一人一人に丁寧に会釈をしている。

水織たちが地底で秘湯の源泉を繋げてから秋の湯は大繁盛で、それこそ毎晩里中の人が押し寄せてくるほどだ。

「秘湯の効果つてすごいね。売り上げがウナギ昇りだよ！」

「小さな里だから、口コミの影響が凄いんだろうな。あの爺ちゃんももう医者はいらねえって突っ返したって自慢してた」

「あつははッ。元気なお爺ちゃんだね。あ、いらっしやいませ！」

穰子も静葉に負けじと元気な挨拶でお客さんを迎えている。

来てくれるお客さんも、秋姉妹の姿を見るとみんな両手を合わせて拝み始める始末。

この調子なら、彼女らの求める信仰とやらも徐々に回復していくのではないだろうか。

水織も自分の仕事を思い出してボイラー室に向かおうとした直後、お客さんの中にウサギ耳が揺れているのを見つけた。

どっかで覚えがあるような……そうだ、確か。

「鈴仙、だっけか」

「あ、水織さん。こんばんは」

以前、ぎっくり腰の老人をなだめようとしていたウサ耳の少女、鈴仙。

確か医者見習いだとか何とか言っていたような気がしたが、今日はあの老人と一緒にではないところを見ると今日は一人で来たということらしい。

まあ、あの老人は医者は突っ返したと言っていたのだから当然か。

「……うん？」

鈴仙の後ろでピンク色のスカートのようなものがはためいている

のを見つけ首を傾げる。
スカートとついでに、彼女と同じような白いウサ耳が見えたよう
な。

「せえい！」

「ひゃあ！？」

威勢のいい掛け声とともに、突如鈴仙の膝がカクンと崩れ前に倒
れかかる。

すると、鈴仙のすぐ後ろで見知らぬ少女がニシシとあくどい笑み
を浮かべていた。

ピンク色のスカートに、鈴仙と同じようなウサギの耳、しかしこ
ちらは少し垂れかかっている。

鈴仙がすぐさま振り返ると、顔を真っ赤に染めて第二のウサ耳少
女を追いかけた。

「こ、こらあ！ また悪戯して！」

「油断してるそっちが悪いんだよ〜ん」

と、文字通り脱兎の如き速度で秋の湯正面をぐるぐると駆けまわ
る。

事情のわからない水織はどうしていいのかわからず、しばし呆然
と立ち尽くしていると少女が水織を盾にするかのようにサツと背後
に回った。

「あ、あのコイツは？」

「てゐ！ いい加減にしてください！」

「いいじゃないか。ちよつとぐらい悪戯したってさ」

「てい……？」

それが名前なのだろうか。

水織の背後の少女はケラケラ笑いながら水織に手を差し伸べてきた。

「因幡^{いなば}てゐだよ。今日は皆で噂の銭湯とやらに遊びにきたのさ」

「オレは水織……って、皆？　という鈴仙とか」

「あ、いえ。今日はお師匠様も一緒なんです」

「お師匠様？」

鈴仙が医者見習いだと言ったから、この場合の師匠とはもちろん医者の師匠だろう。

医者と聞くと何となく無骨な中年男性を浮かべてしまったのだが、道の向こうから現れたのは女性だった。

「優曇華^{うとんげ}にても少しはしゃぎ過ぎですよ。もう少しゆっくり歩いてちょうだい」

「んな……ッ！」

スラリとした長身と、月明かりに反射する絹糸のような滑らかな銀の髪。

まるで夜空に浮かぶ月のように透き通るように美しい姿は、ある種の女神なのではないかと錯覚してしまうほどに、彼女は綺麗だった。

鈴仙がそんな美女に付き添うようにして水織を示す。

「お師匠様。彼がこの前話した水織君です」

「へえ……彼が」

凜と澄んだ声に水織が一瞬で硬直してしまう。

鈴仙は彼女にいったい何を話したというのだろうか。

まさか老人を無理やり銭湯に入れたことに対し怒っているとでもいうのだろうか。だとすると、自分は何て無礼なことをしてしまったのだらう。ここは早急に謝ってイメージを回復せねばならない。この瞬間、水織が頭を下げるのに一秒と掛からなかった。

「すいませんッ!」

「は……はあ?」

突然の水織の謝罪を受け、銀髪の美女がやや困惑したような表情になる。

謝罪が足りないのだろうか、水織は今すぐにでも土下座出来るように構えを取って、実行しようとしたところで穰子が顔を覗かせた。

「あれ。水織、何やってんの」

「え、えっと。この前爺ちゃんを無理やり銭湯に入れたことに対する謝罪を」

「謝罪?」

穰子と、美女までも首を傾げる。

何故そんなことを? と今すぐにでも言葉が出そうな顔をしていた。すると鈴仙がコホンと咳払いしてから話に割り込んできた。

「違いますよ。湯治のお話です」

「湯治の?」

すると美女もにこりと微笑み頷くと、凜と澄んだ声音で水織に答える。

「はい。里に新しく湯治場が出来たと聞いたので、ここまでやってきたんですよ」

「湯治場……あいや、ここはただの銭湯なんですけど」

「でも、ここのお湯は神経痛に効くという噂で持ち切りなんですよ？ それこそ、医者がいらないと噂されるぐらいに」

「うぐ……」

鈴仙の顔が、しまったという顔になって慌てて訂正を入れる。

「ち、違いますよ？ お仕事がちよこつと減っちゃったのは事実なんですけど、今日はせっかく出来たのなら私たちも入ってみようって、お師匠様と話してやってきたんです」

「そ、そうなのか。ちよつとドキツとしたじゃないか」

「それにしても、銭湯なんて初めてだから、ちよつと緊張するわね」

美女がシャンプーやら何やら入った桶を抱えながらはにかむ。

いい、すごく。今すぐ一緒にいたいっす。というか彼女らは銭湯初めてなのか。ということは一肌脱がざるを得ない。風呂だけに。

「だ、だったらオレが入り方をお教えしますよ！ もちろん実演しなきゃあああ!？」

鋭いローキックが脇腹を直撃。

もんどり打つ水織を放っておいて、穰子が営業スマイルを作る。

キックボクサーかお前は。

「こ、この馬鹿は放っておいてお入りくださいな。入り方とかマナーとかは、脱衣所の張り紙に書いてありますので」

「ありがとう。だけど、もう少し待っててもいいかしら。まだ二人来ていない人達がいる」

「じ、じゃあ、外で待ってても寒いだけなんで、よかったら中で待ってて、ください……」

息も絶え絶えに水織が告げると彼女らは首肯し、三人で秋の湯の建物の中に入っていた。

しかし幻想郷に来てからというものの、どうも欲望が漏れて外に出てしまうのは何故なのだろう。

正直なのは大いに結構なことなのだが流石に外に出てはいかん。

「……水織、お客さんに変態発言してないで二人を迎えに行つてあげたらどう？」

「致命の一撃を浴びせた張本人が言う台詞かよ……仕方ないな」

一瞬ボイラーが気になったが、開店したばかりだしすぐに温度が下がるという心配ないだろう。

護身用に以前役に立ったというスコップを抱えながら、水織は鈴仙たちが通っていた西の街道に向けて歩き出した。

第十八話 夢と、第三の美女（後書き）

第三章、始動。

やっぱり永琳の口調が安定しないんで、永夜抄でまた勉強しよう……

それとあんまし関係ないんですが、ちょこつと風邪を引いたみたい？
なので今日はさっさか寝ます。

次回更新は11月18日予定。
では、また次回。

第十九話 月夜に不死鳥

夜の帳が下りた幻想郷。

今宵は満月。

空から降り注ぐ白い月光が煌々^{くわんくわん}と夜道を照らし出し、僅かながらの道標を水織の前に示してくれている。

今水織が歩いているのは秋の湯から直結している西の街道。

街道と言っても、この里以外に村や町があるというわけではないので少し語弊があるかもしれないが、水織はスコップを肩に担ぎながら月が照らした道を一人歩いていた。

夜は妖怪が跋扈する時間。夜の幻想郷を一人で歩くのはこれ二度目となる。

「今日はルーミアは出てこないのか」

以前水織は夜を操る妖怪ルーミアに遭遇し襲われたことがあった。夜、即ち闇を操る妖怪。

水織の視界を奪い、ついでに自分の視界も失ってしまった結果、通りすがった霊夢に呆気なく撃退された……これだけ聞くとずいぶん不憫な話ではある。

その後助けてからは一度も姿を見ていないが元気にやっているのだろうか。

どうせなら秋の湯のことを紹介しておけばよかった、と途中まで思ったが、妖怪を招いてしまったら大パニックになってしまうような気がした。

「銭湯が暗がりになったら大変だしな。覗きとかできな……ごほん」
危うくともないことを言ってしまいそうになるのを堪え飲み

こむ。

いや、覗きなんてしていない。断じて。気を取り直し前に向き直って歩きます。

幻想郷の秋も一層深まり、夜の風は急激に水織の体を冷やし包みこむ。

もう少しすれば幻想郷にも冬が訪れそうな気がする。

寒くなれば当然銭湯経営はさらに大変そうになりそうだと案じながら歩いていくと、やがて目のお前の方角から何やら話し声が聞こえてきた。

「……つたく、お前が着替えるだの何だの言ってる間に置いてかれちまったじゃねーか」

「そういう貴方こそ、銭湯って何なんだってしつこく永琳に訊いてみてつともなかったわよ。まさか怯えてるの？」

「な……！？んなことあるか！聞き慣れない場所だからどんなもんかちゃんと知っておきたかったただけだ！」

「ふん……？」

「その挑発的な目は何だてめえ……！」

聞こえてくる話し声は剣呑な雰囲気放っていて今にも喧嘩が勃発しそうな様子。

しかも声はどちらとも女の子らしい。かぐや、と聞こえたから多分女の子で間違いないと思う。

声はちょうどこの先の少し開けた平野の方から聞こえてきたので、水織は足早に向かうことにした。

「おっと」

一応妖怪の可能性を考え、水織は手近な場所にあった岩場に身を隠し様子をうかがう。

口論を交わしていたのは案の定二人の女の子だった。

「銭湯ってあれだ、結局は湯浴みのことだろ。それなのにそんな着飾ってどうすんだ」

やや威圧的で男勝りな口調の彼女は、銀色の髪に赤いズボンのような着物の袴のような、見たことのないような姿をしていた。今で言うところの、オーバーオールに似ているような気もする。

「そんな格好で外を出歩くだなんて、普通じゃ考えられないわ。身、だ、し、な、み、って知ってる？」

そして銀の髪の子を挑発するような視線と言動を繰り返すのは、古典的で優雅な雰囲気醸し出す少女。

姿はまるで百人一首の絵札から抜け出したかお姫様のような格好だった。十二単、とまではいかないが全体的にゆったりとした大きなドレスを揺らしている。

何が原因なのかは知らないが両者は睨みあいながら火花を散らし平野の真ん中で対峙していた。

今にもお互いに飛びかかりそうな、そんなピリピリとした一触即発な雰囲気はこちらにまで伝わってくる。

……何なんだあの二人。

「いちいち突っかかる言い方しやがって！ 我慢ならねえ、勝負だ！」

「はいはい。どうせ私が勝つって決まってるんだから」

勝負ということは、恐らく弾幕勝負だろう。

二人が互いに距離を取って後方に飛び向かいあうと、彼女たちを中心に何やら魔方阵のようなものが浮かび上がる。

「あれも弾幕勝負……なんだよな」

物陰から顔だけ覗かせて両者を観察する。

銀の髪の子が軽く両足を広げファイティングポーズを取る。

ちよūdポクサー選手のそれとよく似ていた。

対する優雅な少女はというと特にこれといった構えをせず、悠然とした態度で少女を見据えている。

「いつでもどうぞ？ 妹紅」

「言われなくてもやってやらあッ——！」

裂帛の気合と共に少女の両手から炎が爆ぜ、優雅な少女目掛け火の玉が猛進していく。

水織は呆気にとられていたが、次の瞬間さらに驚くことになった。

「……はあ。相変わらず単調な攻撃」

心底つまらなそうに片手だけを薙いで炎をかき消す少女。

鬱陶しい蚊トンボでも追っ払うかのように片手だけで火球を消し去ってしまった。

そして再び挑発的な眼差しで銀の髪の少女を見据える。

「最初から本気で来なさいよ。さっさと決着付けて、永琳たちと合流しないと」

「お望み通り、私が勝って終わらせてやるさ！」

トン、と人間では到底辿り付けないような跳躍で銀の髪の少女が跳ぶ。

そして次の瞬間、少女の背後から爆炎の翼が舞い上がり、さなが

らその姿は灰から生まれ羽ばたく不死鳥のように見えた。

「すげえ……！」

思わず見惚れてしまい、呆けるように空を見上げる。

紅蓮の翼で空を飛ぶ少女は烈火を灯した右手を素早く薙ぐ。

すると今度は優雅な少女の足元に、翼を広げる不死鳥のシンボルが浮き上がると鋭い光を放ち足元から緋色の光弾が巻き起こる。

「『パゼストバイフェニックス』」

まるで暴風雨のように荒ぶり爆ぜる光弾。

しかし対する少女は身動き一つせず、荒れ狂う弾幕の嵐を一瞥してからやがて一枚の札を取り出し構えた。

「神宝『サラマンダーシールド』」

符から放たれる光が彼女の周囲から放射状に広がると、銀の髪の少女の弾幕をかき消すようにして広がり一つ残らず相殺していく。

水織はただただ啞然とするばかりで、その場に、その光景に釘付けとなっていた。

「これが、遊びだって……？」

ルーミアと霊夢、それと秋姉妹と勇儀の弾幕勝負は間近で見えたこともあって凄い迫力だったが、目の前の彼女たちはそれを圧倒的に凌駕していた。

飛び散る光弾の嵐、優雅な舞踏でも舞うかのように動き回る少女たち。

水織が今まで見ていた弾幕勝負よりも圧倒的に大迫力で、圧倒的

に優雅。

このまま終わりが来るまで見ていてもいいと思うほどに彼女たちは美しく戦っている。

だが水織も本来の目的を忘れるほど野暮な人間ではない。

「……でも、どうやって止めりゃいいんだ」

あまりに凄絶過ぎて、勝負の渦中に踏み込んでいけるような気が全くないのだ。

あの弾幕の嵐に突っ込んでいけば、待っているのは恐らく死。例え死ななくとも、大怪我をするのは目に見えている。説得しようにも、弾幕の衝撃や爆風で声が届くのかどうか怪しい。

弾幕勝負が終わるまでここで待つか、しかしそれでは鈴仙たちを待たせてしまうだろう。

かといって弾幕勝負に割り込んで入るわけにもいかず、というか間に入る自信などこれっぽっちも無いわけだが。

「タオルを投げたら通じるか？ でも、それはボクシングの話だよな……」

投げ込んでも消し炭になりそうだが。岩陰に腰掛けどうにか妙案はないものかと思考を巡らせる。

ふと、今の今まで存在を忘れていたスコップが目に残った。

「そつえば、勇儀や静葉たちがオレに能力があるとか言ってたよな……」

あの時水織は地底の底にスコップを穿ち第二の大穴を空けたという話だが、どうにか上手く使えないものだろうか。

スコップを握り、物は試しと切っ先を地面をコツコツと当ててみ

る。

するとスコップの先端が何の抵抗も無しにすり抜けた。それは鋭利な刃物でバターを切るような感覚に近かった。

「どう……なってるんだ？ 普通はこんな風にならないだろ」

切っ先が当たれば地表とぶつかり砕き地中に突き刺さる。それは物理的な法則に従ったもので、当然そこに地面の強度やスコップの精度で抵抗が生じたりする。

しかし水織の手のスコップには抵抗がまるで無かった。

このことから、自分の能力とは、何の抵抗も無しに地面を抉り掘ることのできる能力、と水織は半信半疑ながらそう考えた。

しかしそう仮定した場合、地底での一件はどうなるのだろうか。

これではただスコップが地面を無抵抗で貫くと言うだけで大穴とは直接的に繋がらない。

「む、難しく考えるのは止めだ止め！ とにかくこれで少しでも注意を反らして、それから説得する！ この作戦でいくぞ」

意を決した水織は岩陰越しに見据え、ちょうど二人の真ん中に狙いをつけると岩の根元にスコップを突き立てた。

無抵抗で地面を貫くと、スコップの柄が半分あたりまで沈んだところでグリップを握り直す。

そしてこの原理を利用して支えを作り、今までお世話になっていた岩陰にお別れを告げる。

「せえ……のッ！」

スコップに全体重を乗せ^の押し掛かると、存外大きかった岩が地面から姿を見せ水織の体重の勢いを乗せて放り投げられる。

放物線描き飛んでいく大岩は、さながら大昔の戦争で使われた投石機タバルトのように見えた。

彼女たち風に名付けるのなら『ゴイレム・シューター岩弾投擲』なんてどうだろうか。
……やばい、ちよっとカッコいいかも。

「コイツで終わりに……うおわ！？ な、何だいきなり！」

思わぬ乱入に少女の手の炎が止まり、両者の視線が自然水織の方へと集中する。

スコップを構え立ちつくすその姿は滑稽でこそあったものの、知らぬその姿に二人とも訝しげな視線を送っている。

「誰だ、お前」

「私たちの勝負に水を差すだなんて、無粋もいいところだわ」

「こ、こうでもないかと話を聞いてくれそうになかったから仕方なくだ。アンタら、鈴仙たちのツレだよな？」

鈴仙という名を聞いて二人が顔を見合わせ、やがて優雅な少女が首肯した。

「……ええ。でも、どうしてその名を知っているのかしら」

「銭湯でアンタらを待ってるんだ。んで、オレがアンタらを迎えに来たってわけ」

「ってことは、永琳たちはとっくの前に辿りついてるってわけか。こりゃ遅刻だな」

優雅な少女の魔方陣が消え、銀の髪の少女も炎の翼を消して着地する。

銀の髪の少女はそのまま歩み、水織の姿をまじまじと見つめるとやがて口を開いた。

「で、お前は？」

「秋の湯の水織。草津水織って言うんだ。アンタらの名前は？」

ふじわらのもこう
「藤原妹紅。妹紅で構わん」

ほづらいさんかくや
「蓬萊山輝夜。待たせてしまつて悪かったわね。この馬鹿が喧嘩吹
つ掛けるもんだからつい」

「ああ？ 先に挑発してきたのはてめえだろうが」

「さあ、どうだったかしらね」

「こんの……！」

「お、おいおい！ 頼むから銭湯で喧嘩は勘弁してくれよな」

弾幕勝負で崩壊する秋の湯とか洒落にならない。

一抹の不安を感じつつ、背後で口論を続ける二人に水織は心の中
で深いため息をついた。

第十九話 月夜に不死鳥（後書き）

お気に入りユーザー登録、40人になりました。

登録してくださった方、そしていつも読んでくれる読者の皆様、ありがとうございます。

次回更新は11月21日予定です。

では、また次回。

第二十話 ボイラー室の隠し機能

どうにか妹紅と輝夜を秋の湯に連れてくることに成功し、水織は一人ボイラー室でパイプ椅子に体重を預けていた。

機械油のようなやや鼻にツンとくる匂いが若干気になるが今となつては水織の作業場。

といつてもそこまで複雑な作業をするわけではないのだが、秋の湯のお湯の温度を管理する大切な場所であることに変わりはないので蔑ろにすることは出来ない。ないがし

「ま、スイッチとレバーとバルブしか触らないんだけどさ」

ちなみにこのボイラー室は男湯と女湯の間の地下にあたる。

銭湯とは公共の施設であるが故、一度に大勢の人間が利用すると若干の温度の変化が多々起こり得る。

今は鬼の秘湯のお陰でそこまで激しい温度変化はないわけだが、それでも時々水織が機械を操作して温度調整を図っているのだ。

温度計を見て、既定の温度に達していることを確認すると水織は傍に置いてあった水筒からお茶を飲む。機械が作動している間は当然この部屋も温度が上昇するので必需品となってくる。

中身を飲み干し一息つくと、立ち上がったのもう一度計器類を一つずつ見直していく。特に異常は見当たらない。

「事務室戻って休憩するかな」

「へえ、これが銭湯ですかあ……」

「……んん？」

突然鈴仙の声がして辺りを見回すが姿は当然見当たらない。

空耳か、と気を取り直してボイラー室から出ようと手をかけた瞬

間までも声が響く。

『広いな。このお風呂泳げそうじゃん！』

『だ、ダメですよ！　ここは公共の場なんだから、そんな迷惑な』

『それい！』

『もう！　少しは大人しくしてくださいよ！』

今度は鈴仙と、それからとやらの声まで聞こえてきた。

ここは地下であるボイラー室なのに何故彼女たちの声が聞こえてくるのだろうか。

気になった水織は出口へ向けていた足を一旦戻して部屋をぐるりと見回し、やがて部屋の隅にある換気ダクトに気がついた。

「……ここか」

どうやら彼女たちの声はここから漏れているらしい。

しかしこれではお客様のプライバシーが守られないではないか。

さつさととり相談して直してもらわないと。そして今度こそ水織がボイラー室を出ようとして、再び誰かの声が聞こえてくる。

『それにしてもさ、お師匠様の胸っておっきいよねえ……』

「うおおおおおおおおッ!？」

それは恐らくてめの何気ない呟き、しかし水織にとっては聞き捨てならない台詞。

今まさに退出しようとしていた扉からバク転で二度三度跳ね回り、一気にダクトまで引き返して聞き耳を^{そはだ}敬てる。

『え、ええ？　な、何ですか藪から棒に』

『いやね、私も一度でいいからそんなダイヤモンドボディになりた

いなあって思つて』

『別に、胸だけなら優曇華だつて大きいじゃない』

『な、何で私を話の引き合いに出すんですかッ』

頭上で盛り上がる彼女たちの話に水織の全身がダクトの前で釘付けになる。盗み聞きとは覗きとほぼ同等に背徳的な行為。しかしこれはこれである意味、覗きより刺激的である。

ええい、話の続きはまだか。是非ともあの美女のスリーサイズは知つておきたい。

『おゝおゝ、今日はまた珍客がいるじゃねえか』

『あ、魔理沙に霊夢だ』

ダクト越しに聞こえる威勢のいい魔理沙の声。それとどうやら霊夢も一緒にらしい。

『どうしてアンタらがここにいるのよ。それに、アイツらまで』

『しかも何やってんだアイツら。お互いに顔真つ赤にしてよ』

『我慢比べ。ここじゃ弾幕勝負出来ないから我慢比べするつてさ』

『普通にのんびり浸かってりゃいいじゃねえか……うっと、今日もちと熱いな』

『これぐらいが普通でしょ。我慢しなさい』

『子供じゃないんだからそれぐらいわかつてるぜ。はあ……極楽極楽』

ジャブんと、それから浴槽からお湯が溢れる音が続け様に聞こえてくる。

一般的に見れば美少女大集合、というわけになるのだが生憎水織はお師匠様以外の雑兵に興味はない。

「さ、さっきの話はまだか!? まさか中断とか言わないよな……」

ダクトにべったりと頬をつけるようにして全神経を耳に集中させる。やがて話し声が再び聞こえ始めた。

『で、アンタたちは今何の話してたのよ』

『お師匠様の胸はおっきいなーって話』

『……』

……? この微妙な沈黙は何だ?

『あ、ゴメン』

『そ、そんなもん無くてもいいでしょう。くっだらないわね』

『でも今胸を見てぶわッぷ!?』

何か言いかけていたてゐの音が突然水飛沫の音にかき消される。

というか、霊夢の話とかどうでもいいんでさっさとお師匠様の話をお願いします。

『私はそんなの気にしてないわよ。魔理沙だって大したことないし』

『失礼な奴だな。このスレンダーなスタイルを見て何とも思わないのか』

『物は言いようねえ……』

『あ、もしかして妬いてがばあッ!?』

魔理沙の声がまるで魚雷でも爆発したかのような凄まじい音に巻き込まれたのだが大丈夫だろうか。

『だいたい胸なんて飾りでしょ。脂肪の塊でしょ。そんなもんでか

くたって邪魔なだけじゃない』

む、貧乳はステータスとでも言いたいのか霊夢。それは間違いだ、大いに間違っている。

『まあ、無い物ねだつてもしょうがねえよなあ……くく』

『魔理沙、後で覚えてなさいよ』

『おー、怖い怖い』

それからしばらくは何の変哲のない世間話に切り替わってしまい、水織としては肩透かしを喰らったような中途半端な心持だった。とはいえ、まさか換気ダクトがこのような素晴らしい仕事をしてくれると思わなかった。

地味で少々退屈な作業場であつたが、この発見のお陰でしばらくは退屈しそうにない。っていうか、これで退屈になるヤツ絶対男じゃないだろ。

『さて、そろそろ出ようかしら。長湯は体に悪いわ』

『えー？』

『なん……だと……！？』

まだ入浴して三十分と経っていない。男ならともかくとして、女性をもっと長く入っているものではないのか？ 少なくとも姉は最低でも一時間近く入っていたのだが。

しかし、彼女の言うとおり銭湯ほど熱い風呂での長湯がおススメできないのもまた事実。

当たり前だが長い時間入浴していれば当然のぼせる。そしてのぼせたまま入浴を続ければ脱水状態や失神することも起こり得るし、不整脈（動悸や胸の不快感や息苦しさを感ずること）、脳梗塞の恐

れまである。少しでものぼせたかとも思ったら、すぐに上がって冷たい水を飲むなどして体を冷やす処置を取るように。水織との約束だ。

出来上がって間もない秋の湯で死人とか是非とも勘弁していただきたいものである。

で、肝心のスリーサイズがまだなんだけど……

『じゃあ、お先に失礼するわね』

『おう。じゃあな』

『あの二人をちゃんと連れて帰ってちょうだいよ。顔真っ赤にして何時まで続けてるつもりなのよ』

『は、ははは……』

ピタピタと裸足でタイルを踏みしめる音が遠ざかっていき、水織が期待していたスリーサイズは結局聞けずじまいに終わってしまった。

だが少なくともお師匠様が巨乳であることは判明した。大いなる一歩である。

さて、と三度目の正直で今度こそボイラー室を出ようとした時、不意に魔理沙がこんなことを言いだした。

『なあ霊夢、サウナって知ってるか？』

『サウナ？』

『サウナだって……？』

サウナなら水織も知っている。というか実家の旅館にも完備している。

サウナとは風呂の一種であり、非常に温度の高い部屋で汗をかく蒸し風呂のことだ。

フィンランド発祥のサウナの歴史は千年以上もあり、現代においては様々な形式のサウナが派生して出来上がっている。

焼けた石に水をかけその蒸気で体感温度を上昇させる発祥の地オリジナルのフィンランドサウナ。スチームバスやミストサウナ、それから塩サウナなんてものもある。塩サウナは文字通り体の表面に塩を塗り付け体をマッサージしつつ皮膚の表面の汚れを落としたりする美容目的のサウナ。ちなみに、塩サウナは怪我をしている時は断じて使用しないように。軽く地獄を見る。もっとも、塩の脱水効果でどのみち体は痛くなるのだが。

『本で読んだんだけどさ、体に良いらしいぜ。どうせならそういう機能も追加してくれればいいのにな』

『そんなこと私に言われてもね』

「サウナ……か」

今の秋の湯は鬼の秘湯の効果もあって客入りはいいが、いくら神様の銭湯とはいえそのうち廃れてしまう可能性はある。

ここは新施設を拡張し、もっとアピールするべきかもしれない。

物珍しさの効果もあって売り上げが増加したり、もしかしたら姉妹が欲している信仰とやらもさらに増加するかもしれない。

となると、にとりや姉妹にも一声かけなくてはいけない。

「……んじゃ、さっそく事務室へ戻るとするか」

このまま話を聞いていてもいいのだが興味が無い。水織は適当に後片付けを済ませると、重いボイラー室のドアを開けて出て行った。

・
・
・

事務室の戸を開けて入るといきなり紫と目が合っ
て水織は一瞬たじろいだ。

「あら、こんばんは水織君」

「こ、こんばんは…… ってどうして紫さんがここに？」

紫紺の瞳が水織を一瞥し、そして優雅に微笑む。
楽しそうに、ではなく、愉しそうに。

「貴方、能力に目覚めたでしょう？ だから使い方を教えてあげよう
と思ってね」

「え、オレの能力のこと何で知ってるんですか？」

「美女は何でも知ってるものよ。ふふ」

「……なるほど」

美人なら仕方ない。

しかし、突然目覚めた能力に要領を得ていない水織にとってはあ
りがたい申し出だった。ここは紫の言葉に甘えても罰は当たらない
だろう。水織は快諾し首肯する。

「それじゃ閉店後に、外で待ってるわ」

それだけ残し、紫は片手を薙いで裂け目を作り何処へと姿を消し
てしまった。

第二十話 ボイラー室の隠し機能（後書き）

今まで書いたお話の中でお色気要素が一番多いような気が……w
これ、全キヤラ書いてえかもw
水織君の能力の名前とか詳細は次話かな。

次回更新予定日は11月24日。
ただこの日だけ一時間遅れて10時となります。
では、待て次回。

第二十一話 埋めたい過去

本日の営業を終え暖簾を片付けると、水織は紫が待つ人里外の平野へと向かっていた。

能力の特訓なので里の中では迷惑がかかる可能性を考慮してのとだろう。さすが紫さん。

里の門を抜けてしばらく歩いていくと視界の先に紫の後ろ姿を見つけた。

「紫さん、お待ちせしました」

水織の姿を見るなり紫が小さく微笑む。

「それじゃ早速始めましょうか」

次の瞬間には、紫の足元から円形の巨大な魔方陣が広がり平野一帯を瞬く間に包みこんでしまった。足元で光る薄紫色の紋様が何処となく怪しい雰囲気を出している。

「これは？」

「結界よ。今は夜だし外だし、貴方の安全を考えて結界を張るのよ」

夜は妖怪の時間。水織と紫がこんな平野のど真ん中で二人っきりで特訓していれば自然と妖怪が集まってくるだろう。どうやらこの結界は外敵から身を守る防御的な結界らしい。外側へ目をやると、半透明の壁がバチバチと電気のような音を立てていた。

「だけど、それなら里の中で結界張ったらいんじゃないんですか？」

「それでもいいけど、煩く言う人もいるのよ」
「……？」

結界を張れば安全なのに、煩く言う人がいる？ 臆病な人間ということだろうか。水織がぼんやり考え事をしているといつの間にか紫が目の前まで近づいていた。

「う、うわッ」

「まずは貴方の能力を調べるから、目を閉じなさい」
「め、めめめめめ目、ですか!？」

息も掛かりそうなほどの至近距離で紫は目を瞑れと仰る。水織は今すぐにでも火だるまになりそうなほど赤く染まり、恐る恐る目を閉じた。

「まだ半分開いてるわよ」
「は、はい!」

観念して完全に目を瞑る。

見えない視界の向こうで、紫は一体何をするつもりなのだろうか。衣擦れの音、甘い香水の香り、頬にそよぐ風。

普段なら気にならないほんの些細なことが、今は大袈裟なまでに強く意識してしまう。

紫は今何をしているのだろうか。しかし能力を調べるためとはいえ何故目を瞑らなくてはいけないのだろうか。もしかして、実は水織にキスとかしてくれるんじゃないだろうか。いやだって、夜で、二人つきりで目の前で、しかも目を瞑れと言ってきたのだ。これはもう能力云々とかじゃなくてもっとこう、ムフフな展開期待していいんじゃないのか。って、キスの後って何をするつもりなんだ？もしかして、この後何処か人気のない場所に連れていかれちゃった

りしてもっと凄いコトが待ってるんじゃない――

「はい、終わりよ」

「……あ、あれ」

目を開き、そして自分の身を確かめる。

着慣れたジャンパーにアンダーウェア。背が伸びることもなければ縮むこともなく至って健康体。

とどのつまり、何も変わっていなかった。

「あの、紫さん」

「何かしら」

「キスはないんですか？」

「……こほん。一応、能力は調べさせてもらったわ。それで、貴方の能力なんだけど」

「ごくり、と唾を飲み込み水織は紫の言葉を待つ。

自分の持っている能力の詳細がこれでようやく判明する。水織が手に入れたこの能力は、いったいどんな能力なのか。

「貴方の能力ね、『穴を掘る程度の能力』ですって」

「……は？」

水織の目が点になる。それとは反対に紫はクスクスと微笑を漏らしていた。

「そのまんまの能力ね。スコップがまさにお似合いな感じで」

「い、いやいやいや！ あの、冗談ですよ？ もっとこう、大地を裂く、とか別の言い方じゃない」

「いいえ。貴方の能力は『穴を掘る程度の能力』で合ってるわよ」

「え、ええ……？」

予想していたよりも遥かにシヨボい名前の能力に水織が肩を落とす。

……冷静に考えてみれば地霊殿では大穴を空けていたのだし、輝夜と妹紅を止める時にも大岩を放り投げるために地面を掘ったのだからとりあえず頷ける。頷けるには頷けるのだが、どうも納得いかないというか何と云うか。

「もつとこう、カッコいい能力を想像してたんですけど」

「ふふふ。それにしても穴を掘る能力だなんてずいぶん変わってるわね。そんな能力持つてるのを見るの貴方が初めてだわ」

「……光荣です」

投げやりな水織に紫紺の瞳がスツと細まる。

水織の心を見透かすような鋭い眼差し。

「もしかして、穴にでも埋めてしまいたいような過去でもあるのかしら？」

「それは……」

紫の言葉に今朝の夢が頭を過ぎる。

確かに、女の子を見捨てて逃げ出したあの日の記憶は埋めてしまえるものなら埋めてしまいたいと思う。だけどそれとこれとは話が別でだ。関係ない。関係ないはずなんだ。

「ま、いいでしょ。早速特訓を始めましょうよ」

「……はい」

それから紫の指示に従って術符の使い方、光弾や弾幕の作り方を

教わったのだが、どれも集中することが出来ずにほとんど失敗ばかり続けてしまった。

理由はわからない。自分ではちゃんと指示を聞きその通りに実行しているのだが、思うようにいかないし何度やっても形にならない。そして水織が失敗するたび脳裏を過ぎるあの夢。

知らず知らずのうちに水織の頭の中はあの日の出来事で埋め尽くされていた。

「……水織君」

「ま、まだ慣れてないだけですよ！　ちょ、ちよつとコツさえ掴めばこれぐらい」

夜の平野で響く水織の声とスコップが鳴らす金属音。

しかし虚しく反響するだけで何も起こらず、水織は呆然と立ち尽くす。

「……ッ」

奥歯を噛みしめスコップを強く、血が滲みそうなほどの力で握りしめる。

あの日の出来事が頭から離れないせいで、集中も何もなかった。忘れたはずだった。だけど、忘れられなかった。

「どうしたの。いつもの元気がないわよ」

紫が怪訝そうな表情で見つめてくる。

水織は無言でスコップを構え我武者羅に振り回そうとして——途中で手を止めた。

「あの……紫さん」

「何？　もしかして体調が悪いのかしら？　だっ　たら少し休憩して」
「いや、その……」

齒切れの悪い水織の様子に紫が首を傾げる。

水織はあれから一度も紫と目を合わそうとせず顔を背けたままだった。

やがてスコップを地面に突き刺し紫に背を向け歩き出して行く。

「水織君、何処行くの」

「その……　ちょっとだけ、一人にしてください」

結界を抜け小さくなっていく水織の背中を見つめ紫は独りごちた。

「……　案外ナイーブな子なのかもしれないわね。　まあ、あの歳じゃ無理もないか」

結界を出て行ってしまった水織も気になるが、声をかけても恐らく意味はないだろう。

かといって一人で出歩かせるのも不安なため、紫はすき間を通じて後を追うことにした。

・
・
・

結界から抜け出すと、気が付くと水織は走っていた。

夜の平野を無我夢中で全力疾走で走り続ける。

それはまるであの時と同じ、女の子を見捨てて逃げる時と同じだった。

「……はあッ、はあッ」

胸の底からこみ上げてくる不快感が水織を包み、やがて不快感は全身にまで広がる。

走り続けていた足が止まり、どうにか近くの木の根元までは歩けたがそこでへたり込んでしまった。

「……どうしちゃったんだろ、オレ」

もうずっと遠い昔の出来事なのに、もうとくに忘れていたはずなのに。

それはまるで罪の十字架のように水織の背に重くのしかかっていた。逃げた自分の罰、自分の罪。何も出来なかった自分が悔しいし、逃げた自分も悔しい。

どうしてあの時助けなかったのだろう。ほんの一握りの勇気を振り絞ればよかったのに。

どうしようもない後悔だけが水織を苛める。水織の心を縛りつけてくる。しかしこんな気持ち、今更どうしろと言っただろうか。

「せっかく紫さんが能力の使い方を教えてくれるのに、なんだっけ急にこんな……」

ガサガサッ！

「——ッ!？」

水織のすぐ背後の草むらがうごめき音を立てる。水織は咄嗟に振り向き身構え、スコップを置いてきてしまったことを思い出した。

「妖怪……か？」

能力こそ身についてはいるものの、丸腰で勝てるわけがない。足音を立てないようゆっくりと後退りして距離を取ろうとして、手に何か木の枝のようなものが触れてしまった。ハッと意識した時既に遅く、パキ、と乾いた音を響かせ木の枝を折ってしまった。草むらが激しく揺れ動く。こちらに気づかれてしまったか。水織が握り拳だけ作って構え、そして草むらがいつそう激しく揺れ動いて何者かが飛び出す。

「う、うわぁッ!？」

月明かりに照らされ、何者かの姿が照らされる。紅葉のように鮮やかなスカートに、頭には紅葉と同じ形の髪飾り。

「あ、水織君だったの？」

「……し、静葉かぁ。脅かすなよ」

「えへへ。ゴメンね」

草むらから飛び出してきたのは静葉だった。しかし何故草むらの中にいたのか、水織が訊ねると頭に葉っぱをつけたまま静葉が答える。

「んつと、何となく心配だったからかな」

「そつか……悪い」

「どうして謝るの？」

「いや、何となく……」

「……？」

静葉が水織の顔を覗きこむようにして顔を近づけると、紫の時と同じく水織は顔を背けてしまった。

「どうしたの水織君、元気無いね」

「そ、そんなことねえよ。ちよっと一人になりたくてさ」

「もしかして、私邪魔かな？」

「えっと……」

若干返答に困る静葉の言葉に、水織はどう答えたものかと悩む。別に邪魔ではないし、かといって一緒にいてほしいというほどでもないし。

水織が振り返ると静葉の瞳がまっすぐこちらを見据えていた。間近で見るオレンジ色の瞳は思わずドキッとするほど綺麗で、水織は自分の頬が少し熱くなるのがわかった。よく見れば、いや見なくても静葉がかなり可愛らしい容姿なのは初対面の時から知っているのだが、ここまで至近距離で見るとちよっとドキドキして、そのドキドキが少し懐かしいような気がした。

「……似てるんだよな」

「え？」

静葉はあの時の女の子によく似ている気がする。

髪とか仕草とかは違うのだが、何となくあの子と同じ雰囲気が漂っている。しかし、彼女は幻想郷の住人であるので当然別人だ。

「水織君、何かあったの？ 私でよければ協力するよ」

「協力って、そんな大袈裟な。……でもまあ、気持ち嬉しいよ。ありがとな」

不意に、水織は静葉にあの子のことを話してみようかと思った。別にその行為に深い意味があるわけではなく、ただ本当に気まぐれなのだが彼女になら別に話してもいいんじゃないかと思った。

最後の最後までどうしようかと悩んだ末、水織が口を開く。

「……ずっと前、オレがまだ小さい時の話に、初めて友達が出来た時の話なんだけど」

あの日の出来事を、親以外の他人に話したのは今日が初めてだった。

理由はわからない。けど、何となく話しておきたかった。
静葉が興味津津といった様子で水織の言葉を待っている。

「その子さ、不思議な力を持ってる子だったんだ」

あの日の出来事の少し前、初めて出会った時を思い出しながら水織は語りだした。

第二十一話 埋めたい過去（後書き）

バイトが少し長引いて調整に時間が取れなかった……orz
とにもかくにも第二十一話です。

そして次回は水織君の夢にも出てきた過去のお話が始まります。

次話は三日後27日予定。

では、待て次回。

第二十二話 秘密の友達

遡ること九年前、それは水織が初めての入学式を終えてちょうど半年を過ぎたころ。

水織はこの時、現在の実家である暁の湯に越して来た。

元々は遠く離れた都心部に両親と暮らしていたのだが、両親の仕事の都合と実家の経営事情とが重なりこの旅館に引っ越すこととなった。

田舎で何もないことは水織も以前から知っていて、せっかく慣れ親しんだ学校の友達と別れることにもなるため当初は引っ越しに反対だった。しかしそんな水織の我儘が通るわけもなく、簡単なお別れ会の後に水織はこの暁の湯へと辿りつく。

「……つまんない」

両親は祖母と旅館経営の話をしていて相手にしてくれないし、かといって姉の場合はガサツで乱暴で凶暴で一緒に遊ぶのは御免被りたい。

苦し紛れに何度も読み返した漫画を閉じると、自室として宛がわれた部屋の真ん中で大きく大の字になって寝転がった。見上げて、質素な天井が飛び込んでくるだけで、ただそれだけ。

古ぼけたカビのような匂いが微かに漂うこの部屋でこれから永劫暮らすのかと思うと水織は少しゾッとするような思いだった。テレビはあるにはあるのだが何故か白黒でしか映らないし、ゲームなんて娯楽に使えるようなものもない。とどのつまり、何もない。結局何かするでもなく水織はしばらくぼんやりと部屋で寝ることにして目を閉じた。

「水織ちゃん、お昼寝かい？」

と思つたのだが、両親との話が終わつたのか部屋に祖母が来たので目を開けた。上下逆さまの世界で祖母がこちらを見ている。水織が姿勢を正すと、何となしに祖母が窓の外の方を指差した。

「すぐ近くに大きな神社があるわよ。暇ならちよつと探検にでも行つてきたらどう？」

「それなら知ってるよ。何回もお爺ちゃんが行つたんだ」

「せっかくだし、お姉ちゃんと一緒に遊んできたら？　良い天気なのにもつたないわ」

祖母の言つとおり外は雲一つない秋晴れで、山間という立地も相まって空気は澄んでいて綺麗だ。

水織はあまり気乗りしなかったものの、このままここにいても退屈なことに変わりないと思い出かけることに決めた。

「お姉ちゃんはどこ？」

「さつき一階のロビーにいたわよ。出かけるなら気をつけて行つてらっしゃいね」

「うん」

一階のロビーには絶対に近づかないと心に留めておく。

簡単な身支度をしてお気に入りのジャンパーを羽織ると水織は部屋を飛び出し、旅館の裏口からこっそり抜け出すようにして出て行った。

旅館正面に通る道を抜けてまっすぐ東へ。誰も掃除をしていないような、半ば荒れ放題の山道を上っていくとそこにちよこんと小さな神社がある。

通称『名も亡き神社』。

朱色の鳥居が立ち並ぶその様は明かるいこの時間に見てもやや不

気味だ。

水織が鳥居をくぐっていくと、寂れ果てた小さな社が見えてきた。

「……でも、お爺ちゃんと何度も来てるんだし別に何もないんだよなあ」

ここまで来て何もしないのもつまらないし、落ち葉でも拾って帰ろうか。

社すぐ横の蔵の近くには大きなイチヨウの木やモミジの木々が並んでいる場所まで歩いて、水織はそつと足を止めた。

「あれ……？」

イチヨウの木の下に、見知らぬ少女がぼーっと枝を見上げていた。後ろ姿だったので顔はわからないが、肩ほどまで下ろした栗色の髪がとても綺麗だった。

水織の気配に気づかないのか、少女は依然として木々を見上げたまま呆けている。

声をかけるべきかかけないべきかと悩んでいると、先に少女が水織の方を振り向いた。

「あ……！」

見知らぬ人間の存在に驚いているのか、黒く澄んだ瞳はまん丸く見開かれ水織を呆然と見つめている。

「えつと……あの、私は……その」

あたふたと忙しく両手を動かし取り乱しながら、少女が何か言おうと口をパクパクさせるが、上手く言葉にならない。そんな姿が

意外にも間抜けで、水織は思わず吹きだしてしまった。

「ぷッ、あははは」

「あの……？」

「あ、ゴメンゴメン。可笑しくって笑っちゃって」

「可笑し……い？ あの、恐いとか、そうは思わないんですか？」

「恐い？ 何でさ」

「え、だって私は……」

口ごもる少女を水織は今一度見つめる。

栗色の髪に新月のように黒く澄んだ綺麗な瞳。

着物とスカートを足して割ったような不思議な格好の少女は、自分と同じ年の少女とは思えなかった。

見た目は確かに水織と同じ小学生程度なのだが……何と云うか、雰囲気違っていった。

上手く口で言えないのだが、何処か普通の人と違う雰囲気を彼女は纏っているような気がした。

「もしかしてキミ、ここの神社の子？」

「え？ あ……はい。まあ、一応」

「……？」

視線を泳がせながら答える少女に、水織はちよつと変だなと思っただけあまり深く考えなかった。

少し困ったように顔を視線を反らす少女の横顔が、今まで見た誰よりも綺麗で少しドギマギしていたというのもあるが、単純に込み入った話が面倒だとか、彼女への興味が勝ったというのもある。

「あのさ、よかったら一緒に遊ばない？」

「ふえッ？ わ、私と……ですか？」

「もちろん。他に誰がいるのさ。ここに越して来たばかりで退屈なんだ。……あ、神社のお仕事か何かで忙しいなら別にいいんだけど」

巫女さんなんて初めて見たもんだから、ほんの少し遠慮がちに接してみる。

少女はほんの少しポカンとした表情を浮かべて、それから小さく首を縦に振った。

「わ、私なんかでよければ喜んで」

「本当？ えへへ、ありがとう。オレ水織って言っただ。キミは何て呼べばいい？」

「え？ えっと……うんと……」

名前を名乗るだけなのに、どうしてこう何度も口ごもるのか。よっぽどの恥ずかしがり屋なのか、それともただ水織を警戒しているだけなのか。後者であれば、少しガツカリである。

「じゃあ……そうだ千秋、千秋ちゃんとも呼んでください。私も、水織君って呼ばせてもらいますから」

「うん。……それであの、一ついい？」

「は、はい。何でしょうか」

水織は苦笑しながら言う。

「敬語、いらないよ。オレと遊ぶ時は敬語禁止ね」

「え、ええ！？ わ、わかりまし……わ、わかった、です」

「です付いちゃってるじゃん」

「す、すいません……」

「ほらまた。あっはは、変わった子だなあ」

何時まで経つてもなくならない敬語を指摘された少女は、顔を紅葉と同じぐらい鮮やかに染めて俯いてしまった。

これが、彼女との最初の出会い。

それから水織と彼女は、まるで雪解けのようにゆっくりと、少しずつお互いの距離を縮めていった。

神社の境内で走り回ったり、落ち葉や木の実を集めたり、時々銭湯のお菓子を持ち歩いて食べたり。

越して来たばかりの水織にとって地元で出来た最初の友達で、ほとんど毎日のように神社に通った。

ある日、水織は神社で遊ぶのにも飽きてきて彼女を家に招待しようとして声をかけたのだが。

「あの、それはダメなんです」

「え？ どうして？」

「その……私はここから出ちゃいけないんです。それと、水織君」「何？」

口元で指を立て、少女は神妙な面持ちでこう続けた。

「私のこと、他の人には言っちゃいけません。私と水織君だけの秘密、ということにしてください」

「ええ？ なんでさ？」

「すみません。でも、これだけはお願ひなんです」

「……わ、わかった」

剣幕という程でもないが少女の頑なな表情に水織は頷くことしか出来なかった。……しかし、何故誰にも話してはいけないのだろうか。

「その代わり、もしも黙っていてくれるなら、ちょっとした手品を見せてあげますよ」

「手品？」

少女がくるりと踵を返し、一枚の葉を指でちゃんと摘まんでみせた。

まだ紅葉しきれていない青いモミジの葉だった。

「えっと……それ、普通の葉っぱだね」

「はい。でも、私がこうやって手で翳すと……ホラ」

千秋がそつと手を翳すと、摘まんでいた葉が一瞬にして真っ赤に染まった。

手を翳ただけで一瞬で葉が紅葉してしまった。こんな世にも珍しい現象を、水織はまじまじと見つめて。

「……もしかして、一瞬ですり替えた？」

水織の夢も希望の欠片もない言葉に、千秋の肩がぐんとずり落ちる。

「ち、違います！ も、もう一回よく見てください！ ほら、この葉っぱをこうやって……はい！」

先ほどと同じように、手にしていた葉っぱが一瞬で紅に染まる。水織は何度も目を瞬いて葉っぱを注視してみたが、どう見てもそこらじゅうに落ちている落ち葉とすり替えたようにしか見えなかった。

「ははは。そんなんじゃ手品って言わないよ。手品って言うのは種も仕掛けもないものでしょ？」

「種も仕掛けもありませんよ。じゃあ、試しに水織君が一枚葉っぱを持ってきてくださいよ」

「はいはい。いと。んじゃ……これとか」

水織が手にしたのはまだ色付いていない緑色のイチヨウの葉。

千秋は造作もないと言わんばかりに（そんなに無い）胸を張り同じように手で翳してみせる。

緑色のイチヨウはさっきの落ち葉と同じく千秋の手の中で鮮やかな黄色に染まっていた。

「す、すこ」

「うふふ。どうですか、驚きましたか？」

得意気な千秋の様子を見て、水織は苦笑いを浮かべた。

「う、ううんと……何か地味な手品だね」

グサツ！ と何かが刺さる鋭い音が聞こえたようなそうでないよ
うな。

千秋はみるみるうちに青ざめ、涙を浮かべ、そのまま崩しに
その場でへたりと頂垂れてしまった。^{うなだ}

「……いいんです。地味なのは重々承知してるんです。どうせ私の
力なんてそんなものです……う、うう……」

「わ、わー！？ な、何も泣くことないじゃんか！ えと、ほら、
その……凄かったよ！ ビックリしたよ！」

千秋を泣かせまいと水織は必死のフオロー。

出会った間もない女の子を泣かしてしまったら天国のお爺ちゃんに怒られてしまう。

「凄い！　とか、天才！　とか、思いつく限りの世辞を連発していくうちに、千秋の体がゆっくりと起き上がり、やがて満面の笑みになって戻ってきた。」

「ほ、ホントに私凄いですか？　水織君驚きましたか？　なら、嬉しいです！」

「う、うん」

まさかこの歳で気を遣うだなんて、普通の小学生なら考えもしないだろう。

と、水織が心の隅でため息をついていると、千秋が突然駆け出した。

「あれ？　千秋ちゃん、どうしたの？」

「こっち、来てください！　もつと凄いもの、見せてあげますよ！」

いつの間にか声だけしか聞こえてなくて、水織は少し慌てながら駆け出す。

すると千秋は別の木の根元で水織が来るのを待っていた。

それはまだほとんど緑色の葉ばかりの大きなモミジの木だった。

「もつと凄いことって、何？」

「ふふ、水織君だけの特別サービスですッ」

そう言っただけ千秋はくるとその場で回り、モミジの木正面で神様にでも祈るように両手をギュッと握りしめ瞳を閉じる。

何をしているのか気になった水織が千秋の方に回り込もうとした瞬間、突然神社に轟々と唸りを上げるような激しい風が吹き荒れた。

「う、うわ！？　ち、千秋ちゃん！」

一瞬でも気を抜いたらあつという間に吹き飛ばされてしまいそうな嵐にも似た暴風。

今にも水織は吹き飛ばされそうなのに、風が吹き荒れる中で千秋は黙々と祈りを捧げている。

このままじゃ千秋も危ない。吹き飛ばされなかったとしても、木々の枝が折れて飛んでくる危険性だってある。水織は荒れ狂う風の中でどうにか手を伸ばし、千秋の方へと近づけていく。

そして水織の手が肩に触れたのと同時に、ピタリと風が収まった。

「……はあッ、ビックリした。千秋ちゃん、大丈夫？」

「はい、大丈夫ですよ。それより、どうですか？」

あれほど激しい風が吹き荒れていたというのに、千秋は髪の毛一本も乱れていない。

どういふことなのかと疑問に思う水織に、千秋は不意にこんなことを聞いてきた。

「どうって……何が？」

「じゃあ……」

ちよんちよん、と千秋が指で上を示す。

指示の通りに水織が首を斜めに上げて——そして言葉を失った。

「な……ッ！」

水織の頭上に広がる、深紅の紅葉。

今さっき見ていた時はほぼ全てが緑色のままだったというのに、

視界全てが紅に染まっていた。

啞然とした水織が千秋の方を見つめる。

「うふふ。これが私の本気です」

水織はただただ呆然と少女を見つめ、少女は無邪気な笑みを浮かべていた。

第二十二話 秘密の友達（後書き）

水織君の過去話。

あと1話2話程度続く予定。

一応今作のキーポイントであり、オリジナル設定が最も濃い部分になります。

それと、少し遅れてすみません；

最後の一文がどうも納得いかなかったもので調整に時間が掛かってしまいました。

今も若干引っ掛かっております……；

そして次回は30日更新予定。

では、待て次回。

第二十三話 解れた絆

旅館から望む赤月山が深紅に染まり、千秋と出会ってからあつという間に数週間が過ぎていった。

凜と澄んだ空気が包む神社の境内。

ジャンパーのポケットに冷えた両手をつっ込みながら水織は千秋を待っていた。

「水織君」

「あ、千秋ちゃん！」

着物とスカートを足して割った格好の千秋が音も無く水織の背後から現れる。

水織は一瞬ドキツとしたが、見慣れた栗色の髪を見つけると自然と笑みがこぼれた。

「こんにちは、水織君」

「こ、こんにちは！ えへへ」

あの手品を見せられて以来、水織はすっかり千秋の虜となっていた。

手を翳せば落ち葉は皆赤く染まり、風を起こせば木々が一瞬で紅になる。

そんな常人離れた力を目の当たりにすれば普通の人なら拝みひれ伏すことだろう。

しかし水織は純粋に千秋を尊敬し、憧れ、焦がれていた。

千秋はまさしく不思議な力を持つ女の子。

退屈な日常に飽き飽きしていた水織にとってはこれ以上ない程最高の刺激であり、越して来て最初に出来た友達だったということも

あつて大切な友人だつた。

水織はポケットから小さなお菓子を手に取ると千秋の手の平に乗せた。

「はい千秋ちゃん、今日も家から持ってきたよ」

「わあ、ありがとう！ 水織君の持ってくるお菓子いつも楽しみにしてるんだ」

そう言つて包み紙を剥がして菓子を頬張る姿は何とも微笑ましくて、見ているこつちまで幸せな気持ちになるような気がする。

水織からしてみれば普通のお菓子なのだが、千秋にとっては物珍しいものらしく水織が菓子をくれるまでは一度も食べたことがなかったという。

神社の家だとそういうことに厳しいのだろうか。水織は子供心ながら勝手にそう解釈していた。

菓子を食べ終えた千秋が砂糖のついた指を舐めながら水織に向き直る。

「そうだ、いつもご馳走してばかりでは悪いですし、今日は私が水織君に何か御馳走しますよ」

「え？ 千秋ちゃんがご馳走？ いいの？」

「はい。じゃあ早速落ち葉を集めましょうか」

「……落ち葉？」

言うが否や、千秋は蔵に立て掛けてあつた簞で辺りの落ち葉をせっせと集めていく。

その速さは相当なもので、水織が何か手伝おうと手を伸ばした時には既に落ち葉を集め終わっていて、次いで紙袋と古新聞を取り出す。

何を作るのか見当がついた水織は慌てて千秋に声をかける。

「だ、ダメだよ。子供だけで焼き芋なんてさ」

「あれ？ 焼き芋ってばれちゃってました？ でも美味しいですよね焼き芋」

「うん、そりゃオレも好きだけど…… って違う違う！ 子供だけで焚火とかやつちゃダメだって！ 危ないよ」

「大丈夫大丈夫。心配しないでくださいな」

水織の制止も聞かず、千秋は落ち葉を山積みくろにすると新聞紙に包んださつまいもを放り込み火を点ける。

乾いた空気の中、落ち葉の山はあっという間に勢いを増して燃え上がる。

マツチの小さな炎はまたたく間に大きな炎となつて、弾けた火の粉が水織の鼻先をかすめる。

「わっちち。千秋ちゃん危ないって。こんなとこ誰かに見られたら怒られちゃうよ」

「ふふ。水織君は意外と臆病なんですね」

「そ、そうじゃなくてさ……」

マイペース過ぎる千秋にやきもきしつつ、何度も何度も周囲を確かめる水織。

今のところこの神社には水織たちの他には誰もいないのだが、焚火の黒い煙がどんどん上つていくことが心に引つ掛かった。

これじゃ神社で焚火してますよとアピールしているのと同じだ。

「はい、出来上がりましたよ」

そんな水織の不安を他所に、千秋は焚火の中から新聞紙の塊を取り出していく。しかも素手で。水織は火傷してるんじゃないかと心

配して手を取って見たが、白く滑らかな手の平には傷一つついていない。

「もう、心配し過ぎです。私はそんなに弱い女の子じゃありませんよ」

「だ、けどさ……」

心配し過ぎだせいで水織は引きつったような笑みを浮かべて頷いた。

千秋が丁寧に新聞を剥がしていくと、ほんのり焦げ目のついた表面が何とも香ばしい香りを漂わせている。無意識のうちに腹の音がくうと情けなく鳴いた。

「じゃ、私と水織君とで1個ずつですよ」

「うん、ありがとう。でも、まだたくさん入ってるみたいけど……」

「？」

「それは私の分です」

「へ、へえ……」

そんなに食べて大丈夫なのだろうか。

焼き芋っていっぱい食べるとおならが止まらなくなるとかで女の子は嫌ってるんじゃないのか。少なくとも姉はそれが恥ずかしくて人前じゃ食べない。

出来たての焼き芋は輝くような黄金色をしていて、香ばしさと優しい甘みが絶妙で今まで食べた焼き芋の中で間違いなく一番美味しかった。

思わずもう一つ食べようと手を伸ばしたら、既に新聞紙の塊は影も形も見当たらない。

「……もう食べちゃったの？」

「ええ。食欲の秋ですし、私焼き芋大好きですから」

いくら好物でも流石に速過ぎやしないか。

しかもそんなに食べたのならお腹がいっぱいで動きづらいだろ
うはずなのに、千秋は焼き芋食べてご機嫌なのか軽くステップを踏
んでくるりと小さく踊って見せた。

「うふふ。水織君と一緒に菓子食って焼き芋も食べられて、私幸
せです」

「幸せ？ そんなオーバーな」

からかうようにして笑いかけると、千秋は急に真顔になって水織
を見つめ返して来た。

吸い込まれそうな黒の瞳に漂う歳に不相応な色香、水織は思わず
目を丸くして固まってしまう。

「大袈裟ですか？ でも、私は本当に幸せです。こうやってお友達
が出来て、一緒に遊べるってすごく素敵なことだと思いますもの」

「そう……なのかなあ？」

「ふふ。水織君も、もっと大きくなったらわかると思いますよ」

それはまるで、自分が水織よりもずっと大人であるよと誇示して
いるような言い方。

水織はほんの少しムツとしたが、神社の厳しい教えの中で生きて
いる彼女の方が水織よりもずっと大人なのだろう。

「さ、そろそろ遊びませんか？ 今日は何して遊びます？」

「じゃあ、また落ち葉を真っ赤にするやつやってよ！ あれ、すっ
ごく面白いじゃん」

「ふふ。承知しました。でも、水織君だけの秘密ですよ？」

境内の裏手に向かって走り出す千秋の後ろ姿を追いかける。ずっと、千秋とこんな風に一緒に遊べたらいいなと純粹に思っていた。

なのに、あの日水織は……

・
・
・

それから数日後、空は今にも押し掛かってきそうなほど陰鬱で大きな灰色の雲が占めていた。

いつもの時間よりも遅くなってしまった水織は神社に向かって大急ぎで駆けていた。

この日に限って実家の手伝いを強いられたため出かけるのが遅くなってしまった。その侘びと言うのも何だが今日はいつもよりも多く菓子を貰えたため全部ポケットに突っ込んで旅館を飛び出した。

千秋はまた喜んでくれるだろうか。

こんなちやちなお菓子でも、千秋は美味しい美味しいと幸せそうな笑顔を水織に返してくれるのだろうか。

「千秋ちゃ……ん？」

鳥居をくぐり境内まで辿りつくと、冷たい秋風が吹いているだけでそこには誰もいなかった。

いつもなら水織が到着と同時に姿を現すか、千秋が出迎えてくれるはずなのだが千秋の姿は見当たらない。

水織が遅かったせいで機嫌を損ねてしまったのだろうか。……いや、前にも同じように遅れた時があったがその時はちゃんと待っていてくれた。もしかして今日は遊べない日だったのだろうか。

「……やめて！」

境内の裏手から小さな悲鳴が聞こえ水織が振り返る。声は物置として使われている蔵のある場所から聞こえてきた。

水織はなるべく音を立てないよう、しかし素早く向かうと顔だけ覗かせて様子を探った。

「な……！」

蔵の前で、千秋が見知らぬ少年たちに囲まれていた。

見た目は水織や千秋よりも頭一つ分大きな子たちで恐らく学校の上級生だろう。少年たちに囲まれている千秋の様子は不明だが、その声は震え今にも泣き出しそうだった。

少年たちは千秋に向かって何か言葉を浴びせ続けている。語気は荒く、それが暴言だと気づくのに難くない。水織は一瞬飛び出そうと身構え、そして足が動かないことに気づき足元に目をやる。

「……ッ！」

膝頭が揺れ、足が根を張ったかのようにぴたりと動かない。

訳がわからず水織は足を叩くが、叩いた感触がわからなくなるほどに水織の両足は麻痺していていた。

「や、やめ……！」

助けるために叫ぼうとするが今度は喉が思うように言うことを聞いてくれない。

かすれた声だけが虚しく漏れ、しかしその声も風にかき消されてしまっほど小さく弱い。

何度も、何度も水織は叫ぼうとしたが、声にならない。

心の中では必死に叫んでいるのに、どうして声に出ない。そこで水織は自分の体が震えていることに気がついた。

「え……？」

手も、足も、そして心までもが震えている。そしてそれは、圧倒的な恐怖感からだった。

細枝のような自分の腕。千秋と大差ない身長。

対して少年たちは水織よりもずっと大きく、太刀打ちできる自信など皆無。

そんな自分が出ていっても何の役にも立たない。いやむしろ、千秋の前で無様な格好を晒してしまうことになる。

水織が勝てる見込みなど微塵もない。

勝てないという事実も然る事ながら、あろうことか水織は千秋の前で醜態を晒すことの方を強く恐れていた。

無意識のうちに、右足が後方に動く。

進もうとすれば拒むくせに、去ると決まった途端水織の足はすんなりと動いてみせた。

自尊心^{プライド}とでも言えば恰好がつくのだろうか。

子供ながら身勝手な、いや、子供故に身勝手な自尊心。

自分を守ろうとする水織の決断は早かった。

そうだ、逃げよう。自分で助けられないのなら、家まで逃げて誰かに助けを求めればいい。

踵を返し、ここに来た時よりもさらに駆け足で走り出し山道を滑るようにして下っていく。

弱い自分ではどうにもならない。だから誰かに助けを求める。

水織は千秋を助けるためと決めつけながら山道を走った。

本当は違うくせに。

本当は傷付くことを恐れ、我が身可愛さに逃げ出したに過ぎない。

結局、水織は千秋を見捨てたのだ。

大切な友人と我が身の保身を天秤にかけ、自分の指で我が身の方に天秤を傾けた。

涙が、零れる。

そして頬を伝っていた涙が零れるのと、雨が降り出すのが重なり赤月山に大粒の雨が降り出した。

旅館の戸を乱暴に開け放ち、接客をする両親の姿を見つけると構わず大声で叫んだ。

「お母さん！ お父さん！ 助けて！ 友達が、友達が……！」

水織の必死の形相に両親は驚き顔を見合わせていたがすぐに頷き合い、着物姿のまま水織に付き添い傘もささずに駆け出してくれた。山道を抜けて鳥居をくぐったその先、蔵の前には千秋をいじめていた少年たちの姿も、千秋の姿も何もなかった。

第二十三話 解れた絆（後書き）

ふと思ったのですが、東方キャラの両親ってどんな人だったんですかね？

あいや、キャラの元ネタ云々とかでの話ではなく、ただ単純にいるとしたらどんな人なのかなあと唐突に思いました。

……特に深い意味は無いですよ？；

次回更新は12月3日です。

感想やご意見等、いつでもお待ちしております。
では、待て次回。

第二十四話 一日千秋

「それで……その子はどうなったの？」

月明かりに照らされた静葉の横顔が水織を見つめる。

俯き、膝に顔を埋めるようにしながら水織が消え入りそうな声で呟いた。

「……その後は、知らない。父さんと母さんと一緒に神社に来たけど、その時は誰もいなかったんだ」

・
・
・

大急ぎで駆け付けたのに、神社には千秋どころか千秋をいじめていた少年の姿すら見当たらない。

それでも、両親は水織の言葉を信じ神社の周囲を一緒に探してくれたのだが、結局千秋たちの姿は見当たらなかった。訳がわからなかった。確かにこの目で千秋たちの姿を見たというのに、旅館と神社とを往復して戻ってきたら、千秋たちは忽然と姿を消している。

この短い時間に何があったというのだろうか。水織は余計に不安が心に募り気が気でなくなっていた。

しかし後日、水織は移動教室の最中に千秋をいじめていた少年たちを見かけた。案の定、二つ上の上級生だった。

この時ばかりは友人と一緒にだったということもあってすんなりと声をかけられたのだが、少年たちに話を聞くと思いもよらない答えが返ってきた。

「神社？ あんな何にもねえ場所に行くわけないだろ」

「え……？」

その時、少年たちは同じメンバーで公園で遊んでいたという。千秋という少女も知らないの一点張り。水織は何度も何度も訊いたが無駄だった。

おかしい。

放課後になって千秋を探しに出かけたが、神社には人どころか鴉の一匹さえ見当たらない。

「何で……？　だつてここで、千秋ちゃんがアイツらに囲まれて、それで……そうだ」

千秋はこの神社の子だと言っていた。ならば千秋の両親がいるはず。

水織は父にあの神社の神主さんの所在を訊ねると、父は少し困ったように首を傾げた。

「いや……あの神社はずいぶん前に神主さんが亡くなられてからほとんど手つかずの状態だからなあ」

「そ、そんなわけ……！」

父は困惑する水織の頭に手を置き、夢だっただよ、と優しく諭した。

夢？　千秋と一緒に遊んだり、お菓子をあげたりしていたのは、全部夢か幻だった？

「……違う！」

父の腕を振り払い、前も見ずに走り出し姉にぶつかるのも構わずに神社へと疾駆する。
違う。

あれは夢や幻なんかじゃない。

絶対に現実の出来事だ。

千秋が水織をほんの少しからかっているだけで、本当は神社の何処かに隠れているに決まっている。

「千秋ちゃん！」

本殿正面に立ち、名を叫ぶ。声は秋風に吸い込まれ虚しく消えていく。

境内を駆け回り、物置として使われている蔵の中も、本殿下の小さな空洞も全て探し回ったが、千秋の姿は何処にもない。

「なん……で……？」

振り返り社を仰ぐ。

朽ち果てた社が、ただそこに在るだけで――

・
・
・

全てを話し終わると、水織は突然バツと顔をあげて立ち上がった。

「ご、ゴメンな。こんなつまらない話してさ」

微かに水織の声が震えている。しかしそれを見せまいと、水織は静葉に最大限出来る限りの笑顔を作って見せた。

「無駄話ばかりしてちゃいけないな。紫さん待たせてるんだし、早いとこ戻らないと」

衣服に付いた草や土をそそくさと叩いて落とすと、水織はまた闇

の中へと駆けて行ってしまった。

ポツンと残された静葉が、何気なく空を見上げる。

月は中天を過ぎ去り、やがて彼方の空が白み始めている。

「……千秋ちゃん、か」

一体どんな人物なのだろうか。

現世にいながら“能力”を有し、水織と過ごしていたという謎の少女。

果たして本当に、人間だったのだろうか。

もしかしたら、彼女は……

「もしかしたら……もしかするのかも」

彼女は私たちと同じ、神様だったのかもしれない。

しかし不思議なこともあるものだ。

紅葉を自在に操り焼き芋が好物な神様だなんて、まるで私たち双子とそっくりではないか。

・
・
・

「それで、能力の特訓とやらはどうなったの？」

翌朝、事務室の机にべったりと突っ伏す水織に穰子が声をかけた。
げっそりとやせ細った顔に気は無く、息を吹きかけたら今にも死んでしまいそうなほどに見えた。

「めっちゃ怒られて、鬼軍曹並みの特訓受けて、死にそう……」

「あ、あはは……」

「だけどああいう美人に叱られるのも悪くは……ないかも」

「……水織、どうせなら朝風呂浴びてきたら。お湯なら準備してあるから」

「む……サンキュ」

よろよると立ち上がり事務室のドアに手をかけ、不意に水織は振り返って穰子を見る。

「ん？ どうしたの水織？」

「いや、ずいぶんと用意がいいなと思ってさ。それに、オレボイラの動かし方教えたっけ？」

「にとりから軽く聞いておいたのよ。万が一、水織が動けなくなったら大変でしょ」

「そうか」

今度こそ浴場に向かおうとして、再び足を止め振り返る。

穰子が怪訝そうな顔をしてこちらを見返す

「どうかしたの？ お湯冷めちゃうよ」

「……ありがとな、穰子」

疲れのせいでとろんとした水織の優しげな瞳に見つめられ、穰子の頬にカッと朱が刺す。

「は、早く行きなさいってば！ その後はいつものように仕事してもらうんだからね」

事務室から追い出すように水織を押し出し乱暴にドアを閉める。

水織が出ていった後、動悸の激しくなった自分の胸に手を当て深呼吸をする。

「わ、私も帳簿書かないと。えっと、えっと……」

しかし、帳簿は今しがた書きえ終えたばかりであった。

・
・
・

「ッ、はあ……」

真つ白な湯気の立ちこめる浴槽のど真ん中、肺の中の空気をすべ
て吐き出すような勢いで水織が呆けたようにため息をつく。

前回は気分を吹き飛ばすために飛び込んでしまったが、今日はゆ
つたりと肩まで浸かる本来の入浴スタイル。

目の前にはがらんとした浴場。振り返れば妖怪の山に紅葉が
舞い散る風情溢れるペンキ絵。

この広い空間を自分だけが独占するという何とも贅沢な時間。

「……何か、落ち着く」

乳白色の湯が水織の体を優しく包み、特訓や夢で疲弊した水織の
心を癒していく。

体の芯から温まり、ゆらゆらと揺れる湯の中で水織の意識まで揺
らいでいく。

このまま揺られていると、だんだん、ねむ……く……

「水織く〜ん！ 湯加減どうですか〜？」

「……うはわ！？ え？ あ、し、静葉の声？」

何処からともなく響いてきた静葉の声に水織はハッと我に帰る。
危うくそのまま湯船の中に沈むところだった。辺りを見まわしたが、
もちろん静葉の姿は無い。

「ふふふ。今、私は何処にいるでしょうか？」

「え？ えっと……ボイラー室？」

よくよく考えれば、ボイラー室のダクトは浴場に繋がっていて声が聞こえるのだから逆もまた然り。会話が出来ているのは不思議ではない。

「当たり前。ボイラー室って凄いいんだね。そっちの声、ちゃんと聞こえるよ」

「う、うん……す、すごいよな……ははは」

今ボイラー室にいるのが穰子でなくてよかった。

もし穰子にこのことがばれたら、せつかくのボイラー室お楽しみ機能が修正されてしまうところだ。だがそれとは別に、静葉にボイラー室を任せて大丈夫なのかという疑問が浮かび上がる。

「……静葉、お前操作できるのか？」

「うん、出来るよ。さっき穰子から聞いたから」

「そ、そうか」

それでも若干不安が残る。……突然沸騰したりしないだろうな。

「あのさ、水織君」

「何だ？」

ダクト越しに聞こえる静葉の声のトーンは低く、耳を澄ませないと聞こえないほどだった。

壁に背を預け、静葉の言葉を待つ。数十秒ほど間を開けてから、やがて声が響く。

「や、やっぱり何でもないと。気にしないで」

「……そうか？　なら、いいけどさ」

「うん。じゃ、ごゆっくり。でも、今日もお仕事あるからあんまり気を抜いちゃダメだよ？」

「わかってるって」

そうしてしばらくして静葉の声が聞こえなくなった。恐らくボイラー室を後にしたのだろう。

再び一人となった水織はのんびりとペンキ絵を眺めながら、これからすべきことを考える。

目下、すべきことは二つ。

「一つは新しいペンキ絵を描くことか。そろそろ新しい絵にしてもいい頃だし。それともう一つは……」

昨日の魔理沙の言葉を思い出す。

もう一つやるべきこと、それはこの秋の湯に新たな施設を建設すること。

「サウナだな。上手くいけばもつとお客さんが増えるかも……あ」

そして水織はあることに気づく。

最初はあまり気乗りがしなかったのに、今では秋の湯の経営にすっかり夢中になっているということに。

「……ううん、やっぱり蛙の子は蛙ってことなのかなあ」

気恥ずかしさを紛らわすため、水織は水面でぶくぶくと泡を立てながら体を沈めた。

第二十四話 一日千秋（後書き）

あつという間に12月。今年最後の月となりました。

読者の皆様方、いかがお過ごしでしょうか。

秋もすっかり過ぎ去り、所によつては雪が降り始める季節となりましたが、我が故郷サイレントヒルでは雪なんぞ滅多に降りませぬ。一度でいいから、一面銀世界の朝を迎えてみたいものです。

……新潟の友人にそんなコトを言ったら半眼で睨まれましたけど；

さて、過去のお話も一段落し今後やるべきことが決まりました。

これからの水織君たちにご期待くださいませ。

次話は12月6日を予定しております。

それと評価ポイント追加してくださった方、ありがとうございます
た。

感想等、お待ちしております。

長々とあとがきしちゃいましたがこれにて
では、待て次回。

P S オリジナル、始めました。

そちらの方も読んでいただければ幸いです。

第二十五話 女教師と忘れ傘

結局、水織はその後はずっとのんびりと過ごしていた。

入浴後は牛乳を飲み、その後は特にすることも無く自室で寝転がったり、洗濯物干したりまた昼寝したり。それはまるで、宿題の無い冬休みを過ごしているような気持ちだった。つまり自由であり、退屈でもある。

西の彼方に夕日が沈んだ頃、水織がカウンターに顔を出すと、何やら一人の女性が静葉と話をしているのを見つけた。

薄く青みを帯びたような長い銀髪に古風なロングスカート。何となく教鞭が似合いそうな後ろ姿だと思いながら向かうと静葉が水織に気づき、女性もまた静葉に釣られて同じように振り向いた。

「んお……ッ!？」

涼やかな眼差しに、慈愛と知性を兼ね備えたかのように、クール且つエレガントな姿容。

それはまさしく幻想郷版見返り美人図と言ったところか。水織は心根から震えあがり、一瞬で頬を染めあげてしまう。

「……？ どうした、そんなに私の顔をじろじろ見て」

「や、ええええと、その……そのッ!」

涼やかな麗容と違わぬほどに、まるで清水のように綺麗な声音で女性が言う。

水織の脳内がほんの数秒でオーバーヒートし思考が一切機能しなくなってしまう。マズイ。このままだと勢いに任せてロクでもない事を口走ってしまいそうな気がする。

例えば――

「結婚してくださいッ！」
「断る」

水織の心が、ビルの解体作業の如き勢いで根元から崩壊していく。膝をつき、血の涙を流さんばかりの勢いでおいおいと泣き崩れる水織に、当然と言えば当然なのだが女性は訝しげるような視線を送る。

「……何だこの変態は。こんなヤツと一緒に銭湯経営して大丈夫なのか」

「えと、そんなに悪い人じゃないんですよ？ ……たぶん」

「違う……そんなことを、言いたいんじゃないくて……こんな……」

「あれ？ 何してんの水織。お腹減ったなら大学芋作ってあげよっか？」

「……何故大学芋？」

よろよろと立ち上がり、静葉と女性を交互に見やってから水織が訊ねる。

「えっと……それで、この人は？」

「慧音先生。寺子屋で先生をやってるんだよ」

「寺子屋……」

幻想郷で言うところの学校と言うことか。教鞭が似合いそうだという水織の目測は正しかったらしい。

慧音先生と呼ばれた女性はスツと手を差し伸べ水織に握手を求める。

「上白沢慧音だ。かみしらさわけいね 紹介に預かった通りこの里で子供たちに学問を教

えているよ」

「ど、どうも。草津水織です」

それにしても、寺子屋の先生が静葉と何を話していたのだろうか。水織が訊ねようとする。と静葉の方から先に口を開いた。

「あのね水織君。今度、慧音先生の授業でここを貸してほしいんだって」

「はあ？ 銭湯で授業するってのか？ ……ハッ！？ つ、つまりそれって慧音先生と保健体育的なことがばあッ！？」

まだ最後まで言い切っていないのに、頭蓋を砕くような凄まじい衝撃が水織の脳天に襲いかかり地べたに叩きつけられる。穰子の所為かと見上げると、額から煙をあげる慧音の姿があった。

「ば、馬鹿者！ そんなことわ、わわ私が教えるわけなかるう！？」

「そ……それ以外に、いったい何に使うんですか……」

「ペンキ絵だつてさ」

「……ペンキ絵？」

慧音がこほんと咳払いして気を取り直して話し始める。

「以前この銭湯を利用した時にあの絵を見て感動してな。是非とも美術の授業に使いたいと思ってな」

「ペンキ絵を美術の授業に……へえ、そりゃ画期的と言っつか何と云うか」

実際、元いた世界ではペンキ絵はある種の芸術的価値はあった。ペンキ絵と言うその性質上売り買いなどはされないのだが、博物館などで飾られているペンキ絵がごく僅かだが存在していることもあ

る。

しかし、あの絵は水織と霖之助とで描いた絵でそういった価値はほとんど無いのだが、こうやって誰かに感動されるとやはり嬉しいものである。

「……ん？ 子供たちと、ペンキ絵……か」

「水織君、どうかしたの？」

ふとあることを思いつき、水織は思考する。

いつそ、子供たちにペンキ絵を描かせてみるのはどうだろうか。見るだけよりも触れた方が勉強になるだろうし、子供側としては絵を眺めているだけと言うのも味気なくつまらないものではないだろうか。

「あの、慧音先生。よかったら寺子屋の生徒さんに絵を描かせてみたらどうですか？」

「え……？ あんな大きな絵をか？」

突然の水織の提案に慧音は驚き目を丸くする。

キャンバスが大きい分、生徒たちへの危険性が高まる可能性もある。だが、教師側としても生徒側としても大きなメリットにはならないだろうか。

それを考慮しながら水織は提案したのだが、慧音は腕を組みやや難しそうな顔で返答に困っている様子。

「……私としてはその申し出は嬉しい。だが、ペンキ絵というものは銭湯の象徴なのだろう？ それを生徒たちに描かせて大丈夫だろうか」

「そろそろ絵を新しくしたいと思ってたし、どうせならちょうどいかなって思ってたんですよ。ただ、やっぱりテーマ的なものがある

と嬉しいですよ。流石に落書きはマズイし」

「ふふ、確かに。ふむ……よしわかった。君の申し出を受けよう。ペンキ絵のデザインは生徒たちに考えさせておくことにするよ」

「うん、了解です」

話が綺麗にまとまり、水織のアイディアに静葉もニコニコ笑顔で頷く。

「へえ、寺子屋の子たちの絵がペンキ絵になるのかあ。なんだか楽しみなねえ」

「用意が出来たらまた連絡してください。道具とかはこっちで用意しますんで」

「助かるよ。子供たちも喜んでくれるだろう」

うんうんと頷く慧音の顔はご満悦。美人に協力するのはいいことである。

さて、と慧音はカウンターに置いてあった小さな桶に手を伸ばす。どうやら彼女の私物のようであるが。

「では、話も一段落ついたし風呂を使わせてもらつよ」

「まいどあり〜。女湯は左手ですよ」

「うむ、ありがとう」

「慧音先生、よければオレがお背中流しぎゃあああッ!？」

「お前はさっさとボイラー室行け!」

しかしこれで新しいペンキ絵に関しては一段落ついた。首筋の激痛に悶絶しながら、水織は薄れゆく意識の片隅でサウナのことを考えていた。

・
・
・

翌日、幻想郷は雨。

秋の雨は心無し寒く感じる。こんな日は秋の湯が忙しそうだなと思
いながら水織は出かける支度をしていた。

動きを阻害しないように腰に付けたウエストポーチに、お気に入り
のジャンパー。玄関に立て掛けてあったスコップを取ると玄関を
出ていく。

秋の湯の正面に唐傘をさした穰子の姿があった。

「おはよ、水織」

「おう穰子。今日は案内頼むぜ」

「いいよ。妖怪の山なら私の庭みたいなものだし」

今日、穰子に妖怪の山への案内を頼んだのは他でもないサウナの
ことだ。

前に世話になったとりにサウナのことを話そうと思ったのだが、
水織はにとりの家への道がわからなかった。そこで穰子に案内を頼
んだのである。

「……何か、いつもより芋の匂いがきつくはないか？」

「え？ そ、そんなことないさ。それよりどうして私に案内を頼ん
だの？ ほら、お姉ちゃんだって妖怪の山の道わかるんだし」

「ん？ 穰子に頼んだ理由？」

穰子の何か期待しているような眼差しに、水織は正直に答える。

「……たまたま目の前を通りかかったからだな。それ以外には特に
何も」

「……あつそ」

「な、何で不機嫌そうになってんだ？」

「不機嫌じゃないわよ。それよりにとりの所いくんでしょ？ 早くしなさいよ」

「わ、わかったって」

しかし、怒っている理由がさっぱりわからない。

水織は自分の傘をさして大股で歩く穰子の背中を追いかける。人里の北門から抜けて妖怪の山を目指し平坦な道をまっすぐ歩いていく。

天気が悪いせいもあって、いつもは正面に見えているはずの山が薄靄に包まれていてよく見えない。

そのまま歩き続けて山道入り口が見えてきたところで足を止め穰子が振り返る。

「どうした？」

「水織、ちゃんとしてきてよ？ 私たちはこの山の住人だからいいけど、天狗たちは排他的で外部からの侵入者を許さないんだ」

「はいたてき……って何だ？」

「えっと……と、とにかく危ないの。だからちゃんと私についてきて、いい？」

「り、了解」

穰子の妙な剣幕に圧され思わずゴクリ、と唾を飲み込む。

雨降りの妖怪の山は湿気と冷気が漂っていて、不気味さと寒さで体が芯から震えてくる。そんなことを考えながら踏み出し、未だ残る紅葉のアーチをくぐって進んでいく。ふと、水織の元にはらりと小さなモミジが落ちてきたので掴んでみると、端の方が既に色が失せて枯れていた。確かに寒くなってはきたがまだ秋が終わるには早いような気もする。ただ単にこのモミジが紅葉を終えたただけだろうか。

「水織、何してんの？ こっちだよ」

「あ、ああはいはい。すぐ行く……って？」

水織が穰子の呼びかけに気づきハッと顔をあげると、大きな木々が広がるだけで穰子の姿が見えない。右を見ても、大木。左を見ても、同じような大木。前後左右、何処を見ても同じような木々が延々と広がっているだけだった。

「お、おい？ 穰子？ みのりこおッ！」

水織の声が山中に虚しく響く。返事無く、ただただ木々の向こう側へ吸い込まれていく。

「……おいおい、まさかはぐれたってか。何やってんだ穰子のヤツ」

自分の所為とは微塵も思わない水織。

すると、空から降り注がれる雫が幾分強くなったような気がして、堪らず木の根元へと駆け込む。

薄暗い山の中で一人、水織は灰色の空を見上げ、ふとその先に小さな影を見つけた。

「……何だ、あれ？」

曇天の向こう側から、傘をさした少女がふわりふわりと下りてくる。

紫色の、まるで茄子を開いたかのような若干センスの悪い傘の少女はやがて水織の前に着地し、傘でそおつと顔を覆い隠す。

「え、えつと誰……？」

「うらめしやー」

何かと水織が声をかけようと手を伸ばした瞬間、少女はサッと傘から顔を出してそんなことを叫ぶ。

ああ、アレだ。赤ちゃんをあやす、いないいないばあ！ に似ている。

不思議なことに少女は左右で瞳の色が異なり、左目が赤、右目が水色である。所謂オッドアイいわゆるというものだ。水織も見るのは初めてである。

冷静に少女を観察していると、舌を出しっぱなしの少女が気まずそうにこちらに目配せしてくる。

「……何だ？」

「いや、あの……うらめし……やあ……」

しかし、そんなこと言われてどう反応しろと言っのだろうか。確かに雨が降りしきる妖怪の山は不気味だが、こんな真昼間にそんなこと言われても困る。水織が若干冷めたような視線で返した。

「な、何よ。あなた普通の人間でしょう？ 目の前で妖怪が出たのに、ちつとも驚いてくれないの？」

「いや、えと……わーすごいな……」

「……しくしく。私、本当に人を驚かせる力あるのかなあ」

何だかデジャビュを感じる。前にもこんな感じのやり取りをしたような……

オッドアイの少女はさめざめと泣きだし、その場でちょっとしゃがみ込んでしまう。

「お、おいこんなところで座ったら……ッ!？」

パンツ濡れるぞ、と注意しようとした瞬間、少女の傘にぎよりと大きな目玉が一つと長い舌が飛び出て水織は思わず飛び退く。

少女の傘はまるで意思を持っているかのように目玉と舌をぐるりと動かし、一つ目は水織を睨む。

唐傘お化け、というヤツだ。水織もよく知ってる、一本足で歩く古びた傘の付喪神。

すると、少女はゆらりと立ち上がり、口の端をつり上げ不気味な笑みを浮かべる。

……だが、元が可愛いのでそこまで不気味ではない。むしろちょっと可愛い。

無論、水織の好みではないのだが。

「うふふ。こうなったら弾幕こっちで脅かしてやるんだから。覚悟しなさい！」

「また弾幕勝負……か。女の子と戦うのは嫌なんだけど……」

かと言って尻尾を巻いて逃げるわけにもいかず、水織はスコップを構え対峙する。

しかし、紫との特訓の成果を試すにはちょうどいいかもしれない。スコップを上段に構え、内に眠る能力ちからを呼び起こすとオッドアイの少女を見据える。

「私は多々良小傘たたらこがみ！ いざ尋常に、慄け！」

少女の放つ七色の光弾を前にし、水織は姿勢を低く構え少女の弾幕の中を掻い潜るようにして駆け出していった。

第二十五話 女教師と忘れ傘（後書き）

何気に小傘を書くのは初めてだったりする。

……ちよつとコレジャナイ感がするけど気にしない。

そして何度見ても微妙な地の文。

精進したい。

次回更新は12月9日予定。

オリジナルは予定より少し遅れて、今週の金曜日辺りになります。

では、待て次回。

第二十六話 満身創痍の相合傘

「もう！ 水織ったら、案の定ちよつと目を離した隙に迷子になってるじゃない！」

妖怪の山上空、灰色の空から落ちる雫に打たれながら穰子が腹立たしげに呟く。

ほんの一瞬、本当に一瞬だけ穰子が目を離した瞬間、水織の姿は影も形も無くなっていた。

穰子は慌てて飛び上がり空から水織の姿を探す。雨降りの山は薄霧^{もや}をまとっていて視界が悪く、人を探すのは困難を極めた。焦りに心を駆られながら、穰子は眼下の景色を隅から隅までくまなく探していく。

「……何かあつたら、私の責任だ」

手にした傘の骨が軋むのも構わず、穰子は速度を上げた。

・
・
・

「んの……！」

目の前から飛来する弾幕を、手にしたスコップの切っ先部分で器用に切り裂く。

小傘は一つ目の傘をくるりくると、まるで催眠術でもかけているかのように回しながら七色に輝く光弾を四方八方にばら撒いてくる。

不規則に飛び交う弾幕の中で水織は自分に向かってくる光弾を切っ先で伏せ、それが出来ないものは横っ跳びで回避したりスコップ

で受け止めたりする。

しかし、自分からは決して攻撃しなかった。

「ほらッ、ほらッ！」

遠慮無しに襲いかかる弾幕に舌を巻く。

このまま受け続けていては水織の方が圧倒的に不利だ。木の背後に回って身を隠すと、ウエストポーチに手を伸ばして小さな札を手取る。

それは紫との特訓の成果であり、水織お手製で初の術符スベル・カード

大木が軋む音を聞きながらスコップの先端に術符を張り付ける。ギシ、と一際大きな音が真後ろから響き、やがて大木が爆ぜ水織を吹き飛ばしてしまう。

「うふふ、このまま勢いで勝っちゃうよ！」

「そうは問屋が何とやらッ！」

白煙の向こうから踊りかかり、水織は術符のついたスコップを地面に突き立て、そして詠唱する。

やり方は紫から教わった通り。使う技を頭の中に意識し、内なる力の高まりを術符に一気に注ぎこむ。

「これが、オレの術符だあッ！」

スコップを突き立てた地面が白く発光したのを確認し、水織はこの原理で地面を持ち上げる。

隆起した地面が小傘の放つ光弾を全て弾きそのまま水織を守る巨大な盾となる。

今の今まで平凡な人間だと思っていた少年が“能力”と思わしき力を使い、小傘は面喰って驚く。

「な……！ 普通の人間じゃないの！？」

「盤符『ちゃぶ台返し』。成功して助かった」

「なら、私も！」

小傘は空中で大きく後退し、スカートのポケットから同様に小さな札を一枚取り出す。

藍色の術符が手の中で踊り、煌びやかな光を生み出す。

「大輪『からかさ後光』」

その術符の名の通り、小傘の背後から後光のように光弾の雨が舞い起こり、水織目がけて一直線に突っ込んでくる。

水織は自分が掘り起こした盾に身を隠し弾幕をやり過ごそうとして、ピシイ、と亀裂の入る音を耳にし戦慄した。

「やば……！」

水織が呻いた直後、盾は轟音を立てて派手に砕け散ってしまった。飛び散る破片と小傘の弾幕とが同時に襲いかかり、水織は成す術なく吹き飛ばされる。

そのまま大木に激突し、肺から空気が強引に吐き出される。

「が……はッ」

全身が軋むような激痛に呻き、苦悶の表情を浮かべる。

いくら不思議な能力があるとはいえ水織自身は至って普通の人間。霊夢や秋姉妹とは体質的に違うのだから受けるダメージは遥かに大きい。

初めて直撃した小傘の弾幕は想像以上に痛かった。

「私の攻撃に驚いたかな？ ふふ」

「……ぐつつ。驚いた驚いた。ついでに死にかけたよ」

「ふふふ。死んでもらっても構わないけど、死ぬ前に心を食べさせてもらわないとねえ」

小さく舌舐めずりする小傘の表情は、不気味なような可愛いような、何とも中途半端な顔をしている。

一応、彼女もルーミアと同じ妖怪なはずだが……この世界の妖怪は総じて恐怖を感じないような気がする。

しかも今は、どちらかと言えば怖いというよりは痛い。
ほんの少し体を動かそうとするだけで体が悲鳴を上げる。

「……こっから、どうしようか」

スコップを杖代わりにして立ち上がるが、膝ががくがくと震えてしまっていて使い物にならない。

こちらにも応戦すればよかったのだが、水織は決して女の子相手には手を出さないし、出したくない。

この性質上、水織の弾幕勝負は必然的に耐久勝負となってしまう。
相手は専ら人ならざる者たちばかり。体力的にも技術的にも、全てが不利に回ってしまう。

だからこそ、水織はそれを少しでもカバーできるよう、防御や自衛に秀でた術符を思い描き創ったのだ。

ジャンパーのポケットから鈍色にびいろの術符を取り出し、先ほど同じようにスコップに張り付けようとして——手を伸ばした瞬間、水織の手からスコップが弾かれた。

「うッ、わ——！」

「観念なさい。キミはこのまま大人しく私に食べられちゃうのよ」

「やば……スコップがないと！」

しかし、取りに行こうにも距離があり過ぎる。

絶体絶命のピンチ。悠然と空に漂う小傘の背後に、水織は再び何者かの影を見つける。

「アレは……」

「ハッタリのつもり？ そんなものに引っ掛かるわけ——ふぎゃ！？」

「水織！ 大丈夫！？」

新たに現れた人影の正体は穰子だった。

文字通り急転直下の勢いで飛び込んできた穰子は、小傘の脳天に見事着地し、そのまま落下速度も乗せて地面に叩きつける。激しく地面がめり込み、穰子に潰された小傘はびくびくと小刻みに震えていた。

穰子はそんな小傘を歯牙にもかけず、傷だらけの水織の元へと駆けつける。

「……おい。流石にやり過ぎじゃ」

「何言ってんの水織！ これでも足りないくらいだよ！ 水織、こんなにボロボロになって……」

「弾幕勝負って、見た目以上はかなりハードだよなあ……よくこれを遊びって言えるよ」

「骨は……折れてないね。打撲とか、打ち身が酷い……」

「さ、触んなって。余計に痛い……つつ」

「もう。じつとしてて」

穰子は水織の腕や腿の部分に手を当て、祈るようにそっと瞳を閉じる。

陽光にも似た柔らかな光が水織を包みこむとその傷を少しずつ癒していく。

やがて光が消えると、身体の痛みが幾分か和らいだような気がした。

「応急処置だけど、これで少し歩けると思う」

「ありがとな、穰子」

「ううん。水織が怪我したのは私が目を離れた所為だから……」

「それなら、オレだって責任が……」

「私を無視するなあああッ!？」

地べたに沈んでいた小傘が起き上がり、穰子と水織に向かって無視し続けられた怒りを爆発させる。

頬を紅潮させ、その瞳には小さく涙が浮かんでいる。

「な、何よ何よ! いきなり私を踏みつけて、しかも白昼堂々目の前でいちゃついて……! 一体何なのあなた達!？」

「い、いちゃついてなんかいいわよ!? わ、私は水織君を探しに来て、そしたら貴方に襲われてるのを見つけて助けに来たの!」

「くう……空で人に出会えば茄子みたいな傘だと笑われ、せっかく見つけた安住の地は変なヤツに追い出され、終いにや妖怪の山で人間襲えばラブラブカップルだし……私、自分でも驚くくらいに不幸……」

「だ、ただだ誰と誰がラブラブカップルよ!？」

「……カップル? 誰と誰が?」

「う、うるさい!」

目の前の二人は泣き崩れたり、顔を真っ赤にしたり、全く意味のわからない水織はぽかんと呆けていた。

「こ、この怒りを弾幕でぶつけてやる！　うわああッ！？」

小傘の理不尽な怒りが弾幕となって二人に襲いかかり、水織と穰子が同時に術符を構える。

「盤符『ちゃぶ台返し』」

水織は落ちていたスコップをすぐさま拾い上げ、地面を隆起させ壁を作り小傘の弾幕を全て受け止める。

そして勢いの落ちた一瞬の隙に、穰子が壁から躍り出てすぐさま術符を発動させる。

「実符『ウォームカラーハーヴェスト』」

朱色の散弾と針のように鋭い金色の光弾とが重なり、一陣の弾幕となって小傘を包囲し一斉に貫く。

集中砲火を受けた小傘は叩かれた虫のようになるときりもみ回転しながら、べしゃ、と泥溜まりの中に墜落した。

全身泥まみれの小傘を見て、水織も穰子も少し居心地の悪そうな表情を浮かべる。

「……これ、やり過ぎだろ」

「……うん。反省してる」

一応背中を突っついてみたのだが、今度はぴくりとも反応しない。完全に気絶しているらしい。

もちろん、水織は雨降りで泥まみれの状態の小傘を残して進むほど冷血な性格ではない。

徐に小傘に近づき、自分の体が泥に汚れるのも厭わず小傘を肩で担いだ。

「み、水織？」

「サウナのことでも大事だけどこの子も放っておけないからな。今日は一旦帰ろうぜ」

「だけど……うん。わかった」

灰色の空は依然として冷たい雨を幻想郷に注いでいる。

妖怪とはいえ、このまま放っておいたら小傘だって風邪をひいてしまう……と、思う。

今の自宅は銭湯なのだ。どうせなら静葉と穰子とに手伝ってもらって彼女を助けてあげたい。

——と、急に雨が止んだ。かと思ったら、横で穰子が小傘の唐傘を抱えていた。

「ほら。それじゃ傘持てないでしょ。水織まで風邪ひいちゃう」

「おう。サンキュな」

唐傘の方も小傘同様に気絶してるようだ。その証拠に目玉がバツ印になってる。この分なら勝手に使っても怒られないだろう。

「……水織って、優しいよね」

「ん？ 何か言ったか？」

「んーん。何でもない。ほら、早く秋の湯に帰ろうよ」

水織と穰子が同じ傘をさして歩く。

気絶してる小傘さえいなければ水織と相合傘となるのだが……今回は我慢しておく。

一緒の傘にいただけで、それだけで十分温かった。

第二十六話 満身創痍の相合傘（後書き）

お気に入り登録件数、100件！

登録してくださった方々、ありがとうございます。

これで100件を迎えたお話は空想夢と合わせて二作となりました。本当にありがとうございます。

ついでに、よろしければオリジナル作品の『Blaze Snow

〜焔雪〜』の方も読んでいただければ嬉しいです。

……まだ序章しか公開出来てないけど；

なお、此方の方の更新は今日の深夜を予定しております。出来なければ、恐らく明日かと。

そして次回更新はやっぱり3日後の12月12日。では、待て次回。

PS

テガミバチ12巻を一気買いしましたw

漫画でもアニメでもやっぱり泣ける……ッ！

第二十七話 予想外の来客

小傘を助け、その翌日にとりへサウナ建設を依頼して、その更に次の日水曜日。

本日の湯は休業日。なのだが、今日は朝から水織たちはいろいろと大忙し。

「穰子、ペンキとか筆は？」

「え、えつと。寺子屋の子供たちは三七人だつて言つてたから三十本で、ペンキの缶は……いっぱい頼んだ！」

「静葉、脚立とかヘルメットとかはどうだ？」

「あ、あるよ！ 白いのとか黄色いのとか、青いのも！」

「青……？ 明らかにおかしいだろ。変えてきてくれ」

「り、了解！」

ドタどたバタバタ、どたドタバタバタ。

水織たちは朝から事務所やら近くの道具屋やらあちらこちらへ行ったり来たりを繰り返していた。

それというのも、今日は前に慧音と約束をした日、つまり寺子屋の生徒たちがこの秋の湯にペンキ絵を描きに来る日なのだ。

水織たちは慧音と生徒たちのための道具一式を用意している。

ペンキや道具の一部は香霖の店から借りたのだがほんの少し数が足りず、里の雑貨屋から筆を借りたりペンキを借りに走ったり。

「用意するとか言っておきながら、直前でこんなに焦るとは情けないよなあ」

ペンキ絵を描いてくれるのは寺子屋の生徒たち、つまりは年端もいかない子供たちだ。

秋の湯の浴場というただでさせ滑りやすいタイルの上で作業するのだから、安全面に関しては細心の注意を払いたい。

脚立の下にはクッションを敷き、万が一転落した場合もヘルメットと合わせれば怪我を極力防ぐことが出来る。脚立には念のため支えを付け足す。ペンキも子供達では匂いがきついかもしれないのでマスクも用意した。準備は万全、だと思う。

「そういえば静葉、慧音先生は何時頃来るって？」

「確か、五限の授業に合わせて来るって言ってたから……」

水織の学校と同じものだと考えるなら恐らく昼を過ぎたころだろう。

あらかたの準備を終え、ふうと一息つき水織は事務所の机に腰をかける。

フツと時計を見上げる。

朝から忙しくなく作業したおかげか、時計の針は十一時半辺りを指していた。休憩するにはちょうどいいかもしれない。

「ん……それじゃ、ちょっと休憩しようぜ」

「さんせーい」

「お昼、何にする？ お芋ふかす？」

「お前はホント芋ばっかだな……まあいいけど」

穰子は鼻歌交じりに事務所のコンロで芋を蒸すための鍋に火をかけた。

ふんわりとただよう甘い香り。

……しかし、あのさつまいもは一体何処から出てくるのだろうか。

「このペンキ絵が出来上がったら、その後にサウナ建設だな」

「にとりも驚いてたね。それじゃ蒸し鍋と一緒にじゃないかって」

「まあ、原理は一緒だしなあ……」

「それってつまり、サウナの中でお芋抱えたら蒸せるってこと？」

「それじゃ穰子も一緒に蒸し上がっちゃうよ。ついさそこまで熱くねえって」

「ねえねえ、その後ってどうするの？」

「その後……？」

ペンキ絵を描き終えサウナを増設したその後……か。

サウナまでは水織も考えてはいたが、その後となると何も考えていなかった。

また秋の湯に施設を追加するのか、それとも別の何かをするのか。

水織は小さく唸った。

水織には、特別何かをしたい、と思うことがない。

そもそも水織は紫の気まぐれに巻き込まれこの秋の湯を秋姉妹と協力することになったわけで、特にこれといった強い目的がない。

静葉に言われる今まで、全く気付かなかった。

自分はこれからどうしたいのだろうか。確かに秋の湯を静葉や穰子たちと一緒に経営しているのは楽しいのだが……

コン、コン。

控えめなノック音に水織がドアを開ける。

そこには知的な顔立ちの女性が一人立っていた。

「あ、慧音先生！」

「やあ。今日は一日世話になるよ」

恐らく授業の前に挨拶に来たということのだろう。

水織たちは慧音を浴場へ案内して軽く説明を始めた。

「ふむ、これなら生徒たちも安心して絵を描くことが出来るな」

「最初に絵を見てもらって、それから絵を描いてもらって感じて

「どうですか？」

「ああ、それで頼む。しかしすまないな水織。生徒たちのためにここまでしてもらって」

「いえいえ。美人の教師のためなら喜ぶっはあッ!？」

「け、慧音先生。生徒さんたちは何時ごろ来ます？」

「ん、すぐ外で待っているよ。こちらの準備は整っている」

「じゃあ、すぐにでも始めようか」

昏倒してる水織を残し静葉と穰子が玄関に向かうと、既に暖簾の向こうで寺子屋の生徒たちが集まっていた。

「こーんにーちはー!」

子供らしく無邪気で元気のいい挨拶。静葉も穰子はその笑顔にほんのりと癒されたような気持ちになった。

生徒たちはざっと見て男の子が6、女の子が4という割合でまばらに並んでいる。

皆一様に、服の袖を動きやすくするために捲ったりしていた。

「じゃあ、まずは絵を見るぞ。大浴場は滑りやすいから気を付けるように」

「はーい!」

慧音先生の指示の元、生徒たちはそろそろと行列を成して進み、男女分かれて浴室に入る。そして三十分ほどして見終わると交代する。

生徒たちは壁一面に広がる大きな絵を見上げ、へーとか、ほーとか、感嘆の声のようなものを漏らしている。

「おっきな妖怪の山だね」

「私、何度も来てるから知ってるもん」

「綺麗だねえ」

「うお、うおお重いつて……」

純粋な賞賛は、やはり純粋に嬉しい。

戸口の影でこっそり様子を見ていた姉妹は、顔を見合わせて微笑んだ。

失くしつつあった信仰も、この秋の湯のお陰でみるみる回復しているし、何より毎日が格段に楽しくなった。

当初はどうなることかと心配だったのだが、外の世界から来てくれた水織のおかげもあって今では心の底から銭湯経営を楽しめている。

当の水織は、何故か生徒に踏みつけられているのだが。

「何だかんだ楽しいよね、お姉ちゃん」

「うん、そうだね。前よりも、もっと人の生活に身近になれた感じ」

「今なら、山の紅葉も心配ないんじゃない？」

「そう……だね。でも、今度念のため見に行く」

「そっか。じゃあ、そんな時は水織とお留守番かあ」

「ふふ。何言ってるの穰子。当然穰子も一緒よ」

「ええ？ だけど、そしたら水織一人になっちゃうよ？」

「じゃあ……私と水織君とで一緒に山に行くわ」

「それなら、お姉ちゃん一人で行きなよ。代わりに私が水織と留守番してるから」

「穰子一人でも留守番出来るでしょう？ それに、水織君の気分転換にもなるし」

「……やけに水織君を気遣うんだねえお姉ちゃん？」

「み、穰子こそ。そんなに水織君と一緒に留守番したいの？」

「べ、別に！ だけどほら、水織だけ一人に出来ないっていうか何というか……」

姉妹二人で口論して顔を真っ赤に染め、同時に顔を俯かせる。
その間に傷だらけの水織がぬっと顔を出す。

「……何してんだ」

「ひゃあ!？」

「な、何でもないよ！ み、水織こそ大丈夫なの？」

「ちっちゃい子ってのはちょっと苦手なんだけどまあ……ね。弟とか妹を持つヤツは大変そうだよなあ」

背中を摩りながら水織がしみじみといった口調で呟く。

振り返ると、大浴場で芸術鑑賞している生徒たちとその教師。何とも不思議な光景である。

元の世界でこんなシーン見れるだろうか、いや、恐らく見れないだろう。

今日限りの珍しい光景を眺めながら、水織は元いた世界をふと頭に思い描いた。

田舎で、温泉旅館で、姉がいて――

この世界を知ることがなければ、今頃は水織は平平凡凡と暮らしていたのだろう。

でも、今自分は幻想郷という不思議な世界にいる。

いっそ、この状況を心の底から楽しんでみたらどうだろうか。

こんな経験、滅多にない。

自分が元いた世界に帰るその日まで、この幻想郷^{せかい}を楽しんでみようか。

そんなことを考えて――

「たのもー!!」

背後から響いた声にハッと我に帰る。

振り返ると、静葉と穰子も同様に玄関に目を向けていた。

そこには、少女が立っていた。

青いスカートに同じく青い髪。

そして極めつけは、その背に生えた透き通る氷の翼。

明らかに人、ではない。

かといって妖怪なのかと言われると、それと断言するのが難しい何とも奇妙な身なりの少女。

威勢よく声を張り上げた次は、これまた堂々と胸を張ってふんぞり返っている。

パツと見、バカっぽい少女だった。

大声を聞きつけ、浴場の方から慧音が顔を覗かせると、む、と小難しい表情を浮かべた。

「チルノ……か。こんなところに何をしに来た？」

「ふっふーん！ 私を差し置いて楽しそうなことしてるじゃない！ 私も混ぜてもらっていいわよ！」

「……あの、アイツ何者ですか？」

すると慧音はううんと唸り少し顔をしかめる。

その表情は何というか、問題児を抱えた教師、というそのまんまな感じだ。

「アイツもまあ……一応生徒だ。一応」

一応を強調する慧音。

見た目からして彼女は人間ではなのは明らかで、ならば妖怪なのか、それともまた神様なのか。

「アイツは妖精だよ。害はない。けど、悪戯が好きなヤツらだね」
「ふうん……？」

チルノと呼ばれた少女はトントンと素足のまま秋の湯に侵入し、浴場の真ん中辺りで元気よく叫んだ。

「おー！ おー！　すごいじゃんせんとー！　大ちゃんから聞いた通りだね！」

「大ちゃん……」

一瞬、元の世界のテレビ局のマスコットが出てきてしまったので首を振る。

何かしでかさないと心配した水織はチルノの後を追いつ、そのまま女湯へと踏み込む。

「おい、お前何するのかわかってるのか？　そもそもここが何か知ってるのか？」

「あたい知ってるよ。ここ、お風呂する場所でしょ？」

「お風呂する……って」

さっぱり訳のわからないチルノに、水織も小首を傾げ対処に困ってしまった。

それにしても、この背中（？）は一体何なのだろう。

透き通った結晶は、まるで氷か氷柱のように見えるのだが。

恐る恐る、水織は手を伸ばしてみた。

「うお、冷たッ」

「はえ？　そんなの当たり前じゃん。私は氷の妖精なんだからな」「妖精？」

「そうだよ。あたいは氷の妖精なの！　だから弾幕でバリバリ！　って凍らせるの！」

「凍らせる……ねえ？」

疑いの目を向ける水織に、チルノは腕をブンブン回しながら意気揚々と答えた。

そしてすぐさまポケットから青い札を複数枚取り出し両手に握りしめる。

それは、水織もすっかり見慣れた、スベル・カード術符だった。

「お、おい！　こんなところで何をする気だ！？」

「お風呂って熱いんでしょ？　だったら——」

ニツと笑みを浮かべ、そして術符を弾く。

符から凄まじい冷気が舞い起こり、浴場を一瞬にして吹雪が包み込む。

「きゃああッ！？」

「ぐ……！　皆、ここは危険だ、逃げなさい！」

慧音は生徒達を素早く非難させ、水織はそのまま浴場へ残る。

「うわ……ぐッ！　ち、チルノ！　何をするんだ！？」

吹き荒れる吹雪の中、水織は片足を踏ん張って吹き飛ばされないよう堪えながら、半眼でチルノを見据える。

得意気な表情で、チルノは答えた。

「熱いお風呂は嫌い！　だから、あたい専用の氷風呂を作るのさ！」

第二十七話 予想外の来客（後書き）

に「あのさあ、作者」

夜「何だにとり。というか、このあとがき久しぶりにやったな」

に「私のシーン、カットし過ぎじゃない？」

夜「気のせいだ……多分」

いつも読んでくださる方々、ありがとうございます。

こっそり恋心のようなものが芽生え始めた秋姉妹、そして突如現れたチルノ。

何とも波乱な第三章です。

ぐだぐだな展開ですが、これからも応援していただければ嬉しいです。

……それと、オリジナルは今考案し直しています。

どうも世界観で引っかかりが生じたので、大至急修正します。

更新は、何時頃になるかなあ……；

また活動報告で報告します。

では、待て次回。

第二十八話 氷精乱舞

秋の湯に突如乱入した小さな氷の妖精チルノは、水織に向かって
声高らかに叫んだ。

「氷風呂……だって？」

想像するだけで体が芯から冷え切ってしまいそうな代物である。
ここは銭湯だ。銭湯とは公共の施設であり、寒い体を温めるため
の施設だ。

そんな中に氷風呂を作ろうだなんて、何を考えてるんだこの子は。

「……チルノ、とやら。ここが銭湯なのは知ってるんだよね？」

「知ってるよ。だからお風呂する場所でしょ」

「間違っではないない。けど、銭湯ってのは皆で使うモンだ。誰かに
一人のために新しい風呂を作るわけにはいかないぞ」

「そんなのズルイ！ 私だってお風呂入りたいもん！」

「なら、普通に夜に来てくれれば」

「熱いのいやー！」

氷の妖精なのだから尤もな話である。しかし、だからと言って許
すわけにはいかない。

ここは心を鬼にしチルノをしつかりと説得しなくては。水織が歩
み寄ろうと踏み出した瞬間、突然視界が天井に向いた。

「チル……うおわッ！？」

右足が完全に宙を舞い、そのまま重力に引かれ派手に転ぶ。
臀部の痛みに顔をしかめながらふと足元を見ると、いつの間にか

浴場のタイルが、まるで鏡のように自分の顔を反射するほど見事に凍りついていた。

「んな……！ 大浴場が銀世界になってるじゃねーか！」

床のタイルは凍りつき、シャワーには滴っていたであろう水で氷柱までもが出来ている。

目の前に広がる氷の世界はとても銭湯の中とは思えない。何も知らず裸のまま踏み入ったら間違はなく凍死してしまうだろう。

滑りそうになるのを堪えながらどうにか立ち上がり、チルノを見据える水織。

「お、おい！ いい加減にしろ！ このままじゃ秋の湯が使い物にならなくなっちまう！」

「えー？ なんです。あとはお水を張って完成なのに」

「じ、冗談じゃない。ここは銭湯なんだ、銭湯なのに体冷やしてどうするんだっての！」

「もう、さつきからうるさいな。お前誰？」

「この秋の湯の従業員だよ！」

こうなったら仕方ない。手荒い真似はしたくないがチルノを止めなくては。戸口を支えにしながら水織は静葉を呼んだ。

「静葉、オレのスコップ貸して！」

「は、はい！」

「水織、私も手伝うよ！」

静葉が投げたスコップを受け取り、穰子が水織の肩を掴んで浴場へ飛翔する。

この床では足で移動するのは不可能だ。穰子の機転に感心しながら

らスコップを構える。

「おー！ 合体攻撃とかカッコいいな！ でも、撃ち落としてやる！」

チルノは自分の服と同じ青い術符を手に取り、水織と穰子に目標を定め発動させる。

「吹氷『アイストルネード』」

激しい風と鋭い氷柱とで織りなす術符が天井を駆ける水織と穰子に襲いかかる。

穰子は浴場を縦横無尽に飛びまわるが、さすがに狭過ぎる。

「水織！」

「任せとけ！ おりゃああああッ！」

いつか見た、カッコいい勇者や機動戦士が剣や槍をくるくる回して敵の攻撃を弾くアレ。

ほとんど見よう見まねでスコップを振り回すと、思いの外簡単に氷柱を落とせた。

「しかしスコップってのは締まらねえよなあ……」

「水織、チルノの正面に行くよ！」

「お、おう！」

氷の弾幕を撃ち落としながらチルノの真正面を捉える。

チルノはこちらを落とそうと必死に弾幕を張るが水織のスコップがそれを全て叩き割っていく。

「今だ、穰子！」

水織の合図とともに穰子の手が肩から離れる。戦闘機がミサイルを発射するかのように、穰子の手から放たれた水織はチルノ目がけて一直線に飛んでいく。

「うわ、うわわわ!？」

チルノは慌てて術符で迎撃しようするが遅い。

「もらったッ！」

こちらを迎え撃とうとする氷柱を全てへし折り着地し、チルノの正面でスコップを振りかざし、チルノは迫りくる恐怖に顔を引きつらせうずくまってしまう。

「ひッ！」

「うえ、ッ、んわあああッ!？」

しかし、水織は勢いをそのままに顔面から凍った床面をぎゃりぎゃりと派手な音を立てながら滑り壁に激突してしまった。

何が起こったのかわからずチルノは恐る恐る顔を上げ振り返ると、妙に体を曲げながら浴場の端で転がっていた。後から着地した穰子が声を上げる。

「み、水織! 大丈夫!？」

「なんだアイツ……?」

氷の床を滑空して向かうと、程なくして水織が起き上がる。

「いつててて……す、すまん穰子」

「何してるのよ。せつかくチルノの正面を取ったのに」

「いや、そのな……」

壁に手をつき立ち上がり頬をかきながら水織はちらとチルノの方に目をやる。チルノも目があつてバツと構えをとる。

「……やっぱし、女の子と戦うつてのはどうもな」

「え、ええ！？ 何言つてんの水織、戦わないと秋の湯が氷河期になっちゃうよ！」

「う、ううん……」

しかし、女の子には手を上げたくない。これは水織にとって絶対の信条だ。

それに、と水織は凍った床を慎重に歩いてチルノに近づいていく。当然、チルノは低く構えて警戒している。

「な、なにさ」

「ふむ……」

間近で見ると、チルノは相当可愛い女の子だった。

ほんのりとウェーブのかかった青い髪に、幼さと活発さとを備えた意外とすつきりとした顔立ち。

あと十年、いや二十年ぐらいすれば相当な美人になると思う。

「あのさ、チルノ」

「何よ。降参するってんなら認めてあげるわよ」

警戒するチルノに対し、水織は腰を落として目の高さを合わせると、ぼふ、とチルノの頭に手を置いた。

「チルノ、銭湯は公共の、この里や皆が使う場所なんだよ。だから、チルノだけの風呂なんか作ったら不公平だろ？ 他に入りたい人が入れなくなっちゃう」

「そ、そんなの知らないわよ」

「チルノ一人だけで風呂入って楽しいか？」

「そ、それは……」

せつかくの大浴場なのだ、友達や家族と入るのだって銭湯の楽しみ方の一つである。

……まあ、そもそも氷風呂なんぞに誰と一緒に入るのかという疑問が浮かぶのだが。大ちゃんとやらも氷の妖精なのだろうか。

「それにさ、オレ女の子に手を上げたくないんだよ。可愛い女の子ならなおさらな」

「か……？ か、かかか……！？」

聞き様によつてはもの凄く気障な台詞だが、水織にとっては本心そのものである。他意はもちろん無い。

しかし、本人に何の下心が無くとも聞き手がどう受け取るかで事態は変わる。

その証拠に、チルノは茹で上がったか蟹のように顔を真っ赤にさせ口をパクパクさせている。ついでに、穰子も口をパクパクさせている。

「ば、ばばは馬鹿じゃないの！ アンタ、ロリコンでしょ！ このロリコン！ 変態！」

「ち、違いわ馬鹿！ 年下に興味はねえよ！ むしろ逆——」

「近寄るなあああッ！！」

「うおおああああッ！？」

零距离で吹雪が舞い起こり水織の目の前が真っ白に染まる。

チルノはあれやこれやと何か叫びながら大浴場を出て行き、雪だるまと化した水織はその場にばたりと倒れる。

「み、水織！？ ちょっと、返事して！ お姉ちゃん、水織が大変だから、早く来て！！」

・
・
・

「う、うう……ん？」

揺らめく視界、揺らめく体。

目を覚ました水織を待ちうけていたのは真っ白く染まった世界。

「オレ……確か、チルノと話して、それで……それで……ん？」

記憶を遡ろうとしてふと視線を下げて言葉を止める。

乳白色色の何処かで見たようなお湯、というか浴槽。

何故か水織は湯船に浸かっていた。何時の間に着替えたのか、何時入ったのか全く記憶にない。

チルノと話したのはハッキリと覚えているのだが、しかし、そこからどうすればこんな状況になるのか見当もつかない。

ご丁寧に服まで脱いでタオルが腰に巻きついている。いや、服を脱がないと風呂には入れないので当たり前なのだが、しかしここで一つ疑問が浮かぶ。

何時、どうやって服を脱いだのか、だ。

水織自身には全く脱いだ覚えはない。というか、そもそも風呂に

入った覚えもない。

「……………どうなってんだ？」

念のため周囲を見回す。

何度見てもここは見慣れた秋の湯の男湯だった。しかし、不思議なことに水織以外の利用客の姿は見えない。

「まあ、今日は休みだからな。……………休み、のはずなんだけど」

休みなのに何故お湯が張ってあるのか。ますます疑問が大きく深くなっていく。

謎だ、謎過ぎる。

このまま長々と考え事してる場合ではない。まずは外に出て事態を確かめなくては。

浴槽から立ち上がるうとしてフツと視界が暗くなり一瞬足が止まるが、そのままぺたぺたと足音を立てながら脱衣所へと向かう。

心無し脱衣所までの距離が長いような気がしたのは今の立ち眩みのせいだろうか。

戸を開け棚に向かうと、自分の衣服がこれまたご丁寧に収納されていた。

「ううん……………？ オレ、脱いだらそのまんまにしちゃうはずなんだけどな」

下着に手を伸ばし足を上げた辺りで、真横から、がらがら、と引き戸が開く音がした。

「さて、水織の様子はとうだ……………ろ……………な」

戸を開けて姿を見せたのはバスタオルを抱えた穰子。

水織の着替えに直面した穰子は抱えていたタオルを全て落とし、その顔はみるみるうちに赤く、紅く染まっていく。

対して水織はみるみるうちに青ざめていく。

場の空気を読んだのかそれとも偶然か、不意に水織の腰のタオルがはらりと舞い落ちて――

「きゃあああああああああ！？」

「ぎゃあああああああああ！？」

全身全霊、腹の底から声を絞り出し、水織と穰子は今まで生きてきた中で一番の大声を張り上げた。

第二十八話 氷精乱舞（後書き）

予約投稿機能を使つての初投稿。

出来てる……のかな？

ちよこつと不安ですが、第二十八話です。

お気に入り登録数も伸びて、作者としても嬉しい限り。

評価ポイントが空想夢を越えれたら、個人的にはもっと嬉しいかな。

それと、このお話内の外伝を考案してます。

といっても、オレの大好きなキャラを無理やり出そうとしてるだけなんですが……w

そして、次回更新は12月18日予定となります。

オリジナルも頑張らないと！

では、待て次回。

第二十九話 人妖無用の銭湯を

「……普通、こういう展開は逆だと思っただけど」

着替えを済ませ、水織は事務所でごしごしと乱暴にタオルで髪を拭いていた。

まさか穰子に着替えを覗かれるとは思わなかった。まだ顔が火照っていて気恥ずかしさが残っているような気がする。

当の本人は真っ赤な顔を見せまいと顔を反らして事務所の隅で不貞腐れていた。

「別に、見たくて見たわけじゃ、ないわよ……」

「でも大変だったんだよ。雪だるまみたいに固まっちゃった水織君を助けるの。穰子と私とでボイラー動かして浴場の氷を溶かして、それからお湯を張ってさ」

「む……そ、そうだったのか。それならそうと早く言ってくれりやいいのに」

不貞腐れている穰子の方へと歩いていくと穰子が振り返る。

ほんの少し恥ずかしくて、水織は頬を掻きながら少しだけ視線を反らしながら言った。

「あ、ありがとな。そうとも知らずに叫んじまって悪かったな」

「……い、いいよ。私も、ノックとかすればよかったんだし……」

「静葉もありがとな」

「うっん。どういたしまして」

思えば、この姉妹には何度もお世話になっっているような気がする。そのうち何かでお返しをしなければ、と頭の片隅で考えつつ、水

織は先刻のチルノとの出来事を思い出していた。

「……そういえばさ、この幻想郷っていろんな人がいるよな」
「えっと、突然どうしたの？」

水織のような普通の人間もいれば、秋姉妹のような神様もいる。
勇儀のような鬼も、紫やルーミア、小傘のような妖怪に、チルノのような妖精。

水織は改めて、この世界には人妖様々な人々が生活していることを実感した。

十人の人がいれば、十通りの需要^{ニーズ}がある。

それは妖怪や妖精だって同じことだろう。つまり、水織が言いたいことは――

「つまりさ、妖怪には妖怪の銭湯を、妖精には妖精の銭湯が必要なんじゃないかな」

いつか見た二人のように、我慢比べしたい人もいるのかもしれない。

チルノのように、特殊なお風呂を楽しみたい妖怪や妖精もいるのかもしれない。

水織が今いるここは幻想郷なのだ。

外の世界と同じような銭湯を経営しては、外の世界と同じ人しか楽しむことが出来ないのではないか。

ついさっき自分がチルノに言った言葉が思いもよらないところで返ってきた。

このままでは不公平なのだ。

水織の提案に、しかし静葉と穰子の表情は難色を見せた。

「だけど、それは難しいと思うよ水織君。水織君はともかく、里の

人は妖怪を怖がる人だっているんだよ」

「その逆も然り。隙あらば人を襲うのが妖怪の本分なんだし、逆に人を苦手とする妖怪もいるんだし」

「そこは……ううん」

水織が描いた人妖無用の銭湯はそう簡単にはいかないらしい。

確かに水織も何度か襲われ命を狙われている妖怪と一緒に風呂は遠慮したい。いや、美人の妖怪なら一向に構わないが、里の人や子供の場合はそうもいかないだろう。

「……まあ、この話は追々でいいや。とりあえず今日はもう寝る。明日はにとりのともう一回行かなきゃいけないし」

部屋を出てから布団に入るまで、水織は幻想郷の住人全てが平等に銭湯を楽しめるアイディアは無いものかと考え耽っていた。

・
・
・

「人と妖怪と一緒に……？」

翌日、不可思議な機械が並ぶにとりの自室。

水織は昨日静葉や穰子に話したことをにとりにも話してみた。

特にこれといった理由はなく、ただ一人の妖怪の意見を単純に聞いてみたかったのだ。

「そうだなあ。私は人間が大好きだし、別にそういうのは気にしないよ。むしろ私はもっと盟友らしく、仲良くしていきたいと思うるし」

「ふむ……」

「そ、それにまあ……その、水織とだったら別に一緒にでもいいし……」

「一緒？ 何が？」

「え、ええ？ いや、秋の湯に混浴施設でも作るって話じゃ……？」
「紫さんと混浴だって！？ 是非ともお願いしがっはああ！？」

背骨に鈍痛が響き水織が前のめりにヘタレ込む。ちょうど絵文字でいう乙、みたいな感じになった。

その背後で穰子が拳を握りしめながら顔を紅潮させている。

「こ、混浴なんて水織には早いわよ！」

「どういう意味だ！？」

「は、ははは……」

乾いた笑いを浮かべながら、にとりはこのそりため息についてサウナの設計図を広げた。

秋の湯をこれ以上増設するのは若干難しいので、サウナは本館で
ある秋の湯とは別に隣に新しく建物を作り、そこをサウナ専用の建物とすることにした。これなら連絡通路で繋ぐだけで秋の湯から直通で利用できる。

「ただ、ちよつと時間が掛かつちゃうし、予算とかまあ……色々だね」

「……そういえば、秋の湯の利益ってどうなってるんだ？」
「はい、帳簿」

手渡された帳簿を適当にぺらぺらと捲ってみる。

思いの外儲かっているらしくほとんどが黒字である。ただ気になるのが、所々に“所場代”と赤く線を引いてあって幾らかマイナス

の部分がある。

「……おい、この所場代って何だ」

「実は紫さんが『この建物は私が見つけてあげたでしょう？　だから時々銭湯の売り上げを所場代として少し貰うわね』って」

「あれじゃヤクザよヤクザ。銭湯をやらない？　って持ちかけたのは向こうなのに」

「でもまあ、悪女ってのもあつたあああ！？」

穰子の鋭いローキックが水織の泣き所を貫く。

飛び上がる水織を放って穰子がにとりの設計図を指差した。

「これ、どれぐらい掛かりそう？」

「仲間たちと一緒にでも、最低三日は掛かりそうだよ。その間はお休みだね」

「まあ仕方ないか。だけど、その間暇になっちゃうから……」

そこに静葉が顔を出し、小さく微笑を浮かべた。

「じゃあ、穰子にお留守番お願いしてもいい？」

「へ？　留守番？」

「ほら、前に言ったでしょ。私と水織君で山に行くって話」

「……あ！」

前に話していたことを思い出し穰子がハッと顔を上げる。当然にとりは事情を知らないし、水織は遠くで痛みに悶絶している。

「だ、だからお姉ちゃん一人で行けばいいのに、どうして水織を巻き込むの！」

「巻き込むだなんて人聞きの悪い。私はただ水織君と一緒に出かけ

けしたいだけだよ」

「だ、だけど秋の湯の方は」

「秋の湯はサウナ作るからお休みだよ、にとりちゃん？」

「う、うん……」

静葉の穏やかだが、重ブレッシャー圧を感じさせるような笑顔に気圧され、にとりはコクコクと頷くことしか出来なかった。

そのまま穰子にも同じ笑顔を向けるが、僅かにたじろぐだけでどうにか踏みとどまる。

「だけど念のため、穰子は秋の湯でお留守番」

「や、やだよそんなの！ それに水織だって妖怪の山の調査何か興味無いと思うよ？」

「じゃあ……水織く〜ん」

「ん？ 何……うおッ？」

脛の痛みから解放され安堵した水織が振り返ると、目の前に静葉の張り付いたような笑顔が迫って、次いで穰子も接近してくる。

「水織君、私と一緒に行く？」

「は？ 行くなって何処に」

「水織、私と一緒に留守番！」

「いやあの……どうした、お前ら？」

鬼気迫る二人の表情を見て、頬に冷や汗を一つ垂らす。

よくわからないが、何か決断を迫られている。それが何なのかわからないので決めるに決められないのだが。

困惑する水織に、にとりが遠くから助け船を出してくれた。

「サウナ作るから銭湯は休みだろう？ だから出来上がるまで何す

るかって話で」

「私と一緒に妖怪の山に行く？」

「留守番！」

「……というわけさ」

「はぁ……よくわからんけど、オレはどっちでも」

『どっちか決めて!!』

恐ろしい剣幕にビリビリと体が震え、思わず腰を抜かしそうになった。

話によると、静葉と一緒に妖怪の山に向かうか、それとも穰子と一緒に留守番をするかの二択。

「じ、じゃあ……そうだな」

ほんの少し考え、決める。

サウナが出来上がるまでの間、水織は――

第二十九話 人妖無用の銭湯を（後書き）

これにて第三章終了です。

ううん、長かった。

今後の展開はどうしていこうか……

それと、そろそろお正月外伝とか考えておいた方がいいかな？

いつも読んでくださる方々、ありがとうございます。

評価ポイントも上がっていて嬉しいです。

感想、コメント、お待ちしております。

次回更新は12月21日予定です。

では、待て次回。

第三十話 秋姉妹の秘密

「……で、結局三人で妖怪の山に行くのね」

真つ青な秋晴れの下、穰子は不満げな表情を浮かべながら山の中腹へと向かう山道を歩いていた。隣には姉の静葉が、その後ろに水織が続いている。

「別に嫌なら留守番しててもよかったのに」

「留守番するより、一緒に動いてた方が楽しいしな。穰子だって家で一人で残るのも嫌だろ？」

「だから水織が残ってればよかったのに……」

先日、というか昨日。

サウナ増設の話の後、何故か水織は姉妹に迫られ、穰子と一緒に留守番をするか、静葉と共に妖怪の山を調査するかという二択を強いられた。

正直水織はどっちでもよかったのだが、せつかく出かけられるなら皆で行けばいいと水織は提案した。

そして現在に至るのだが、何故か両名とも若干機嫌が悪い。

朝に待ち合わせをせずと二人の間にピリピリとした空気が漂っていて、水織は訳がわからず少し気まづかった。

そんな気まづさを紛らわすため、水織は静葉に訊ねた。

「そ、それでさ。妖怪の山の調査って言ってたけど何を調査するんだ？」

「水織君が幻想郷こっちに来た時にね、山の紅葉が気になったの」

「紅葉って……」

前後左右、その目に映るは紅一色に染まった森。

傍から見ても何の問題もなく葉は色づき秋らしさ満載なのだが、これの一体何処が気になったというのだろうか。ひらり、と水織の手に舞い落ちるイチヨウの葉も見事に黄色く染まっている。

「……気のせいじゃないのか？ このイチヨウだってちゃんと色付いてるじゃん」

「信仰は秋の湯のお陰で回復してるんだし、もう大丈夫だと思うよお姉ちゃん」

「……でも、やっぱり気になるから見に行くの。ほら、穠子も水織君も歩いた歩いた」

中腹を過ぎたところから山道は徐々に険しくなっていき、山道も獣道のようにほとんど手つかずの状態になっていた。

傾斜のきつい山道をスコップで杖代わりにして進む水織。ふと、水織は先を行く二人に再び訊ねた。

「なあ。そういえばお前らの神社ってあるんだよね？」

何気ない水織の問いに、静葉と穠子の歩みが同時にピタリと止まる。

そうとも知らず水織は歩き続け、穠子の背中に額をぶつけてしまった。

「うおっと。お、おい。どうした？」

ピタリと止まったまま、二人とも時間が止まってしまったのかのように動かない。

神社のことを聞いてはいけないのだろうか。二人の琴線に触れてしまったような気がして、せっかく紛らわせていた気まずさが戻っ

てきてしまった。

どう声をかけたものか、水織が悩んでいると静葉がゆっくりと振り返った。

「……静葉？」

「その、別に隠してるつもりじゃないんだけど……」

「……？」

少し遅れてから穰子も振り返る。

指で頬を掻きながら、明後日の方向を見つめながらぼそりと呟いた。

「……あのね水織、笑わないでくれる？」

「へ？ ……あ、ああ」

「そのさ。実は私たち……」

穰子が人差し指同士をちょんちょんと合わせる。

それは子供がいじけたり恥ずかしそうにしたりするあの仕草だった。

「私たち、自分の神社の場所……忘れちゃってさ」

「……は？」

ポカンと口を開ける水織。

何を言っているんだこの神様は。いったい何処の世界に、自分が祀られているであろう神社を忘れる神様がいるというのだろうか。

「いやあの……冗談だよな？ だってお前ら、それって自分の家があるのに忘れたって言ってるのと同じじゃないか」

「えへへ……誠に恥ずかしながら、本当に忘れちゃったんだ……あ

「はは」

「じゃあ、今までどこに寝泊まりしてたんだ？」

「それは……ほら、安全そうな大木の洞とかで寝泊りを」

「ホームレス神様！？」

大仰に天を仰ぎ額に手を当てる。

こんな神様ってありなのだろうか。自分の家を忘れた神様に、よくもまあ信仰とやらが集まったな。

水織は嘆息しながら、苦笑する姉妹を交互に見やった。

「……それでよく神様やってるよな」

「アハハ……返す言葉もないや」

「そ、そんなことはさておいてさ、調査だよ調査。私たちは妖怪の山の調査に来たんだから」

ふわり、と静葉が宙に浮かび上がり大木の葉を注意深く観察する。同様に穰子も周辺の木々の合間を飛んで何やら作業を始めていた。何をやっていいのかわからず、水織は見よう見まねで作業をしていく。

「……紅葉がどうかって、オレにはよくわかんないんだけどなあ」

イチヨウやモミジを指でくると手で回しながら、水織はぽつりと呟いた。

・
・
・

一方、そのころ。

人里の商店で一人の少女がペンを片手に店主と話を交わしていた。

「はあ……なるほどなるほど。つまり、供物などは収穫祭の時に手渡すばかりで、社に直接奉納したということはないのですね」

「そうだよ。あの方々はいつも気の良い人たちで、我々と一緒に収穫祭を楽しんでくれるからね。そんな神様が銭湯をやるだなんていうのはビックリしたけど、銭湯っていうものもすごく快適でこれまた驚かされたよ」

「ふふ。流石は外の世界の文化ということだけです」

「だけど、何でもまたそんなことを聞くんかい？　そういう祭事のことならうちみたいになしけた商店なんかより、神社とか稗田家のお屋敷に聞いた方が早いんじゃないかい？」

「いえいえ、そんなことはありませんよ。それに彼女たちは里の人たちと密接な関係を築いていますからね。こうやって私が直接里の皆様方に訊ねて回った方が確実なんです。百聞は一見に如かず、ってヤツです」

インタビューした内容を手帳に素早くメモすると、簡単な謝辞を述べ少女は漆黒の翼を広げ秋空へと羽ばたく。

少女、射命丸文は空の上に漂いながら、里で入手した情報を簡潔にまとめていく。

収穫祭を開くのに拘らず、意外と明かされていないその素性。里の人からの供物は全て、収穫祭で降るまい社に奉納するということはしない。

そもそも、彼女たちの社の有無すらわからない。

「『謎に包まれた秋姉妹』これはなかなか面白い記事が書けそうですね」

新たな記事を手にした文は上機嫌でメモを閉じると、自宅兼作業場のある妖怪の山へと戻っていく。

妖怪の山の奥、この山を支配する天狗たちの拠点から少し南下し

た場所に、射命丸文の作業場がある。

大木の上に作られた作業場の戸を開くと、デスクの上にメモを放り投げて特製のタイプライターを用意し、ついでに助手を呼ぼうとして、止めた。

「おっと。いけないいけない。彼女は今出張中でしたね。作業は私一人でこなしませんと」

今はいない部下の存在を思い出し、文は集めた資料を片手に素早くタイプライターで文章を作っていく。

大きく目立つ見出しに、その内容を深く掘り下げていく本文。手製の新聞作りは若干の難こそあれど、慣れた彼女の手には掛ればものの数分で出来上がってしまう。

出来上がったばかりの新聞のチェックをしていると、その新聞が突如ひよいと持ち上げられた。

「相変わらず早いわね」

「わ！ 誰です……って、紫さんですか」

何時の間に現れたのか、文の背後で八雲紫が出来上がったばかりの新聞をしげしげと見つめていた。

「……相も変わらずホントがウソなのか曖昧な記事ね」

「失礼な。私はこの幻想郷の真実しか記事にはしませんよ」

「真実……ねえ」

真実という言葉に紫が眉をひそめる。

記事を見たところ、内容は今まさに秋の湯を経営している秋姉妹の記事がほとんどだった。

「あ、そうだ。紫さんは彼女たちの神社とか、そういった類の建物のことは何か御存知ですか？」

「さあ…… そういえば聞いたことないわね」

「不思議ですね。神様なのに、自分の社がないだなんて。里の人たちも知らないみたいで、そもそも存在しているのでしょうか？」

「知りたいのなら、調べればいいじゃない。私は特に興味がないからパス」

「……ところで、アイツは元気にやってるんですか？」

ふと、文は幻想郷から飛び出していった部下のことを紫に訊ねる。どうやら紫はそのことを報告に来たらしく、文の反応を見てクスリと微笑を漏らした。

「ええええ。元気にやってるみたいよ。慣れない環境に四苦八苦し
てるでしょうけど」

「だけど、どうしてまたアイツを？ 個人的に私が向こうに行つて
みたいなあと思ってたんですけど」

「ふふふ。これは私の気まぐれ。特にこれといった理由なんてない
わよ」

「はあ……」

「気になる？ あの子のこと」

「そりゃあもちろん、上司としては心配です。人様に迷惑をかけて
いないだろうか、とか色々」

「…… 貴女の口からそんな言葉が出るなんて、意外ね」

「失敬な」

適当な報告の後、紫はその場で右手を薙いですき間をこじ開けるとそつと踏み出した。

そして一度文を振り向き、悪戯っぽい笑みを浮かべ口の端をつり上げた。

「心配なら、素直に言えばいいのに」

「へ？ な、なんのことです？」

「ふふ。まあいいわ。また何かあれば報告してあげるから」

そう言ってすき間を閉じると、作業場に静寂が広がる。

椅子に思い切り体重を預け、文は窓の遠くに広がる青い空を見上げた。

「……ううん。ホントに彼女で大丈夫だったんでしょうか」

遠く広がる青い空。

今自分が見上げているこの空と、向ここの世界の空と繋がっているのだろうか。

そんな柄にもないことを思いながら、文は再び作業に戻った。

第三十話 秋姉妹の秘密（後書き）

こつから第四章。

お話は銭湯から、秋姉妹の方に移り変わるようで……？

そして文と紫が話していた、向こうの世界に行った者とはいったい？

相変わらずぐだぐだと進んでおりますが、それでも読んでくれる人がいて嬉しいです。

感想ご意見等、お待ちしております。

次回更新は12月24日予定。

では、待て次回。

第三十一話 水織の恩返し

妖怪の山の調査を終え、それから数週間が経過した。
現在十一月半ば。

北に臨む妖怪の山は、未だ赤く染まるところ在れどその紅は徐々に失われ始めていた。

「紅葉……ねえ」

そんな妖怪の山を眺めながら、水織がふと呟く。

前回の調査では結局何の進展もなくそのまま調査を切り上げてしまった。

穰子は考え過ぎたと姉を笑い、しかしその静葉は今でもしきりに妖怪の山を確認しに出かけたりしている。

相変わらず成果はないようだが。

「……ふむ」

「あら、どうしたのよ水織」

声の方に振り返ると、赤と白の巫女服姿の少女が突っ立っていた。
この里から少し離れた場所にある博麗神社の巫女、博麗霊夢。

心配している、というよりは好奇の目を向けているといった感じだった。

「アンタでも呆ける時があるのね。何を考えていたの？」

「いや、そんな大したことじゃないけど。てか、霊夢こそこんなとこで何してんだ」

「ん」

霊夢は片手にぶら下げていた小さな袋を示してみせた。中身の程はわからないが、恐らく人里まで買い出しに来たということだろう。

「年がら年中神社にこもってるわけじゃないもの。たまにはこうして必要なものを買うために外出もするわ。前にアンタんこの銭湯を借りに来たでしょ」

「まあ、そりやそうだよな。……あのさ」

数瞬迷った後、水織は霊夢にこんなことを訊ねた。

「霊夢は、静葉や穰子の神社って知ってるか？」

「焼き芋姉妹の神社？ ……ううん」

顎に手を当て思考するが、やがて小さく首を横に振った。

「……いいえ。でも、アイツらの神社だなんて聞いたこともないわね。それがどうかしたの？」

「いや、この前妖怪の山に行った時にそんな話をしたからさ。私たちは自分の神社を忘れちゃっただなんてあっけらかんに言ってる」

「ふうん……」

「ふうんって、それだけかよ？ 他にもってこう、ないのかよ？ 探してやろうとかさういう……」

「何で私が？ 頼まれたわけでもないのにそんな面倒なことを」
「面倒って……」

存外冷たい霊夢の態度に水織は心底驚いた。

もつところ、巫女と言ったら清らかで優しいんじゃないのか。

それなのに目の前の巫女と言ったらまるで関心がない。良心は全てその腋から漏れ出て消えてしまったのか。

水織の不服そうな視線に気づいた霊夢は軽く眉を上げ、今度は逆

に水織の方に訊ねた。

「そっちこそ、急にそんなこと聞いてどうしたの？ アイツらの神社何か探して何をするつもり？」

「べ、別にどうこうしようってわけじゃないさ。ただ……」

一拍置いてから水織が言葉を続ける。

「オレ、こつちの世界に来てから静葉たちに世話になってばっかだからさ、少しぐらい何か恩を返そうと思って」

「それで恩返しに神社探してわけ？」

「恩返しってほど大袈裟なものになるかは、わからないけどな」

「……そうねえ」

再び思考するポーズ。

やがて妙案が浮かんだのか、あ、と小さく声を漏らした。

「古い文献とかそういうので調べたらどう？ 寺子屋をやってる慧音は知ってる？ アイツなら幻想郷の歴史をほぼ知り尽くしてるから何か聞けるかもよ？」

「慧音先生……」

そういえばチルノの乱闘の所為で、寺子屋の子供たちにペンキ絵を書いてもらう事が出来なかったのを思い出す。

前回の侘びも兼ねて一度挨拶に行こうと思っていたから、ある意味都合がいいかもしれない。

それに、未だペンキ絵は白紙のままだし。

「寺子屋はここから北の方角よ。近くに立て看板でもあるからすぐわかるはずよ」

「わかった。慧音先生のところに行ってみるよ。ありがとな、霊夢」
「……別に、礼を言われるようなことしてないわよ」

頬を指で掻きながら、霊夢はそそくさと神社の方へと向かってしまった。

ひとまず、やることが決まった。

「よし、それじゃ慧音先生のところに行くか」

静葉と穰子には少し出かけるとだけ伝え、水織は早速慧音の寺子屋を目指して歩き出した。

・
・
・

秋の湯からちょうど北に向かって数分後。寺子屋を示す立て看板がすんなりと見つかり、水織は今寺子屋の玄関に立っていた。

「ここが寺子屋……」

大きさは秋の湯ほどとまではいかないが、横長に伸びた日本家屋といったところ。

玄関のすぐ傍に小道があり、どうやら縁側に繋がっていて微かに文机が並んでいるのが見える。恐らく授業を行っている教室だ。そこから子供たちの元気の良い声が聞こえてくるので、授業の真っ最中なのが窺えた。

「流石に授業中にお邪魔するってのもアレだよな。どうしたもんか……ん？」

玄関の奥から足音が聞こえ、水織は何故か慌てて近くの植木の裏

側に身を隠した。

戸口から出てきたのは、何処かで見覚えのあるような銀色の髪の少女だった。

「あれ、確かこの前弾幕勝負してた……」

顔だけ覗かせ少女を観察していると、水織の気配を感じ取った少女が振り返る。

「誰だッ」

「は、はッい!？」

思わず飛び上がり姿を晒した水織に、少女は一瞬驚いたような表情を見せ、それから口を開く。

「お前……？ 確か、銭湯の」

「そ、そうです。草津水織、そういうアンタは確か、妹紅……だったけ？」

如何にも、とふんぞり返っていたわけではないが、若干水織よりも高身長なせいか少し威圧されているような気がした。

「ああ。寺子屋に何か用なのか？」

「え、まあ……はい。ちよつと慧音先生に聞きたいことがあって」「慧音に聞きたいこと……？」

呼び捨てにしているということは、親しい間柄なのだろうか。

慧音も同じような銀髪をしているから、もしかしたら家族だとか、親戚関係なのかもしれない。

水織がそんな妄想を膨らましていると知ってか知らずか、妹紅は

小さく唸った後ちよいちよいと手招きした。

「立ち話も何だ、上がったらどうだ？」

「あ、はい。お邪魔します」

この寺子屋は彼女、妹紅の家でもあるのだろうか。

何の遠慮も無しに履物を捨てて上がり込んでいく妹紅を追いかけ
ていくと、突き当たった場所に応接室のような場所に着いた。

そこで待つように、と妹紅は一言だけ言い残してから何処かへと
消えてしまった。

座布団の上で律儀に正座して待っていると、ほんの数分後に妹紅
が慧音と一緒に戻ってきた。

「やあ。待たせてすまないな」

「いえ、今来たところですので」

妹紅が茶を用意してくれたので水織は遠慮なく一口いただく。

そういえば、幻想郷の食べ物や飲み物はほとんど元いた世界と同
じようなものばかりだ。

このお茶も昆布茶という何とも渋いチヨイスである。

水織は特に茶に好き嫌いがあるわけではないので美味しくいただ
けた。

「それで、私に何か用かな？」

「は、はい。えと、まずはこの前のお詫びをと思って」

「お詫び……？」

「チルノの乱入で、結局ペンキ絵の話がお流れになっちゃって。も
うちよっと、こっちがしっかりしてれば」

「いや、それなら此方にも責任はある。彼女もまたこの寺子屋で学
ぶ生徒の一人でな」

「チルノが、寺子屋に？」

少し苦い顔をしながら慧音が頷く。

「里の子供以外にも、時々だがチルノのような者に教鞭をとる時もある。ごく稀に、だが」

「へえ……慧音先生ってやっぱり凄いですね。美人だし知的だし、今すぐ結婚したいです」

「は？」

「いえ。気にしないでください」

どうも最近、自分の発言で墓穴を掘っているような気がする。軽く咳払いしてから水織は自分の目的を告げた。

「あの、実は聞きたいことがあって」

「ふむ。私に答えられることならお答えしよう」

「静葉と穰子の神社のこと、何か知りませんか？」

「秋姉妹の神社？ それなら彼女たちに聞けばわかるのではないかな？」

「それが……」

水織が簡単に事情を説明すると、横で立ち聞きしていた妹紅が呆れたようにため息をついた。

「おいおい。祀られる神様が自分の神社を忘れたって？ そんな間抜けな話あるわけないだろう？」

「だけど全然知らないって言うんです。静葉はともかく、穰子は頭の中まで焼き芋なのかもしれません」

「それで、私に神社の場所を訊ねに来たというわけか。ふむ……妹紅、ちょっとアレを持ってきたくれませんか？」

「ん、わかった」

銀の髪を翻し妹紅が部屋を出ていく。

戻ってきた彼女の手には、やたらぶ厚くて大きな本が握られていた。

……あの本、タウ。ページで換算したら何冊分ぐらいになるのだろう。

「あの、それは？」

「この幻想郷の歴史を集めた文献だ。私が編纂してまとめたものだ」

表紙の先に広がる圧倒的な量の文章に、水織は思わずめまいを感じそうになった。

教科書や小説なんかとはレベルが違い過ぎるほどの文章量。これが全てこの世界の歴史全てを記したものだというのも、何となく頷けるような気がした。

パラパラとページをめくっていき、やがて慧音の指が止まる。

そのページには、何やら文章とは他に小さな地図が描かれていた。

「彼女たちの神社、あるじゃないか」

「え？ 何処ですか？」

「ここだ」

慧音が指をさした地図の一点、その場所には水織も覚えがあった。というより、そこは水織にとっては何度も行った場所であり、この世界に来て初めて目を覚ました場所。

「……妖怪の山、だな」

第三十一話 水織の恩返し（後書き）

突然ですが、次回の12月27日の更新を以て年内最後の更新とさせていただきます。

来年の更新日は、今のところ1月5日辺りを予定してます。

読者の皆様方には大変ご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ないです。

……その代わり、と言っては何ですが、今までのオリキャラで正月短編を公開する予定です。

こちらは、早ければ元日にでも第一話を公開できるかな。

もしかしたら活動報告でちよろつとメモったりするかも……？
そちらもお楽しみに。

では、待て次回。

第三十二話 水織、妹が出来る？

「それにしても、水織何処に行つたんだろ？」

秋の湯のカウンターで穰子はぼんやりと呟いた。静葉も帳簿を片手に小首を傾げる。

「水織君が出かけるって、何処にだろね」

「……本当は、銭湯がめんどくさくなつてサボってるんじゃない？
全くしょうがないヤツだね」

「でも、ちよつとぐらいいいんじゃないかな。水織君は外の世界の人間だし、まだ幻想郷が珍しいんだよきつと」

「水織が幻想郷に来てから、もう一カ月経つたんだよねえ」

「うん。時間が経つのは本当早いよ」

帳簿をパタリと閉じ、静葉がカウンターで頬杖をつきながらぼんやりと呟く。

時が経つのは早い。それが楽しい時で、あれば尚更に。

静葉は水織と出会ったときのことを思い出しながら、一度大きく伸びをしてから穰子に言つた。

「じゃあ、今日は私たちだけで頑張らないと。水織君は、お休みでいいでしょ？」

「しょうがないね。……あ、そういえばお姉ちゃん」
「なあに？」

満面の笑みを浮かべながら、穰子は静葉に告げる。

「そろそろ、収穫祭の時期だね」

・
・
・

一方そのころ、水織はというとスコップを片手にしながら妖怪の山入り口にいた。

空は晴天。雲一つない快晴である。

しかし、日差しこそあるものの晩秋の風は冷たく、水織の体を容赦なく凍えさせる。地図を持つ手までもがふるふると震えていた。

「……コートとか、マフラーとか、そろそろ防寒具が欲しいなあ」

秋の湯の収入から少しばかり頂戴出来ないだろうか。そうすれば霖之助の店で何か買えると思うのだが。

マフラーとか手袋、あと耳当てとかホツカイロ、ついでに温かいココアとか……しかし、脳内で思い描いても別段暖かくなるわけもなく、水織の傍を虚しい風が吹き抜けていく。

「うう寒ッ。でも、早く見つけて静葉たちに知らせてやりたいし、頑張るとしますかね」

それが終われば、防寒具でも何でも揃えればいい。というか、普通に銭湯に浸かるのもいい。

早く神社を見つけて暖まろう。水織は気持ちを切り替え早速山道へと歩き出す。

何度も来たせいもあってか険しい斜面にも幾分慣れてきてその足取りは軽い。

一步一步着実に進んでいき——ふと、水織は足を止め振り返る。

「……………?」

一瞬、見られていたような気がして振り向いたのだが、背後には誰もいない。

今まで歩いてきた山道には舞い落ちたモミジやイチヨウがまるで絨毯のように敷き詰められていて、それ以外は特に気になるようなものはない。視線の主も、もちろん見当たらない。

「気のせい、なのかな」

仮にもここは妖怪の山。もしかしたら、また水織を狙う妖怪の類が潜んでいるのかもしれない。

念のためとスコップを握りしめ全方位に注意を向けながら再び歩みを再開する。

「しかし、妖怪の山ってだけあって広いよな……こんな適当な地図じゃしつかりとした場所がわからねえや」

慧音からもらった簡単な地図を広げ、自分のだいたいの位置を確認する。

慧音の情報によると、秋姉妹を祀っている神社は妖怪の山の東側にあるらしい。

山道をまっすぐ北に上り、中腹の辺りでコンパスを使って東を確認し、進む。

しかし、行けども行けども紅葉で彩られた木ばかりが立ち並ぶ同じような景色で、目的の神社など到底見えてこない。

持ってきた水筒も、気が付けば空になっていた。

同じ景色ばかり延々と続く所為なのか、だんだん方向感覚が麻痺しているような気がしてきた。

さっきまでは正常に動いていたコンパスの針は狂ったようにぐるぐると回転している。実際、狂っている。

歩き疲れ、水織は近くの木の根元に腰掛けるとはあと大きなため

息をついた。

「……疲れた。里から出て、どれぐらい経ったんだろう?」

日は中天をとくに過ぎている、ような気がする。

ハッキリとした時刻がわからないので、水織はそわそわと何だか落ち着かない。

冷たい秋風を頬に受けながらしばらく呆けていると、背後の方からさがさ、と草木を揺らす音が聞こえてきたので振り向く。

「……?」

視線の先に立つ人物も、今の水織と同じような表情を浮かべた。

お互いの顔にはハッキリと『コイツ、誰だ?』と書いてある。

水織の前に立つ人物は、白い道着のような着物に長い鼻が特徴的な赤い仮面を付けていた。さながらその姿は、妖怪の天狗のようにも見受けられる。

しばし見つめあい、沈黙。

先に口を開いたのはその仮面の人物だった。

「……貴様、何をしている?」

低い、重く響くような声。どうやら仮面の人物は男らしい。

水織は念のために立ち上がり、嘘偽りなく言った。

「えっと……神社を、探してます」

「それは、ここが何処だかわかって言っているのだな」

「は? いや、ここは妖怪の山……ッ!」

ヒュッ、と鋭く風を切り裂く音に水織はすかさず飛び退く。

いつの間に取り出したのか、目の前の仮面の男の手には薙刀が握られ、水織が今まで腰掛けていた場所に刃が深々と突き刺さっている。

もう少し反応が遅れていたら、真つ二つに両断されていたかもしれない。

「お、おい！ いきなり何するんだ！」

「侵入者は、排除する！」

「侵入者あッ！？」

迫りくる薙刀を寸でのところで回避し、水織は一目散に逃げ出す。侵入者ってどういうことだ？ 前に静葉と穰子と来た時は何ともなかったのに、何故今になって攻撃されなくてはいけないのか。

走りながら振り返り、水織は戦慄する。

仮面の男は木々の上をまるで獣のような速さで駆け抜けながらこちらに猛進してくる。

木々と木々とを吹き抜ける疾風のような男。常人であるとは到底思えない。まさか、あれが天狗とでも言うのだろうか。しかし、前に見た新聞記者の天狗とやらは仮面など付けてはいなかったが。

「うおっとお！？」

突如悪寒を感じしやがみ込むと、水織の頭上を薙刀が通り過ぎ大木に突き刺さる。

と同時に、仮面の男が突き刺さった薙刀の上に器用に着地していた。

「哨戒の任を任された以上侵入者を逃すわけにはいかん、覚悟ッ！」
「う、く……うわあああッ！？」

立ちはだかる男の手が発光し、荒れ狂う暴風が水織に襲いかかる。山の地形を破壊しながら吹き荒れる風は水織をいとも容易く吹き飛ばし、大木にその身を叩きつけられた。全身が軋む。

肺の中の空気を無理やり吐き出され、水織は一瞬意識が遠くに消されそうになるがどうにか堪えた。

叩きつけられてもスコップを手放さなかったのは幸いだった。杖代わりに立ち上がり、男の方を静かに見据える。

男はほお、と少し感心したような声を漏らした。

「ただの人間にしては頑丈なヤツだ」

頭が微かにふらつくがそれも気合いで捻じ伏せながら右手でスコップを構え、左手をそつとジャンパーのポケットに忍ばせる。

弾幕勝負以外でも使えるかどうかかわからないが、使わないで死ぬよりは幾分マシだ。

水織は男を睨みながらゆっくりと後方に距離を取ろうとして――すかさず男が動いた。

「逃がすか、喰らえ！」

再び襲いかかる爆風。

地面を深く抉るように突き進む風を前に、水織は左手で掴んだ術符を構え叫ぶ。

「貫符『イッケッテンラ一穴点螺』」

発動した術符を、水織はそのまま襲いかかる風に向けてまっすぐ投げ入れた。

小さく発光しながら符は暴風の中心を貫き、やがて暴風の真ん中

に大穴を開けた。

激しい暴風の中に突如出来上がった無風の空間。それはいわゆる台風の日と同じものだった。

出来上がった大穴から抜け出し逃走を図ろうとして——しかし、その先に仮面の男が仁王立ちしていた。

「な……ッ!？」

「逃さんと、言っただろう」

大きく振り上げられた薙刀の刃が水織に迫る。至近距離の攻撃に、水織は成す術がなかった。

ここまでかと諦めかけた瞬間、水織が目をギュツと瞑る前に、突如世界に闇が落ちた。

「な、何だこれは!？」

「え……? 何も、見えない……?」

狼狽した男の声から察するに、水織やこの男ではない誰かの仕業だとわかる。

しかし、一体誰が? 何のために?

水織が思考しようとした瞬間、何も見えない闇の中から腕を掴まれ思考が中断される。

「お兄ちゃん、こっち!」

「お、お兄ちゃん?」

闇の向こうから聞こえる声と、腕に伝わる不思議な温もりに逆らえず、水織は声の主と思わしき者の腕に引かれ走る。

「ど、何処だ貴様! 面妖な術なんぞ使いおって! 出てこい!」

焦りの声と、我武者羅に薙刀を振るう風切り音を遠くに聞きながら、水織は闇の彼方へと姿を消していく。

……どれくらい、走っただろうか。

腕を引く力がだんだんと弱くなり、その感触が消えたと同時に闇が瞬時に晴れた。

陽の光に眩み、一瞬視界が白くなりかける。

しかしそれも一時的なものだったらしくすぐに慣れて視界が元に戻っていく。

視界の先、水織の腕を引っ張っていたであろう人物の姿がゆつくりと浮かび上がる。

漆黒の衣服に、それに相反して輝く金色の髪の少女。

それは一度水織に襲いかかり、そして霊夢に返り討ちにされ水織が助けた、いつか見た妖怪の少女。

「お前、たしかルーミア……？」

「えへへ。助けに来たよ、お兄ちゃん」

にぱーっと天真爛漫な笑みを浮かべながら、ルーミアは水織の腕の中に飛び込んできた。

第三十二話 水織、妹が出来る？（後書き）

夜『はい、モブ天狗さんご苦労様でした。あなたのお仕事はこれで終わりです』

天狗『ちょ、おま』

ということで、泉遊録、今年最後の更新となります。

それで年末年始についてですが、二つほど外伝を予定しております。一つは忘年会。もう一つは初詣です。

ただ、忘年会の方はお話というほどのものではないので、活動報告でやるお遊び的な感じですよ。

忘年会は今年ラスト、初詣は1月3日を予定としております。

泉遊録に関する感想コメント等、これに限らず他の作品へのご意見などなど、いつでもお気軽にどうぞ。
では、待て次回。

第三十三話 滝の上の廃れた社

「え？　ここって普通の人間とか入っちゃダメな場所だったのか？」

緩やかな傾斜の山道を歩きながら、水織は腕にしがみつきながら歩くルーミアに驚きの混じった声音でそう言った。

「そうだよ。ここはさっきの天狗たちが管理統括している場所で、本来は外部からの侵入者を許さない場所なの」

「いや、でも前は……」

と思い出してみたが、前は神様である静葉と穰子の二人が一緒だったから天狗の方もとやかく言わなかったのだろう。

それにしてもルーミアはどうしてこんな場所に？　と水織が素朴な質問を投げかけると、

「だって、お兄ちゃんが一人で妖怪の山に入るの見たから心配で様子を見に来たの」

「そうか。……てか、さっきからそのお兄ちゃんって何なんだよ？　いつオレはお前の兄貴になったんだ？」

もじもじと、ルーミアは小さな手を絡み合わせながら腰をふりふりつと揺らす。

危ないお兄さんやおじさんやらが見たら即捕縛したい衝動に駆られるだろうが、水織はまるで関心のないような、むしろ若干ウザったく思つかのように顔をしかめる。

ルーミアは小さく口を開き、耳を澄まさないと言き逃してしまいそうな声量で呟いた。

「こ、この前助けてもらったでしょ？　それで、その、あれから色々気になっちゃってね。それで……」

頬を染め恥じらいながら言葉を紡ぐルーミアのその姿は、初々しい恋人かのようにも見える。当の水織にはそういった感情は微塵もないので、無感情な視線は明後日の方向を向いている。

「命の恩人に、呼び捨てじゃ失礼だと思って、だから感謝の意味を込めてお兄ちゃんと呼んでみたんだけど……ダメ？」

トドメの上目づかい。しかし、水織はあまり興味なさそうにチラと横目でルーミアを見るだけ。ほんの数秒沈黙が流れ、水織は気恥ずかしさから小さく頬をかいた。

「まあ、いいか。お前の好きなように勝手に呼んでくれ」

「わーい！　ありがと、お兄ちゃん」

「……お兄ちゃん、ねえ」

年下の兄妹というのはどうもむず痒いような気がする。それがましてや妖怪となれば尚更か。水織は気を取り直し妖怪の山を進んでいく。

「ねえ、お兄ちゃんは どうして妖怪の山に？」

「ん？　神社を探してるのさ」

「神社……？」

紅葉が薄れつつある木々の間を縫うように進みながら水織は答える。

「静葉と穰子、お前らの間じゃ秋姉妹って呼ばれてるんだっけ？」

あの二人の神社を探してるんだよ」

「そーなのかー……」

「ルーミアは何か知らないか？ この辺りにそういう建物があるとかさ」

「ううん……妖怪の山はよく遊びに来るけど、神社なんて山の上の守矢神社しか知らないなあ」

「守矢神社……？」

聞いたことがあるようなないような……思い出した。前ににとりを見せてもらった地図にそんな名前の神社が書いてあったのような気がする。確か水織と同じく外の世界から来た神様と巫女がいる神社だったか。

「でも、そこつてもう神様とかいるんだろ？」

「うん。この山の神様の神社だからね」

「じゃあ違うな……」

慧音の地図は山の東側に印が付いている。あの地図通りなら守矢神社は妖怪の山の頂上辺りのはずだから、今水織が探している神社とは関係はないはず。

とはいえ、土地勘がないというのは不便なものだ。やはり静葉たちと一緒に探したほうがよかっただろう。すると、上目遣いのルーミアが訊ねる。

「お兄ちゃん、その神社探してどうするの？」

「え？ 神社探して、それから……」

そういえば、今の今まで神社を見つけた後のことを全く考えていなかった。

静葉たちに報告してそれで終わり、では何だか物足りないという

か何というか。

「それは見つけてから考えるよ」

「ふうん……じゃあ、私も神社探すの手伝うね」

「は？ いやでも」

「いいでしょ？ 前に助けてもらったお礼がしたいし」

「お礼つて、さっき助けてもらったばかりで」

「あれだけじゃ、私の気が済まないよ。お兄ちゃんは命の恩人なんだよ？」

そこまで言われて無下に断るのも悪い気がして水織はこくと小さく頷くと、パツと花開くようにルーミアは笑顔を浮かべた。

「えへへ。頑張るからね」

「おう。ところで、ここが何処だかわかるか？ 天狗から逃げるのに夢中になって自分が何処にいるんだかわなくなっちゃってな」

「ここ？ ここはえっと……」

くるくる、三百六十度ぐるっと回って視線を巡らせ、ルーミアは力強く頷いた。

「わかんない！」

「……すまん、帰ってくれ」

「え、ええー！？ ま、待ってよお兄ちゃん！」

「くそう。さっきの天狗から逃げるのに夢中になって迷っちゃったのか……」

たかが数度訪れた程度の人間が土地勘を得るわけもなく、水織は妖怪の山の中で完全な迷子と化してしまった。

陽は傾き始め、茜色の光が少しずつ妖怪の山に闇を落としていく。

夜は妖怪の時間。

夜闇に乗じて奇襲されたらひとたまりもない。というか目の前にも一匹妖怪がいるし、ある意味絶体絶命なのかもしれない。

水織がどうしようかと考えを巡らせた時、突然ルーミアがハッと顔を上げ遠く耳を欹てた。

「水の音……聞こえない？」

「水の音？ そんな音聞こえないけど？」

一応水織も真似して耳を澄ませてみたが、何も聞こえない。

恐らく妖怪の方が水織よりもずっと身体能力は高いから本当に何か聞こえているのかもしれない。

「どつち？」

「……あっち」

何の当てもない水織は半ば賭けのつもりでルーミアの指す方向に歩き出した。

這い寄るようにして広がる闇が水織の足元に少しずつ落ちていく。体に触れる空気も心無し冷たさを増していくような気がした。

歩き続けて、どれぐらい経っただろうか。

不意に目の前の木々の奥が開けたかと思うと、その先から濃いオレンジ色の光が差しきて一瞬だけ水織の目を眩ませる。

光の強さに慣れ目を開くと、そこはいつか静葉に教えてもらった九天の滝、その上部に水織は辿り着いたのだ。

轟々と唸りを上げる激流が真つ逆さまに叩きつけられる様は大迫力で、上から見下ろす滝というのも乙なものだと若干ずれた感想を抱いた。

「……ここ、前に静葉と穰子とで来た場所だ。ってことは、いつの

間にか戻っちまったってことか？」

それは幸か不幸か。いや、少なくとも知ってる場所に出れただけ幸運か。水織は地図を取り出し、自分のだいたいの居場所を逆算してみる。

「にとりの家の近くか？ ああもう、こんがらがってきた！ 東に向かつて進んだはずで、それで……？」

「お兄ちゃん、ちょっとちょっと」

くいくい、とジャンパーの端を引っ張るので首を動かすと、ルーミアが何処かへと指を指している。その方向には薄闇が広がっているだけで何も見えないのだが、ルーミアには何か見えているらしい。

「あれ、神社じゃない？ ほら、神社って鳥居がある建物でしょ？」
「……！」

ルーミアの指した薄闇の向こうへと駆け出す水織。紅葉を終えた木々が目立つ獣道を走り抜けていく。

その先には昏い、黄昏色に染まった世界の中にポツン、と朽ち果てた小さな社が建っていた。

周囲には何もなくなっかかりと、まるでそこだけ切り取られた別の空間のように空気が変わっていて、水織は思わず息を呑んだ。遅れてルーミアも水織の傍に追いつく。

「へえ……？ こんな場所あったんだね。私全然知らなかったよ……」

「あれ？ お兄ちゃん、どうかした？」

「ここ、何か変だ」

「何が？」

水織は周囲に視線を巡らせ一つずつ木々を指差していく。

未だ山の木々は皆一様に紅葉しているというのに、この場にある木々は枯れ葉だらけでほとんど丸裸の状態。

この場所だけ秋を通り過ぎて真冬を迎えたかのような有様だった。

「まだ冬じゃないのに、ほとんど枯れ果ててる。部分的に枯れるだなんておかしいだろ？」

「そう……なのかなあ？ 私はちよつとわかんない」

「社もボロボロ……これ、本当に静葉たちの神社なのか？」

本殿へと向かい、恐る恐るといった感じで内部を覗きこむ。

埃と枯れ葉まみれ、おまけに蜘蛛の巣だらけの寶錢箱。その奥には何に使うのかわからないガラクタの塊がぎっしり詰め込まれている。神社というよりかは、素直に物置と言ってくれれすんなり頷けそうだ。

「ここ最近人が来た気配は無し……か」

「この鈴、鳴らないね」

ルーミアの言うとおり鈴緒はいくら振つてもちつとも音が鳴らない。中身が無くなったのだろうか。鈴緒から手を離すと案の定埃まみれになった。

神社のあまり惨状に水織は落胆し、静葉たちにどう報告したものかと悩み頭を抱える。

「……ここまで酷いと、二人に教えたらガツカリさせるってレベルじゃないよなあ」

静葉なら気絶したりするかもしれないし、穰子なら逆ギレ起こして蹴っ飛ばされる可能性まである。

しかし他にどうすることもできず、夕日が消えて影が落ちるように水織の心にも静かに影が重く押し掛かっていく。こんなことなら調べたりしなければよかったのでは？ そんな後悔や疑念が水織の中でぐるぐる渦を巻き始めた。

ふと、剥がれかけの壁板を見つめながらルーミアがぼそりと呟く。

「私に何か、物を直せる能力とかあれば恩返しできたのに……ごめんね、お兄ちゃん」

「いや、別にルーミアは何も悪く……？ おい、今何て言った？」

突然の言葉にルーミアは首を傾げ、同じセリフをもう一度呟いた。

「え？ だから能力があれば」

「違う、その少し前」

「ええっと、物を直す……？」

「それだ、それ！ シンプル且つ最高のアイディアだ！」

「はえ？」

水織はガバツと体を起こし一瞬で立ち直ると自信に満ちた顔でルーミアに迫った。

「修理、修理すりゃあいいんだよ！ 壊れてるなら直せばいい、簡単な話だ！」

水織の中で何かが動く。

気まぐれに巻き込まれ、何となくで今まで生きてきたが今ようやくここで自分がやるべきことを見つけたような気がした。

女の子に世話になったら三倍返し。恩に報いるのであるならば、静葉たちの神社を直してあげるべきだ。

意を決した水織は目印になるようにと自分のスコップを社の入り

口部分に突き立てると一目散に駆け出す。

「ま、待ってよお兄ちゃん！」

しかし、直すためには水織の力だけではダメだ。

これからの事を全て話すため、水織は宵闇に包まれた山道を一気に駆け下りて行った。

第三十三話 滝の上の廃れた社（後書き）

明けまして、おめでとうございます。

新年初の泉遊録、更新です。

今年も泉遊録をどうぞよろしくお願いします。

評価ポイント、お気に入り登録、ありがとうございます。

更新していないお正月の間にも読みに来てくれる人がいるみたいで嬉しいです。

また感想とかご意見貰えたらもっと嬉しいです。

次回更新は1月12日予定。

では、待て次回。

第三十四話 奇抜な激励

「へえ、あの子たちの神社見つかったの」

博麗神社の縁側でのんびりと茶をすする八雲紫に、水織は先日妖怪の山で見つけた神社のことを話していた。

「九天の滝の上の奥で見つけたんだ。今にも崩壊寸前だったけど」「よく見つけられたわね。もちろん、あの子たちにも教えてあげたんでしょ?」

「そりゃ、まあ……」

見つけてすぐに静葉と穰子に話して案内したが、ボロボロに朽ち果てた自分の社を見てショックを受けない訳がない。当然、二人とも社から帰った後は放心状態で水織としては見るに堪えなかった。

紫紺の瞳が小さく細め、隣に座る水織に視線を動かす。

膝の上で拳を握りしめ、唇をギュツと結ぶ水織の姿を紫は面白そうに横目で見つめた。

「それで、私に話って何か用かしら?」

紫の前だというのに、珍しく硬い表情の水織は意を決して口を開いた。

「秋の湯の、あの銭湯の売上金って勝手に使っちゃダメですか?」「理由は……聞くまでもないわね。神社の修復に当てたいのでしょう?」

思い返せば秋の湯は紫の言葉から始まった銭湯。謂わば紫が秋の

湯の社長のようなものだ。社長の許しも無しに勝手にお店のお金を使うことなどできない。だからこそ、水織は博麗神社へ足を運び紫に直談判に出たのだ。

紫が最初から快諾してくれるとは思わなかった。許可するとして、きつと何か条件付きで出すのではないか。水織は心の中でそう踏みながら紫へと強ばった表情を向ける。視線が合うと、紫はクスクスと体を震わせ微笑^{わら}いだした。

茶化されたのかと思った水織は思わず身を乗り出す。

「ゆ、紫さん……ッ」

「ふふっ、ごめんなさい。貴方、意外というか何というか、優しいのね」

「いや、優しいとかそういうんじゃない……ただ単にあの二人をどうにかしてあげたいと思って」

「それを優しいっていうのよ」

「……どう違うんですか」

これっぽっちも判っていない水織を見、紫は再度体を震わせ笑う。鈍感で自覚のない優しさ。傍から見たらそれは好意と映るのか、もしかしたら恋慕と映るのかもしれない。存外幼い少年の真心に紫を微笑ましく思った。

「ふふ、そういうことなら使ってもいいわよ。きっかけこそ私であれど、秋の湯は秋姉妹と貴方のお店ですもの」

「あ……ありがとうございますッ」

ほぼ直角に腰を折って頭を下げた水織は、そのまま縁側を飛び出し駆けて行ってしまった。

湯のみに残っていた茶を飲み干し立ち上がり右手を薙ぐ。開いたすき間の奥に歩き出そうとして、不意に目の前を横切った霊夢のし

かめつ面と目が合った。

「まーた勝手に上がり込んで」

「ケチケチしないの。それにしても、霊夢」

「何よ」

「若さつて、眩しいわね」

「はあ？」

眉間に皺を寄せた霊夢を残し、紫はそれだけ言つとすき間の彼方へと姿を消した。

・
・
・

「おい、二人とも！ 紫さんから許可貰つてお店のお金…… って才イ！？」

秋の湯に帰った水織を待ちうけていたのは、カウンターで頂垂れる静葉と穰子の姿だった。

溶けかけのスライムよろしくベツタリとカウンターに張り付く二人からは背後に真つ黒いオーラを吐きだしながらおまけにため息まです吐き出している。

「……終わった。私たちの役目はもう…… 終わり」

「今の私たちに生きる価値なんて無いのよ…… 死んだ方がマシなのよ……」

「ど、どどどどうしたお前ら！？ 静葉！？ 穰子！？ おい返事しろよ！」

ガタガタ揺すぶろうが、頭を叩こうが二人は全くの無反応。

「おーい、銭湯の点検に来たよ……ってわ！ もうそんな時期か！」

どうしていいのかわからず困惑する水織に、助け船の如く現れたのは工具箱を抱えた河城にとり。

「知っているのかにとり!?」

「知ってるというかまあ……その、彼女たちは“秋”の神様だからね。自分たちの司る季節が終わろうとすればそりゃ元気が無くなるもんさ」

「だからってこりやないだろ」

死んだ魚のような……というほど大袈裟ではないが、二人の乾いた双眸には何の光も感じられない。これでは秋の湯の経営が成り立たない。どうにかして元気を取り戻してもらえないかと、水織は助けを求める視線をにとりに流してみる。

「……な、何だよう」

「静葉と穰子を元気にさせる方法、何か思いつかないか？」

「二人を元気に……？ ううん……」

普通に落ち込んでいる程度であれば励ましたりとかすればいいのだが、ここまで秋の終わりと自分の社が崩壊のダブルパンチで落ち込んでいるとどうすればいいのかなど見当もつかない。

そこでにとりに訊ねてみたが、彼女も妙案は浮かばないらしくむむと唸ったまま動かなくなってしまった。

「ごめんよ。私じゃ何も出来そうにないよ」

「ふむ……そうか。しかし困ったな。二人が元気になってくれない

と、秋の湯の経営もままならないし今後の予定も……」

「今後の予定って？」

「ん。妖怪の山で静葉と穰子の神社を見つけたんだが、それを秋の湯の収入で修復しようと思ってさ」

「神社なんてあったんだ？」

「ずいぶん放置されていてボロボロだったけどな」

「あ……そうか。じゃあ余計に落ち込んでるわけか」

そろそろカウンターにめり込むんじゃないかと心配するほどに穰子の顔が沈んでいく。

これじゃ埒が明かない。どうしたものかと思い、ふと水織の視線が奥の浴場へと繋がる戸に触れた。

若干荒療治だが、何もしないよりかはマシか。心の中で呟くと、横のにとりに声をかける。

「なあ、ちょっと手伝ってくれないか」

「ん？ 何をするのさ」

「ボイラー室行つて、お湯を用意してほしい。女湯だけ」

「……え！？ も、ももしかして私と一緒に」

「はあ？ んな訳わかんないこと言つてないで手伝ってくれ」

と言つて何故か赤面していたにとりをボイラー室へと追いやると、水織は二人の頭をもう一度べしべしと叩いてみた。やはり反応はなく、魂が口から抜け出しているような顔のままだった。

「いっぺん顔洗ってシャキツとしろつての。お前らが元気じゃないとこつちも調子狂うだろ」

不意に漏れ出た言葉に、自分でも驚いた。

心の奥がむず痒いような謎の感触に首を傾げるも、そんな些細な

ことを気にしているわけにはいかない。

神社を直すのは、残念ながら水織だけでは到底出来ない。だから彼女たちの力は必要不可欠だ。

「水織、準備出来たよ？」

「おう。んじゃもう一つ付き合え」

「や、やつぱ混浴……あわわわ」

「にとりは穰子を抱えろ。オレは静葉を持つから」

「……は？ いや、えっと……うん」

言われた通り穰子を抱えたにとりを確認すると、水織は静葉を背負って女湯の方へと歩き出す。後を追うにとりはこれから水織が何をやるのかさっぱり分からず、怪訝そうな表情で歩く。湯船手前まで来ると、水織は首だけ動かしてにとりを見る。

「合図したら、オレと同じことをしてくれ」

「え？ ああ、うん」

何をするのだろうか。にとりは水織の動きを注視し身構える。

水織は背負っていた静葉を抱えると――驚くべくことに湯船に向かって放り投げた。

「つて、えええええええッ！？」

「ほれ、にとりも」

「ほれ、にとりも、じゃないよ！ 一体何考えてんの！？」

「だーもう。うだうだ言わずにポイっ」と

続けて穰子もポイと放り投げられ、湯船に派手な水飛沫が爆ぜる。顎関節が外れたかのようにぽっかりと口を開き放心するにとりに対し、水織は一仕事終えた！ という達成感に打ちひしがれている

ような自信に満ちた顔をしている。

「ば、ばば、馬鹿！！二人は神様なんだよ！？それを、そんな風呂に放り込むなんて……」

「まあ見てなつて」

二人の沈んだ辺りでぶくぶくと水泡が浮かび上がっている。このまま溺死させてしまったらどうしようにとりは気が気でならないと、水泡が一つボコン、と大きく水面を震わせたかと思うと、次いでボコボコと湧きたつように水泡が激しくなり、突如水柱が一つ出来上がった。

「殺す気かあああああああッ！？」

全身ずぶ濡れの穢子が悪鬼の如し殺気を帯びた視線を水織に向けすぐさま掴みかかった。

「馬鹿水織！！神様って言ったってこんなことされりゃ溺れたりするのよ！？それなのに何てことしてるのよ！？」

「おう、元気そうだな」

「ち、があああああああうッ！？」

がくがくと揺すぶられる水織の後ろでは、にとりが遅れて起き上がった静葉を助けている。

「し、死ぬかと思った……けほ、げほッ」

「あわわわ……！ご、ゴメンなさい！悪いのは全部水織で、私はそのお」

「どうしてこんなことしたのよ水織！」

「ずっと前にオレが落ち込んだ時、爺ちゃんに同じことをされた

のさ。どうだ、ちょっとはスッキリしたか？」

「そ、そんなわけ……」

光を取り戻した表情がまた曇る。

それでも、水織としては会話が出来る状態になっただけで十分だった。

「今年の収穫祭とやら、あの神社でやる」

収穫祭と神社という二つのキーワードに反応し、静葉と穠子が顔を上げ水織を見た。

「紫さんから許可はもらった。この銭湯の売上金は自由に使っていてさ」

「で、でも秋はもう終わるんだよ？ それまでに神社を直すなんて」「神社を直す方はオレも手伝う。大急ぎで修理して、収穫祭には間に合わせる」

「だけど……」

「お前らにとつて年に一度の晴れ舞台だろ？ ここまで世話になったお礼に、オレもそれを手伝いたいんだ」

「水織……」

若干潤んだ視線が、何だかくすぐったくって水織はくるつと踵を返した。

「んじゃ、オレは里の大工さんに話してくるから。それと、今日は銭湯休み」

戸口まで早足で向かい——と、不意に思い出したかのように振り返って小さく笑った。

「そうそう。お前ら、早く着替えないと風邪引くぞ」
「だ、誰の所為だッ！」

穰子が投げた風呂桶を危なげなく避けると、水織はそのまま走り去ってしまった。

浴場に残された三人は、しばらく呆けたまま戸口の方を見つめていた。

「……無茶苦茶な人だねえ、水織って」

「落ち込んでるからって女の子を普通お風呂に放り込む？」

「でもまあ……おかげで元気は出たけど」

その奇想天外過ぎる水織の励まし方には、静葉と穰子もその顔に小さく苦笑いを浮かべることしか出来なかった。

第三十四話 奇抜な激励（後書き）

水織君暴走回。

罰当たりってレベルじゃねーぞ！

次回1月15日予定、です。

では、待て次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1252x/>

東方泉遊録 ~ autumn hot spring ! ~

2012年1月12日21時52分発行